

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第40集

小籠北遺跡

— あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書 —

1999・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

小籠北遺跡

— あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書 —

1999・3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

四国横断自動車道路南国～伊野間の開通や明石大橋の開通など、四国四県のネットワーク化はさらに拍車がかかっています。加えて、本県では「平成14年高知国体」の開催を控え、急速に各種開発事業が展開されつつあります。

こうした情勢のなか埋蔵文化財の取り扱いに関しては、より迅速且つ円滑な対応が求められています。

当センターにおきましては、発掘調査等の迅速適正化に向けて鋭意取り組みを進めたいと存じますので、関係方面におかれましても埋蔵文化財の保護について、より一層のご理解とご協力をいただきますよう、お願い申し上げます。

本書は、あけぼの道路建設工事に伴う小籠北遺跡の発掘調査報告書です。調査資料として地域の歴史の再生に活用され、文化財保護の一助ともなれば幸いに存じます。

平成11年3月31日

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター
所長 古谷 碩志

例 言

1. 本書は、国道195号線道路改良工事（あけぼの道路建設）に伴い、高知県土木部道路課の委託を受けて高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成10年度に実施した小籠北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 小籠北遺跡は、高知県南国市小籠字三ノ堀・字佐波為に所在する。
今回の調査区は字三ノ堀にⅠ区（548m²）・Ⅱ区（892m²）・Ⅲ区（811m²）・Ⅳ区（397m²）を、字佐波為にⅤ区（1, 333m²）を設定した。
3. 調査は、平成10年6月8日～9月11日の間に実施し、調査後、整理作業を行った。
調査番号は、98-11RNKである。
4. 調査体制は以下のとおりである。
 - (1) 調査員 山本 哲也 高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第1班長
小嶋 博満 同 専門調査員
武吉 眞裕 同 非常勤職員
 - (2) 総務担当 大原 裕幸 同 主幹
5. 本書の編集は、山本、武吉が行い、執筆は以下のとおり分担した。
第Ⅰ～Ⅱ章 小嶋
第Ⅲ～Ⅳ章・第Ⅴ章2. 畝状条溝群の形成とその性格 武吉
第Ⅴ章1. 小籠北遺跡の沿革 山本
6. 整理作業・報告書作成等においては、下記の方々の協力を得た。
記して感謝の意を表したい（文中敬称略）。

松木富子 宮地佐枝 橋田美紀 澤本友子 黒岩佳子
山本由里 矢野 雅 岩貞泰代 飯田 緑 益井和子
7. 発掘調査においては、地元小籠地区、高知県南国土木事務所に全面的なご協力をいただいた。
また、池知良一、平山尚男、平山長、永吉豊茂、竹平増井の諸氏にはいろいろとご協力・ご援助をいただいた。文末ではあるが、心からお礼申し上げたい。

本文目次

第Ⅰ章	調査にいたる経過	1
1.	調査の経緯	1
2.	調査の経過	1
第Ⅱ章	周辺の地理的歴史的環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	5
第Ⅲ章	調査の概要	9
1.	調査の方法	9
2.	地形の概況と地層の堆積状況	10
第Ⅳ章	検出遺構と出土遺物	15
1.	遺構	15
2.	出土遺物	36
第Ⅴ章	まとめ	41
1.	小籠北遺跡の沿革	41
2.	畝状条溝群の形成とその性格	43

挿 図 目 次

- Fig. 1 小籠北遺跡位置図
Fig. 2 試掘トレンチと本調査範囲
Fig. 3 南国市周辺の遺跡分布図
Fig. 4 周辺の遺跡・小籠北遺跡の位置図
Fig. 5 小籠北遺跡調査区配置図 (1/1250)
Fig. 6 I区TR-101北壁の地層断面図 (1/40)
Fig. 7 IV区南壁の地層断面図 (1/40)
Fig. 8 V区TR-501西壁の地層断面図 (1/40)
Fig. 9 1998年度調査・小籠北遺跡遺構分布全図 (1/400)
Fig. 10 小籠北遺跡I区遺構全図 (1/200)
Fig. 11 小籠北遺跡IV区遺構全図 (1/200)
Fig. 12 小籠北遺跡II区遺構全図 (1/200)
Fig. 13 小籠北遺跡III区遺構全図 (1/200)
Fig. 14 小籠北遺跡V区遺構全図 (1/200)
Fig. 15 I区畝状条溝群の横断図 (1/40)
Fig. 16 II区畝状条溝群の横断図 (1/40)
Fig. 17 II区畝状条溝群の横断図 (1/40)
Fig. 18 II区畝状条溝群の縦断図 (1/40) III・IV区畝状条溝群の横断図 (1/40)
Fig. 19 IV区畝状条溝群の横断図 (1/40)
Fig. 20 IV区畝状条溝の横断図 (1/40) V区畝状条溝群の横断図 (1/40)
Fig. 21 畝状条溝群の走向グラフ・I区SX-102平面図と断面図 (1/40)
Fig. 22 I区SX-101のトレンチ開削平面図と断面図 (1/40)
Fig. 23 II区SX-201・202、V区小トレンチ、遺構等断面図
Fig. 24 小籠北遺跡出土遺物実測図 (1～12)
Fig. 25 小籠北遺跡出土遺物実測図 (13～22)
Fig. 26 小籠字佐波為、字三ノ堀地区の地割り状況復元図

表1 小籠北遺跡発掘調査出土遺物観察表

表2 小籠北遺跡出土遺物集計表

図 版 目 次

- PL. 1 小籠北遺跡調査区遠景（土佐希望の家方面より北西麓を望む）
小籠北遺跡調査区全景（土佐希望の家方面より北西麓を望む）
- PL. 2 I区TR-101北壁の地層断面（北東を望む）
I区遺構検出作業（東を望む）
- PL. 3 I区北東角部畝状条溝群の検出状況（西を望む）
I区畝状条溝群の完掘状況（西を望む）
- PL. 4 I区畝状条溝群の完掘状況（北を望む）
I区畝状条溝群の完掘状況（東を望む）
- PL. 5 I区SX-101（倒木痕跡）へのトレンチ開削状況（北を望む）
I区SX-102（倒木痕跡）の半截状況（南を望む）
- PL. 6 II区調査前の風景
II区D-218埋積土上面での土器片出土状況（北を望む）
- PL. 7 II区D-219埋積土上面での土器片出土状況（北を望む）
II区畝状条溝群の完掘状況（北を望む）
- PL. 8 II区SX-201（倒木痕跡）の半截状況（南東を望む）
II区SX-202（倒木痕跡）をD-310が切る状況（写真右下）
- PL. 9 III区畝状条溝群の手掘り作業（南を望む）
III区畝状条溝群の完掘状況（北を望む）
- PL. 10 IV区現代ユリ畑の畝跡（南を望む）
IV区畝状条溝群の検出状況（北東を望む）
- PL. 11 IV区III層上面での土器片出土状況
IV区畝状条溝群の完掘状況（南を望む）
- PL. 12 V区調査前の風景（北を望む）
V区TR-501西壁の地層断面（北西を望む）
- PL. 13 V区水路跡SD-501の手掘り作業（西を望む）
V区水路跡SD-501バンク西壁（EP-507サイド）
- PL. 14 V区畝状条溝D-501の完掘状況（西を望む）
V区条溝群完掘状況（南を望む）
- PL. 15 V区条溝群完掘状況（東を望む）
石鏃とその採取地点に開削した小トレンチ（東を望む）
- PL. 16 出土遺物1
- PL. 17 出土遺物2

第Ⅰ章 調査にいたる経過

1、調査の経緯

今回の調査は一般国道195号線改良工事（あけぼの道路・南国市岡豊町中島～土佐山田町中組間・6.7km）に伴う発掘調査である。平成10年4月、高知県南国土木事務所から高知県教育委員会を経て、高知県文化財団埋蔵文化財センターに対して発掘調査業務委託依頼があり、これを受託して同年6月から南国市小籠の本年度工事施行区域について調査を実施した。

国道195号線は高知市と徳島県とを結ぶ重要な幹線道路であり、同時に、高知市東部から南国市市街を経て土佐山田町中心街を結ぶ主要な生活・産業道路でもある。日常生活を送るうえでは欠くことのできない道路ではあるものの、近年の交通量の激増等に加えて市街地の中央部を走行するために、特に南国市後免町・土佐山田町西本町、東本町での渋滞事情は著しいものがある。このため、円滑な道路交通網整備の面からも早くから市街地を離れた場所でのバイパス道路の建設が望まれていた。

あけぼの道路は、195号線南国バイパスとして高知市東部から県道八幡大津線・東道路・県道南国インター線・県道前浜植野線にアクセスするものであり、JR土讃線の北側を東西方向に走行する路線である。事業着工は平成2年度からで、平成16年度が完成予定年度である。

当該道路計画地の周辺遺跡としては、南国市小籠遺跡・東崎遺跡などの広範囲な弥生時代後期末～古墳時代前期の集落跡や古代～中世・近世遺物散布地が点在している。

あけぼの道路建設工事に伴う調査としては、平成6年から継続して調査を行っており、今回の調査区からさらに東側にかけての工事予定区域についても、当該工事計画の進捗状況にあわせて、順次、試掘調査等の発掘調査が行われる予定である。

2、調査の経過

小籠北遺跡は、平成9年8月25～9月2日の間に実施された試掘調査（480㎡）の結果、16ヶ所のトレンチ調査のうちトレンチ7・8・13・14から中近世の遺物が確認され、トレンチ9～12・15・16では溝状（畝状）の遺構が検出されて中近世の遺物が出土したことから、5,377㎡の範囲内について本発掘調査が必要であると判断された(Fig3)。

本発掘調査は、平成10年6月8日から着手し、豪雨や猛暑に悩みながらも、9月上旬に遺構等の最終測量を経て、9月11日、埋め戻し及び機材撤収等の全ての作業を終了した。

道路及び水路等現況施設の所在区域や、遺物包含層・遺構等の存在が確認されなかった範囲を除いて、総発掘面積は4,000㎡である。

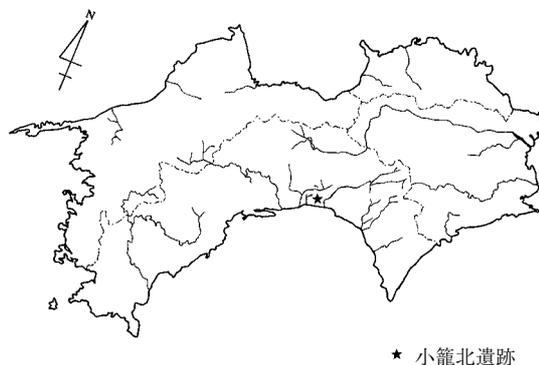


Fig.1 小籠北遺跡位置図

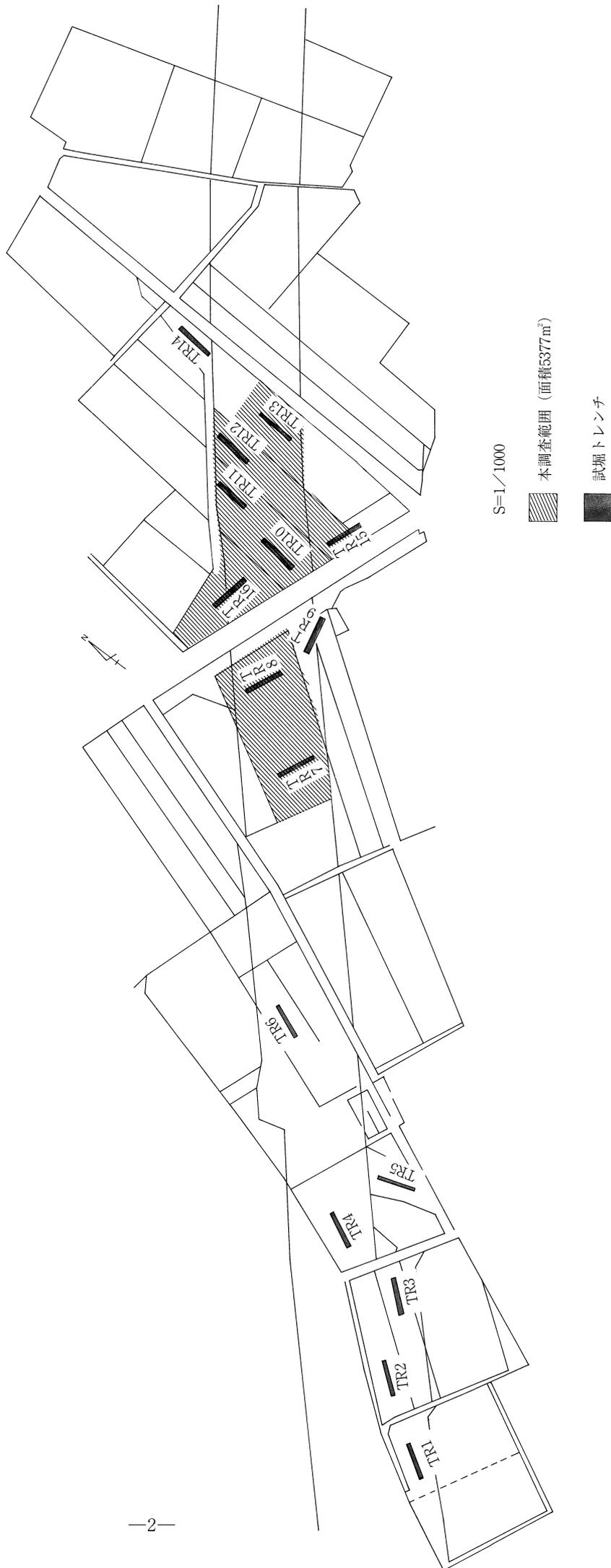


Fig.2 試掘トレンチと本調査範囲

第Ⅱ章 周辺の地理的歴史的環境

1、地理的環境

南国市は高知県の中央部に位置し、北側には高峻な四国山脈の山地を抱え、南には豊潤な香長平野が広がり、さらに南には太平洋に面している。人口は平成10年10月31日 現在、49,455人を数え、面積は125km²である。

ここに報告する小籠北遺跡は、南国市小籠字佐波為・三ノ堀に所在し、J R土讃線後免駅から北西方向約2kmの場所に位置する。遺跡周辺の標高は、10.50～11m前後を測り、土地利用の現況は水田及びハウス等である(Fig2)。

当遺跡の西側には南国東道路が南北に走り、北側で国道32号線と合流している。また、南には国道195号線・国道55号線が東西に走っている。なお、遺跡所在地に隣接する県道は、県道249号後免中島高知線である。

南国市の平野地形は、大別して古期扇状地、新期扇状地、三角州、砂丘等に分けることができると考えられている。その内容を概略すると以下のとおりである。

古期扇状地——野市台地と長岡台地（古物部川の堆積作用によって形成された長岡台地は長さ8km、最大幅2km、礫層堆積物でおおわれている。）

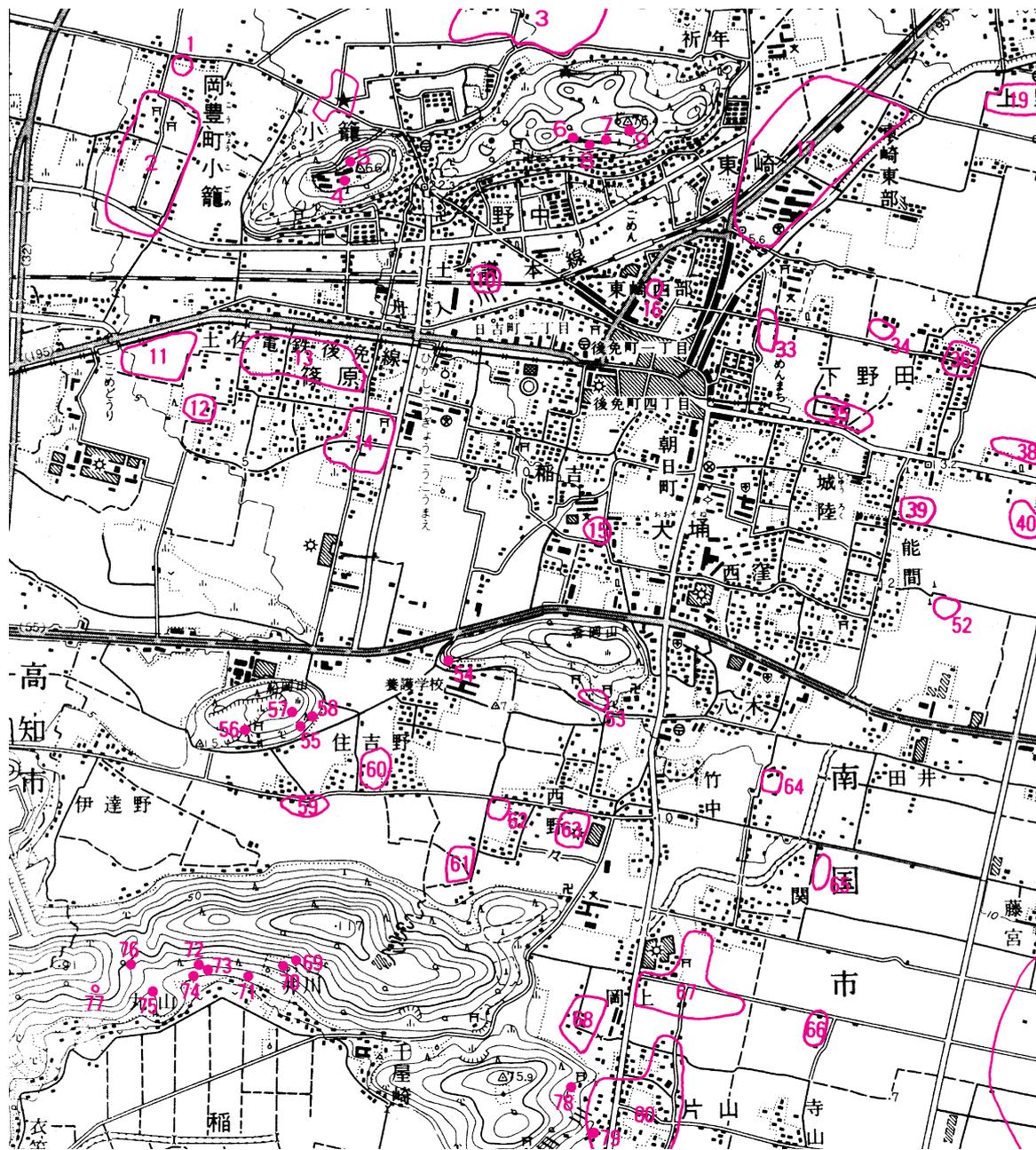
新期扇状地——香長平野の大部分（古期扇状地「長岡台地」の南側と西側では、新期扇状地が広範囲に発達しており、南国市域の平野部の主体をなす。遺跡北部の国分川流域では、久礼田新期扇状地・国分・甘枝新期扇状地・岡豊新期扇状地等がみうけられる。扇状地の長さで最大幅の和は4～5km前後で、小規模である。）

三角州——長岡台地の西南、長崎や明見には低湿三角州がみられ、新期扇状地の前面に位置する十市・稲生・里改田には広域な三角州が形成されている。

砂丘——浜改田本村の砂丘を代表に、海岸部の三角州前面に東西に延びる砂丘が形成されている。

今回調査した小籠北遺跡は、上述した南国市域の平野地形のなかで、古期扇状地である長岡台地の西端縁辺部に位置している。調査区から検出された礫層は、上面で標高10.0～10.30m前後であり、北東から南西方向にかけて緩やかに傾斜して堆積していた。

同じ長岡台地の西端縁辺部に所在する小籠遺跡では、弥生後期中葉～古墳時代初頭の集落跡や古代の土坑（9c末～10c）・掘立柱建物跡（12c）などが検出されているが、比高差が3～4m程小高い今回の調査区では該当期の遺構等は検出されなかった。検出遺構の内容や密度、倒木痕跡の存在からみても、調査区周辺は古代から中世にかけて長く台地上の林野として未開墾地の景観を呈していたことが推測される。



南国市周辺の遺跡名と時代

NO	遺跡名	時代	NO	遺跡名	時代
1	小籠土居城跡	中世	57	住吉山3号墳	古墳(消滅)
2	小籠遺跡	弥生~近世	58	住吉山4号墳	古墳(消滅)
3	土島田遺跡	古墳~近世	59	野津合遺跡	古墳~平安
4	越戸1号墳	古墳(消滅)	60	乱戸遺跡	弥生~平安
5	越戸2号墳	古墳(消滅)	61	茶田遺跡	古墳
6	坂折山1・2号墳	古墳(消滅)	62	神田遺跡	古墳~平安
7	年越山1号墳	古墳(消滅)	63	郷ノ前遺跡	古墳
8	年越山2号墳	古墳(消滅)	67	岡の上組遺跡	弥生~中世
9	年越山3号墳	古墳(消滅)	68	西ノ芝遺跡	弥生~中世
10	野中灰寺跡	平安	69	井川1号墳	古墳
11	忠兵衛遺跡	中世	70	井川2号墳	古墳
12	北野寄遺跡	弥生~平安	71	馬背古墳	古墳
13	若宮ノ東遺跡	弥生~中世	72	馬背東1号墳	古墳
14	北泉遺跡	弥生~平安	73	馬背東2号墳	古墳
15	大篠遺跡	弥生	74	馬背西1号墳	古墳
16	西鶴塚遺跡	古墳~平安	75	丸山古墳	古墳
54	吾岡遺跡	古墳(消滅)	76	坂ノ松古墳	古墳
55	住吉山1号墳	古墳	77	丸山五輪塔	中世
56	住吉山2号墳	古墳(消滅)	★	小籠北遺跡	縄文・弥生・中世~近世

Fig.3 南国市周辺の遺跡分布図

2, 歴史的環境

小籠北遺跡の所在する古期扇状地（長岡台地）縁辺部は、香長平野のなかでも南国市北部から土佐山田町西部において弥生～古墳・古代～中世の遺跡が集中する区域である。遺跡数のうち中世を除くと弥生～古墳時代にかけての遺跡数が多い。遺跡の消長としては、弥生後期中葉前後から古墳時代初頭にかけての拠点集落（南国市東崎遺跡・小籠遺跡・金地遺跡・土佐山田町ヒビノキ遺跡など）がこの長岡台地の縁辺部に新たに成立し、その他の遺物散布地を含めると弥生後期後半以降の遺跡数の増加が顕著に認められる。この時期には、弥生時代全般を通して県下最大の母村集落であった南国市田村・田村遺跡群の弥生集落が弥生後期後半以降には衰退しており、対照的である。当該期の弥生遺跡等は長岡台地の縁辺部を軸にして帯状に拡散してくる状況を呈している(Fig4)。

一方、長岡台地の北辺である国分川崖線から国分川流路一帯にかけては、吉田土居城跡・廣井土居城跡（消滅）などの中世城館跡の所在が知見されているものの、散布地の吉田遺跡（古墳～中世）以外、遺跡は発見されておらず、遺跡の立地は台地縁辺部に比べて極めて希薄な状況を呈している。このあたりは現在も土地の大字に「廿枝」の名が冠せられ、「古市」の地名もみられるが、古代～中世の様相についてはいまひとつ不明瞭である。地形的には国分川の氾濫原であったとみられるが、流路を隔てて対岸には土佐国分寺跡・土佐国衙跡が所在しており、国分川を介した物資の中継地として「市」としての機能をもつ船着場等の集荷地点が周辺に存在していたことも考慮される。

台地の西縁辺部に立地する小籠遺跡(Fig4-2)では、最近の調査により弥生前期末の大溝（Ⅰ区・SD1）・後期中葉～古墳時代初頭の竪穴住居跡22棟（うち18棟が後期末～古墳時代初頭）・6c後半の竪穴住居跡（Ⅱ区・ST10・作り付けカマド）・古代の遺構（Ⅱ区、土坑19基・溝1条・ピット、Ⅵ区ではSB1、9c前半～10c初頭）・中世の遺構（Ⅱ区、SB1・2・SD69、13c）などが検出され、さらにⅦ区では包含層（Ⅴ・Ⅵ層）から初期須恵器（TK216・甕）が出土するなどの成果が得られている。小籠遺跡の調査から、弥生後期中葉～古墳時代初頭の拠点集落跡や古墳時代中期～後期の集落跡・平安前期～中期の貯蔵庫群等の存在が明らかとなり、従来、遺跡の内容が不明であった空白域を埋める資料として重要である。また、この遺跡の立地場所は長岡台地の西端にあたり、地形的には古期扇状地から新期扇状地へ、続いて南国市明見方面への低湿三角州へと移行する変換地点に該当している。明見橋北側の小丘陵と小籠の丘陵を結ぶライン上では、遺跡所在地は高知市大津方面の低湿地・介良川流域・高知市介良方面・南国市篠原へと至る経路の東側戸口に位置しており、小舟等を利用した人・物資の移動等の存在を想定した場合、主要な交通路の要所として捉えることが可能である。弥生～古墳時代の集落跡等の形成過程には、居住地としての利便性に加えて、こうした地勢的な優位性も加味されたものと推察される。

小籠遺跡の東側丘陵上には、越戸1・2号墳（後期古墳・横穴式石室か・消滅）が所在していたことが知られており、周辺に集落が営まれていたことが推定されていた。ST10の検出からは、古墳時代後期の集落跡の一部が確認されており、古墳被葬者の帰属集落であるかは今後の検討課題であるものの、この地域の後期古墳の築造区域に関連した集落跡であることが推測される。また、TK216に比定される初期須恵器の出土は、さらに先行する集落跡等の存在を予見するものである。

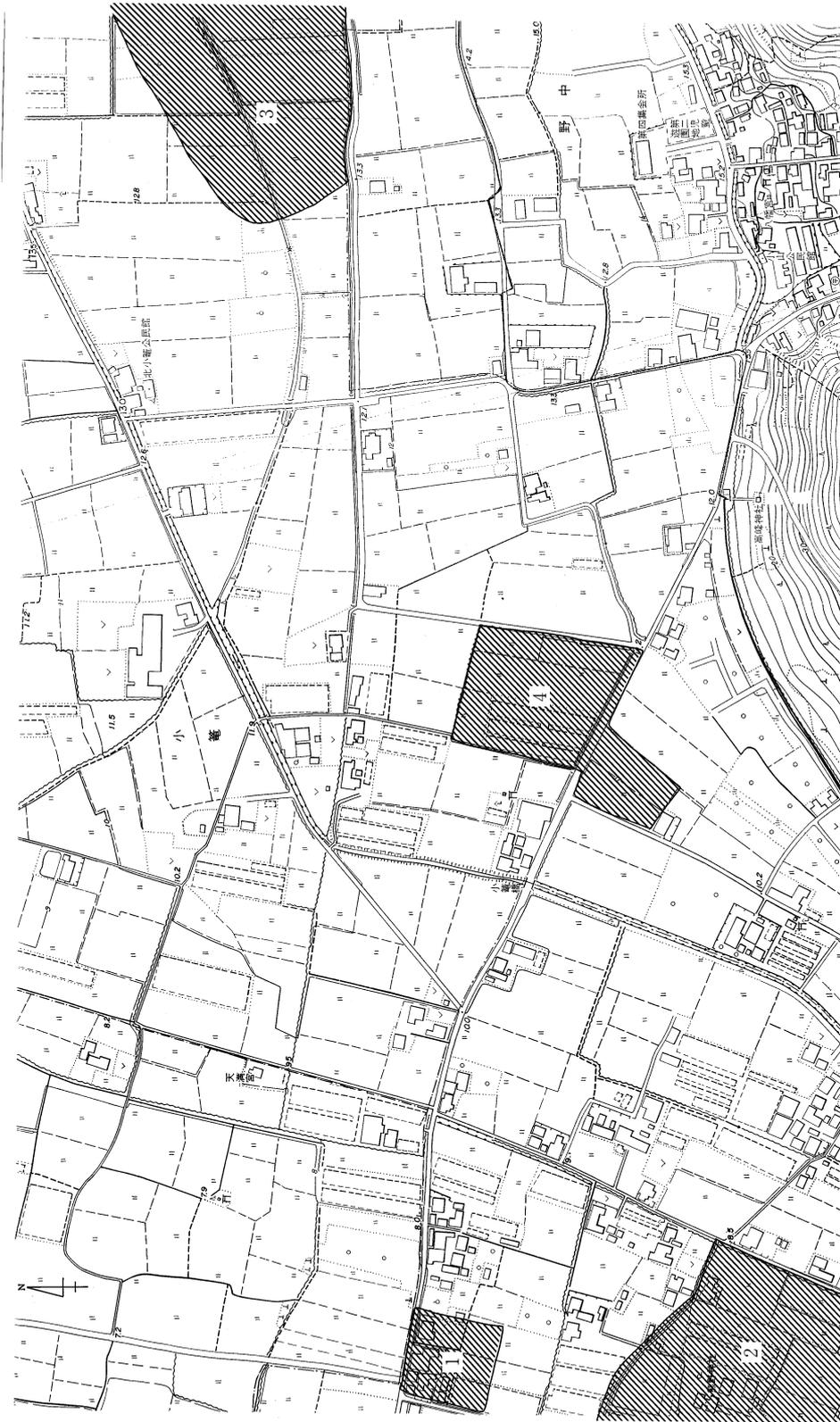
同丘陵の南東麓には、平安時代前半に建立された野中廃寺跡が所在している。高知市秦泉寺廃寺

跡と平安前半期の同型瓦を持つこの寺院跡については、伽藍関連遺構（基壇等）とみられる隆起地形の存在と瓦片の出土以外は、詳細は判明していない。しかし、土佐の古代史を紐解くうえでは重要な古代寺院跡であり、土佐国衙跡と遠く離れた南の場所になぜこの寺院跡が建立されたのか、解明すべき問題点は大きい。周辺には、寺院跡の所在のみで、これまで他の遺跡は知られてはいなかったが、約1.2km程西側の小籠遺跡から9c～10c初頭に位置づけられる貯蔵庫群・建物跡等が検出されており、寺院跡をとりまく景観について復元する初めての手掛りが得られている。小籠遺跡が大津から浦戸湾口へ、また明見から介良（気良郷）へと至るうえでの交通の要所であるとすれば、野中廃寺跡の位置関係は長岡台地の南縁辺から東にかけて土佐山田町・岩次遺跡（香美郡衙推定地）と物部川を結ぶ経路のなかで主要な場所を占めており、平安期の寺院造営が古代交通路の開発・整備のうえで密接な関係を有していたことが看取される。巨視的にみれば、野中廃寺跡の占地には浦戸湾口を含む土佐郡と長岡郡、香美郡とを結ぶ郡衙接続路の設置・維持・経営を背景にするものであった可能性もたれる。

今回の調査対象地である小籠北遺跡は、小籠遺跡の北東約625mにある遺物散布地である。遺跡北東には古墳～近世の散布地である土島田遺跡が所在し、両遺跡の中間地に位置する。遺跡の中央部を通じる県道249号線は、かつて「大道」と呼称された旧街道で、藩政期には城下から一宮・布師田・中島を経て小籠に至り御免（後免）から安芸へと向かう主要街道であった。調査地は、道路北側の小字「三ノ堀」と南側の小字「佐波為」である。「三ノ堀」は遺跡北西の吉田土居城跡に関連した字名であり、「佐波為」は田の神である「おさばい様」にちなむ名称である。その他の土地の小字名としては、遺跡西側に土居・西土居・浜田・寅居などの地名が認められる。「長宗我部地帳帳」に記された地名としては、「ウマツカ」「ハマタ」「トライ」など現在の地名と符号するものもあるが、不明もあり、近世以降に名称が冠せられた土地が多いと考えられる(Fig3・4)。

参考文献

- 島田 豊寿 「第一編 地理」『南国市史』上巻 昭和54年10月 南国市
出原 恵三編『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997.9
山本 哲也・近森 泰子・中山 泰弘「野中廃寺跡」（91-5NN）『高知県埋蔵文化財センター年報1』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992・9
浜田 恵子「小籠・上末松地区確認調査（97-16RNK）」『高知県埋蔵文化財センター年報第7号』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1998・7



小籠北遺跡周辺の遺跡名と時代

NO	遺跡名	時代
1	小籠土居城跡	中世
2	小籠遺跡	弥生～近世
3	土島田遺跡	古墳～近世
4	小籠北遺跡	縄文・弥生・中近世

Fig.4 周辺の遺跡・小籠北遺跡の位置図 (国土地理院 高知)

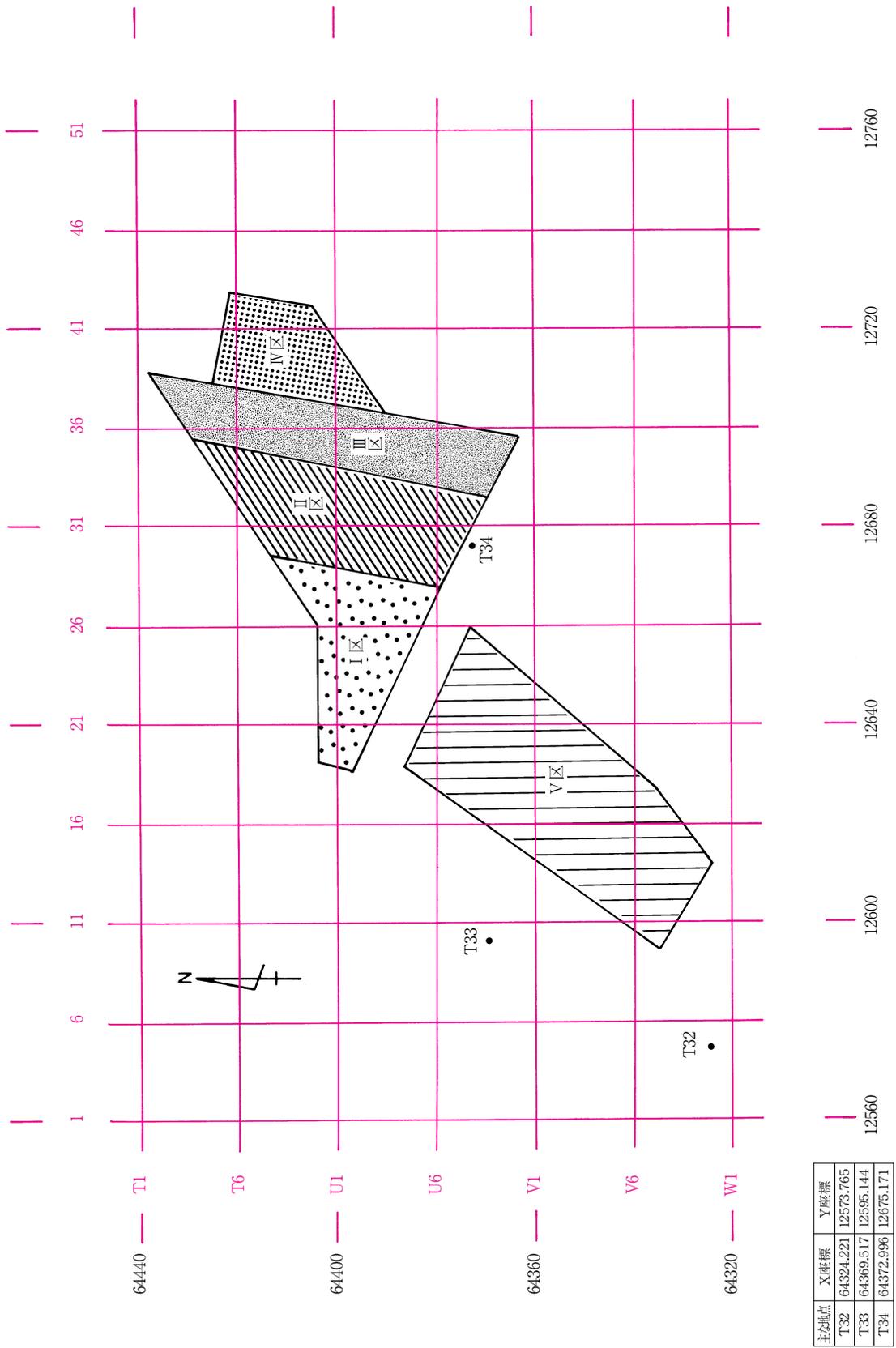


Fig.5 小籠北遺跡調査区配置図 (1/1250)

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

調査に先立ち、3・4級基準点T-32、T-33、T-34の座標に基づいて4mメッシュ入りの調査設計用平面図（1/500）を作成し、調査区の区割りと実掘範囲の策定に用いた。調査対象地の中央を横断する県道後免中島高知線を境に、北側区域を既存の用水路や境界壁によって西から東の順にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区と区割りし、同線の南側区域をⅤ区とした。隣接する用水路と境界の保全、及び土層観察用壁面の確保を期し、それらのラインより1.5～1.0m幅を減じて実掘枠を定めた。これによる実掘面積の総計は3,981m²であり、調査区毎の内訳は、Ⅰ区=548m²、Ⅱ区=892m²、Ⅲ区=811m²、Ⅳ区=397m²、Ⅴ区=1,333m²となっている(Fig5)。

発掘に当たり、前年度の試掘調査時に耕作土の大半を剥ぎ終えたⅤ区を除く各調査区については、耕作土（Ⅰ層～Ⅱ層）を重機で剥除した後、堆積時期の不明な黒ボク土（Ⅲ層）と、それに覆われた性格不詳の条溝群の手掘調査を第一段階の課題とした。排土置場や通路の確保など工程上の問題から、作業はⅠ区から着手した後、Ⅲ区を経てⅤ区、Ⅳ区、Ⅱ区へと移る、いわば飛び地づたいの展開となった。この過程を通じて、黒ボク土層（Ⅲ層）がその上面を除き無遺物である可能性が強まり、実際には重機によって畝状条溝群の露肩水準まで剥ぎ取った部分が多い。畝状条溝群は近似の間隔で並列する部分が多く、それらと直交する横断直線下に、幅25cm程度のバンクを遺留しつつ条溝内に埋積する黒ボク土を手掘りした。また、変則的な方位を呈する個々のケースや、Ⅴ区南部に見られる用水路跡に関しても、それぞれの方位に直交する小バンクを残しつつ、条溝内の手掘りを進めた。これら条溝の直下付近にあたる水準では、過去の倒木痕跡と見られる異相部分が散見された。それらに対しては、調査の主眼を成因解明の一点に注いで検出状態と断面の精査を行い、合計4基の精査を限界とした。地層堆積と遺構、遺物の分布状況を探るための深掘トレンチは、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅴ区に各一条ずつ開削し、精査を行なっている(Fig9)。

記録図面の縮尺は1/20とし、平面図は、上記の基準点から光波測量機を用いて設定した4mグリッド単位の手描きとした。地層断面図やエレベーション図作成時の測高にあたっては、レベル測量機の眼高を標高12.000mに設定した。写真の撮影には、35mmフィルム（カラー、白黒）を主用した。遺物は層別別に取り上げを行い、遺構の整理にあたっては畝状条溝跡に「D」、用水路跡に「SD」、倒木痕跡と見られる異相部分に「SX」の記号を用いた。個々の遺構単位には3桁のアラビア数字を付け、百の位を調査区のローマ数字に対応するものとし、十の位以下を順列番号に当てた。

2.地形の概況と地層の堆積状況

かつて、狭隘な山谷の岩盤を浸食して山裾の一带を沖積した古物部川や古国分川等の河川は、岩層を堆積して扇形に広がる扇状台地を形成した。これによって香長平野の東部に形成された台地部分を長岡扇状台地と称し、その西扇端付近に位置する当遺跡周辺の平坦地は、北面を西流する国分川の河道に沿って概ね東北東から西南西へと緩降する。

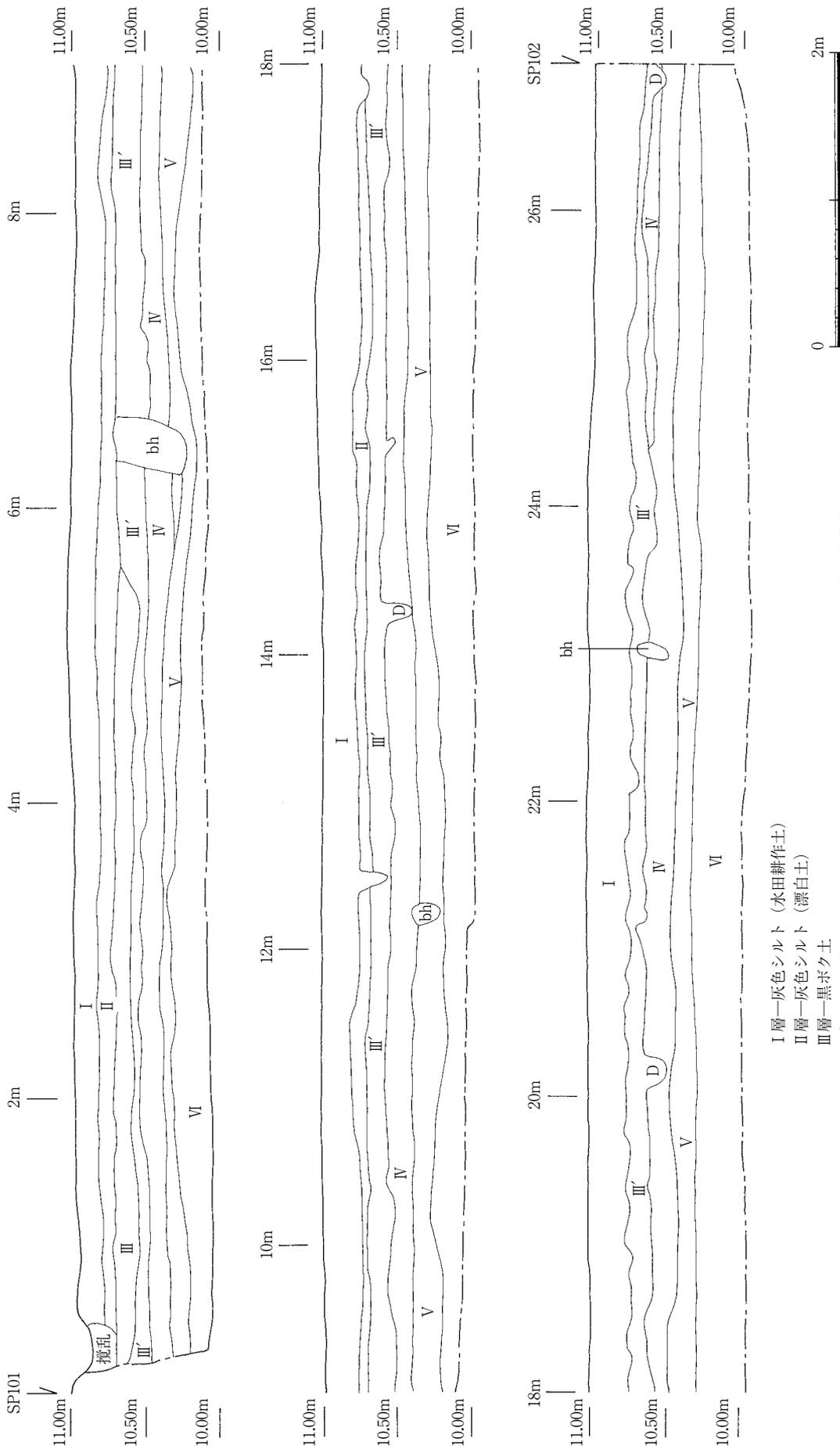
発掘調査の直前まで水田耕地であった各調査区における地表面の高度変化も、この地形を反映している。地表の水準は、東部のⅣ区およびⅢ区で11.20m前後の標高を測り、西に接続するⅡ区、Ⅰ区では、順次11.10m、11.00m前後の標高へと緩やかに低下する。県道後免中島高知線を挟んで南西に伸びるⅤ区では、10.60～10.50m前後の標高へと、やや顕著な地表水準の低下を見る。地表堆積の概況は、基本的に各調査区間で共通している。すなわち、水田耕作土のⅠ層（表土）は、還元状態の灰色シルトを主成分とする。次位のⅡ層は鋤床にあたり、無機鉱物の溶脱した灰白色シルトに少量の小型円礫が混じる。耕作土と鋤床の分化が判然としない部分も多く、この場合には耕作土（Ⅰ層）として一括した。主に古代から近世に渡る遺物細片の多くは、この鋤床低からの出土である。Ⅲ層は黒～黒灰色を呈する土壌であり、気層率が高く乾燥比重の低い土質から、黒ボク土に類した。平板状のバブルウォール型火山ガラスを含む一方、小型円礫を挟在する部分も散見(Fig23)する所から、プリニー式噴火による降下火山灰を母材として腐植を集積した二次堆積土と考えられる。Ⅲ'層では、黒ボク土に少量の黄褐色部分が混在する。Ⅲ''層は黒ボク土の下位で断続的に検出される鮮明な黄褐色～黄色を呈する軽質土の薄層であり、腐植の集積が存在しない点以外では、上位の黒ボク土と同じ土質が観察される。黒色部分と成因を共にする一連の堆積物であり、腐植の分解が進行した層準であろう。Ⅳ層は暗褐色の粘土交じりシルトであり、小型円礫を少含する。全ての調査区で検出された畝状の条溝は、このⅣ層上面の各所で細長く窪み、それらの内部に黒ボク土が埋積する。Ⅴ層は褐色の粘土交じりシルトであり、径10cm以下程度の円礫が混在する。Ⅵ層では、径20cm以下程度の大型円礫を主体とし、それらの間に黄色の粘土が詰まる。Ⅶ層は完全な円礫層であり、礫粒は20cm以下のものが多い。円礫の石種としては、固結性の脆弱な優白質砂岩が圧倒的に多く、ついで珪岩やチャート礫も見られる。Ⅷ層とⅨ層は、より深い水準まで掘削したⅤ区の西トレンチにおいてのみ確認しており、前者は小円礫（径約3cm以下）を含む褐色のシルト質粘土であり、後者は径約20cm以下の大円礫から成る。

Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅴ区にそれぞれ一条ずつ開削した深さ1m前後のトレンチ(TR-101,TR-201,TR-501)の壁面観察を限界とする上記層位区分を軸に、各調査区での遺構検出作業の過程で把握した遺物の包含状況等を踏まえて当遺跡の堆積経過を整理すると、次の推測が成り立つ。

すなわち、地層精査の下限に当たるⅨ層をはじめⅦ層やⅥ層を構成する大礫は、円磨を受けるが固結の脆い粗粒砂岩礫が主体であり、比較的強固な円礫と砂に淘汰された沖積世の中下流河床堆積物とは様相を異にする。これらの礫層に挟在するⅧ層は、北から南に垂下するシルト質粘土層であり、エネルギーの低い水勢を反映する運搬堆積物である。水成堆積に特有の斜交ラミナ（葉理）は、このⅧ層以外にもⅨ層からⅥ層に至る円礫層を通じて観察される。礫質のほか、現在の物部川水系や国分川水系等の掃流域から距離を置く立地環境等に照らし、これら各層は、洪積世の終末期に形

成された碎屑堆積物に近い性質の層準と推測し得る。Ⅵ層では円礫の間隙を黄色粘土が充填するが、Ⅴ層では含礫が激減して褐色を帯びた土壌成分が優勢となり、直上のⅣ層にかけて含礫の粒度も小化している。この一連の変化は、礫成分の減少、小化と土色の暗化という方向性によって特徴づけられ、気候の温暖化に伴う植皮の増大や堆積環境の変化を反映する可能性が考えられる。

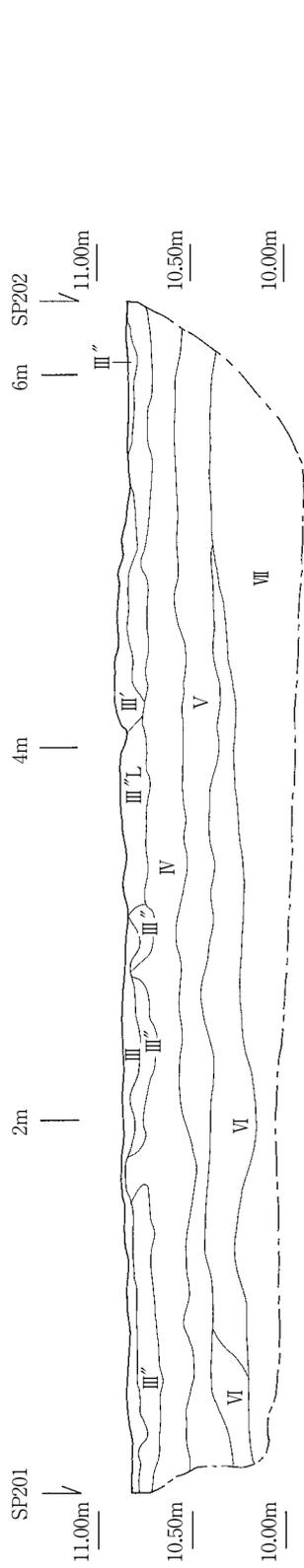
当遺跡で人的活動の形跡が認められるのはⅣ層上面の畝状条溝が皮切であり、Ⅳ層内およびⅤ層以下の各層位では、全くの無遺物、無遺構である。そこで問題となるのが畝状条溝の時期であるが、それらの部分に埋積する黒ボク土自体からは包含遺物が検出されず、時期判定の決め手を欠く。調査記録に留め得た限りでは、これら畝状条溝を覆う黒ボク土の上面付近が遺物包含の下限であり、該当する近世および近世以前の遺物細片 4点は、いずれも近世遺物を主含する上位層に所属した可能性を否定できない。これらの状況から、黒ボク土が二次堆積を完了した時期を近世もしくは近世以降まで下ると見るのが最も慎重な想定方と言えよう。黒ボク土の上位は、鋤床層と耕作土層であり、既述の土質から黒ボク土との連続性が明瞭に遮断されている。かりに、黒ボク土自体が水田耕作に用いられた場合、土色にも明然とした分化を生じない。出土遺物の章で詳述するような縄文時代から近世にいたる遺物を雑然と包含する耕作土や鋤床層の状態を勘案しても、恐らくは近世以降にいたって周辺の遺物包蔵地から搬入したシルト質の土壌であった可能性が高まろう。



- I層—灰色シルト (水田耕作土)
- II層—灰色シルト (漂白土)
- III層—黒ボク土
- III'層—黄褐色まじりの黒ボク土；I区では、主としてこの層準に畝状条溝群が見られる。
- IV層—暗褐色の粘土まじりシルト；少量の小円礫 (径約3cm以下) を含む。
- V層—褐色の粘土まじりシルト；円礫 (径約10cm以下) を含む。
- VI層—黄褐色粘土まじり大円礫 (径約20cm以下)。

注：図中のbhは、最近のビニールハウス杭による攪乱。
D部分は畝状条溝の断面。

Fig.6 I区TR-101北壁の地層断面図 縮尺1/40



II区TR-201西壁の地層断面図 縮尺1/40

III層—黒ボク土
 III'層—黄褐色まじりの黒ボク土
 III''層—黄褐色軽質土
 III'''層—黄褐色粘土と暗褐色土が混在
 IV層—暗褐色の粘土まじりシルト；少量の小円礫（径約3cm以下）を含む。
 V層—褐色の粘土まじりシルト；小円礫（径約3cm以下）を含む。
 VI層—黄褐色粘土と小円礫（径約4cm以下）が混在。
 VII層—大円礫（径約20cm以下）。

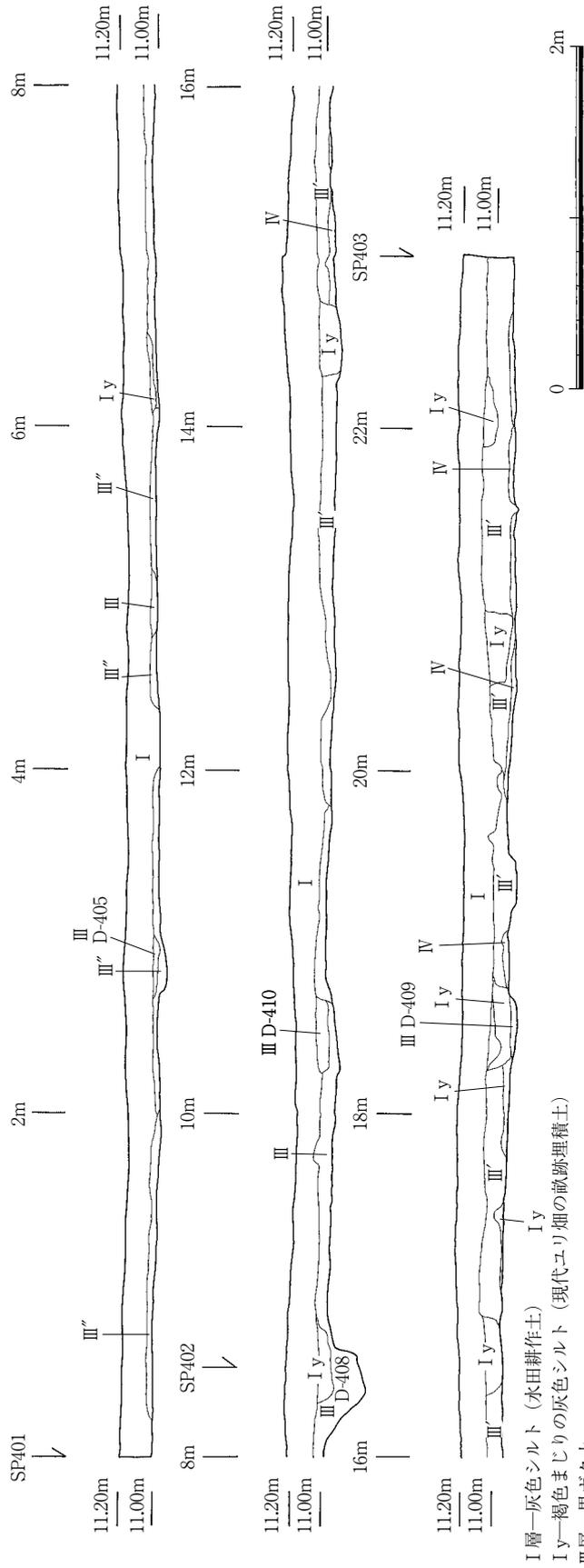
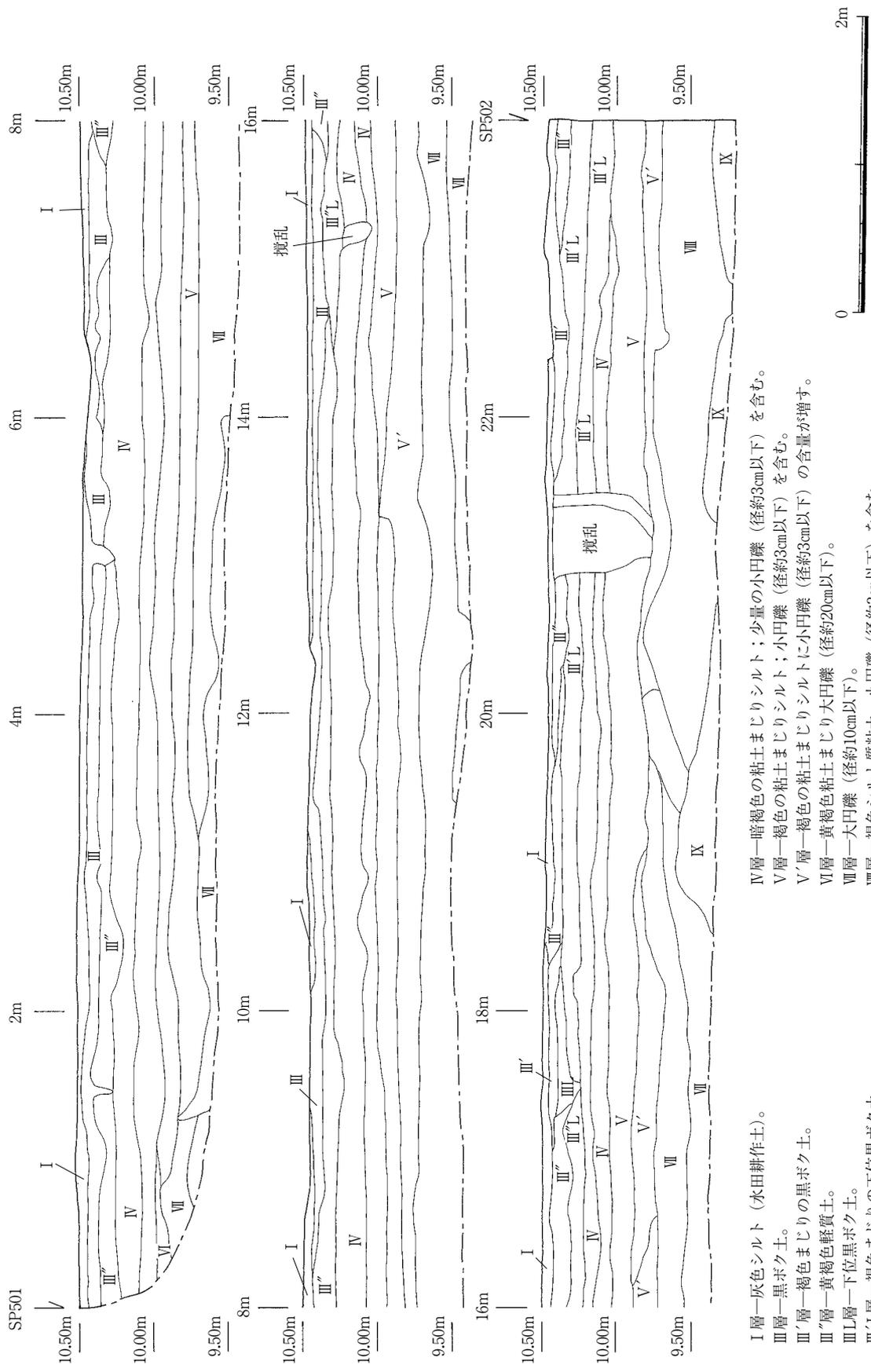


Fig.7 IV区南壁の地層断面図 縮尺1/40

I層—灰色シルト（水田耕作土）
 Iy層—褐色まじりの灰色シルト（現代ユリ畑の畝跡埋積土）
 III層—黒ボク土
 III'層—褐色まじりの黒ボク土
 III''層—黄褐色軽質土
 III'''層—暗褐色の粘土まじりシルト



IV層—暗褐色の粘土まじりシルト；少量の小円礫（径約3cm以下）を含む。
 V層—褐色の粘土まじりシルト；小円礫（径約3cm以下）を含む。
 V'層—褐色の粘土まじりシルトに小円礫（径約3cm以下）の含量が増す。
 VI層—黄褐色粘土まじり大円礫（径約20cm以下）。
 VII層—大円礫（径約10cm以下）。
 VIII層—褐色シルト質粘土。小円礫（径約3cm以下）を含む。
 IX層—大円礫（径約20cm以下）。

I層—灰色シルト（水田耕作土）。
 III層—黒ボク土。
 III'層—褐色まじりの黒ボク土。
 III''層—黄褐色軽質土。
 III'L層—下位黒ボク土。
 III'L'層—褐色まじりの下位黒ボク土。
 III''L層—下位軽質黄褐色土。
 IVa層—暗褐色の粘土まじりシルトに軽質黄褐色土がまじる；少量の小円礫（径約3cm以下）を含む。

Fig.8 V区 TR-501 西壁の地層断面図 縮尺1/40

第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物

1. 遺 構

当遺跡で認められる遺構は、畝状の条溝（D）群および用水路跡と見られる溝（SD）であり、すべてⅢ層（黒ボク土）の面剥ぎを完了したⅣ層上面において検出している。いずれの溝内にも黒ボク土が埋積するため、検出時には褐色系のⅣ層面に黒色の帯が縞を成して走る鮮烈な景観を呈した（PL3上段，PL10下段）。

畝状の条溝（D）はⅠ区からⅤ区に渡る全調査区に見られ、幅30～40cm前後、深さ10cm以下程度で、1.4～2.0mの間隔を保つ部分が主勢を占める。埋積する黒ボク土の断面には、基本的にラミナ（葉理）を観察し得ない。Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅴ区を通じて東南東—東北西の方位に並列するものが多く、それらグループにおける調査区毎の対真北平均傾斜度は、順次北偏西65度（Ⅰ区D-101～120）、74度（Ⅱ区D-201～227）、74度（Ⅲ区D-301～310）、76度（Ⅴ区D-503～507）を測る。Ⅳ区の中南部とⅤ区の中中部では時計回りに傾斜を強め、東南—北西の方位に並列し、前者の平均は北偏西61度（Ⅳ区D-401～408）、後者の平均は北偏西59度（Ⅴ区D-501、502）の値を示す。Ⅱ区では、上述した北偏西74度の方位に並列する条溝群に対し、北偏東16度の方位から直交するものが有り（D-228）、同様の痕跡はⅠ区の数箇所でも部分的に見られる。このほか、Ⅳ区の南端では、東北東—西北西の方位（北偏東65度）に伸びる一本の条溝も認められる（Fig.21参照）。

用水路跡と目される溝はSD-501の一条のみであり、断面形は畝状条溝と同じく偏平なU字形を呈する。Ⅴ区南部の東端に出現して18m余り西走した後、幅を0.8m前後から1.2m前後へと急広しつつ、北偏東70度前後の方位に転じて、流路を西南西に屈している。上流に当たる東端部では深さ7cm前後であり、溝底の標高水準は10.30m前後を測る。下流に当たる南端付近では、深さは15cm程度へと大化し、溝底の標高水準も10.15m前後に下降している。補強や漏水止め等の形跡は一切見られない。埋積土は黒ボク土のみであり、その断面にもラミナは観察されない。

これら二種の遺構を覆って埋積する黒ボク土には、バブルウォール型の火山ガラスが観察される一方、円磨を受けた極少量の小円礫が散見される。恐らくは九州方面と想定される給源火山から距離を隔てた当地において、黒ボク土に円礫が混在する状況は、少なくとも流水による運搬移動を経た二次堆積の結果であることの判定材料となる。当遺跡の全調査区に堆積する黒ボク土層には、畝状の条溝群や用水路跡と見られる溝の埋積部分を含め、層内の包含遺物と断定し得る資料を欠くところから、遺構年代の特定が不可能である。しかし、前章で述べた地層の堆積関係と上位層に集中する近世主体の遺物分布から、両種の遺構を覆う黒ボク土が二次堆積を終了する時期は、最も遅く見積った場合、近世か、もしくは近世以降にまで下り得るという結論に達する。また、Ⅳ区の遺構全図に破線で記録した北偏東9度の方位に1.5m前後の間隔並列する現代のユリ畑跡（水稻作の合間に、最近まで営まれていた）との比較において、方位や埋積土の相違を除く形態要素の点で驚くほど酷似する点も、遺構年代の遡上に警告を促そう。

以上のほか、下層の礫団が持ち上がる一方、その片方の側面に黒ボク土や褐色土が埋没したような様相を示す短径約2.0～2.5m・長径3.0m前後の平面楕円形を呈する異相箇所が散見された。それらの礫団は隆起の規模によって黒ボク土層の上面付近まで達するものや、黒ボク土層の直下に留まるものもある。人為によるものか、あるいは自然現象の結果であるかを判別するため、まずⅠ区の2基（SX-101, 102）についてトレンチ精査を行なった。その結果は、松山市の北久米浄蓮寺遺跡3次調査で検出された類種の痕跡に対して、松山市教育委員会が1994年に同報告書の中で倒木痕跡として公表した事実内容や科学分析結果をふまえて試行された現象解明のモデリング資料^{注1}と基本的に合致するものであった。そのモデリングに照らすと、持ち上げられた礫団をはじめ、埋没したかに見える黒ボク土や褐色土は、倒木に伴って樹根付着土も一緒に転倒した結果と見なし得る。層位関係から見て、倒木痕跡が畝状の条溝群より古いという点以外に時期を探る手立ては無く、さきの2基のほかはⅡ区における2基（SX-101, 102）の精査に止め、同類の実数を確認するには至らなかった。

なお、上記した遺構や倒木痕跡の外にも、Ⅳ層面では多様な平面形を呈する数多くの下凹箇所があり、直上を覆っていた黒ボク土の斑紋として検出された。半截あるいはトレンチ開削等の手段によって精査を進めた結果、遺存の不良な畝状条溝の断片と見られるケースや、Ⅳ層面の浅い起伏に起因すると見られるケースが大勢を占めており、別種の遺構と判定し得るものは皆無であった。

注1： 橋本雄一（倒木痕跡について）「第3章まとめ 1」

橋本雄一編『北久米浄蓮寺遺跡 3次調査地』（松山市文化財調査報告書42）松山市教育委員会・埋蔵文化財センター 1994・6

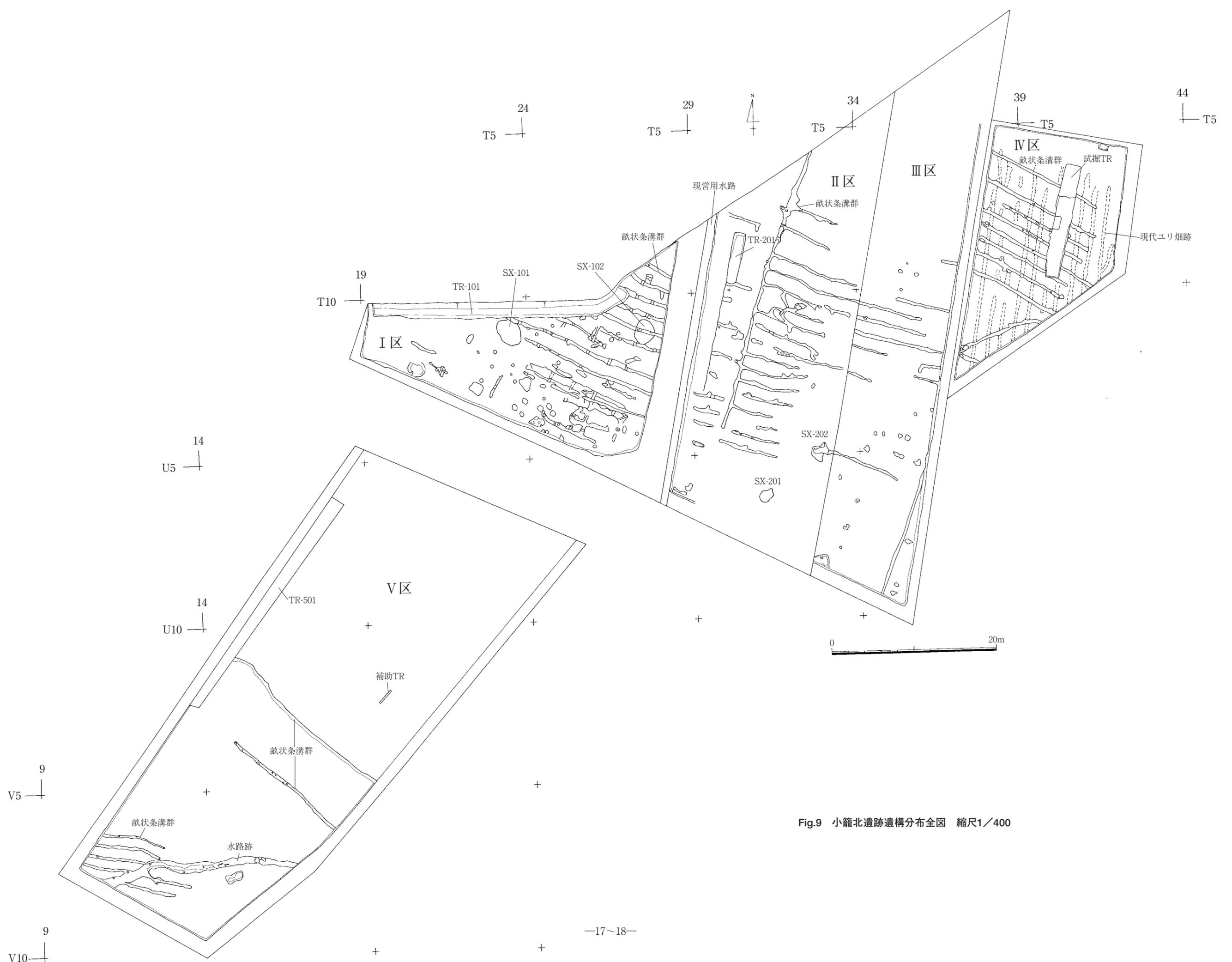


Fig.9 小籠北遺跡遺構分布全図 縮尺1/400

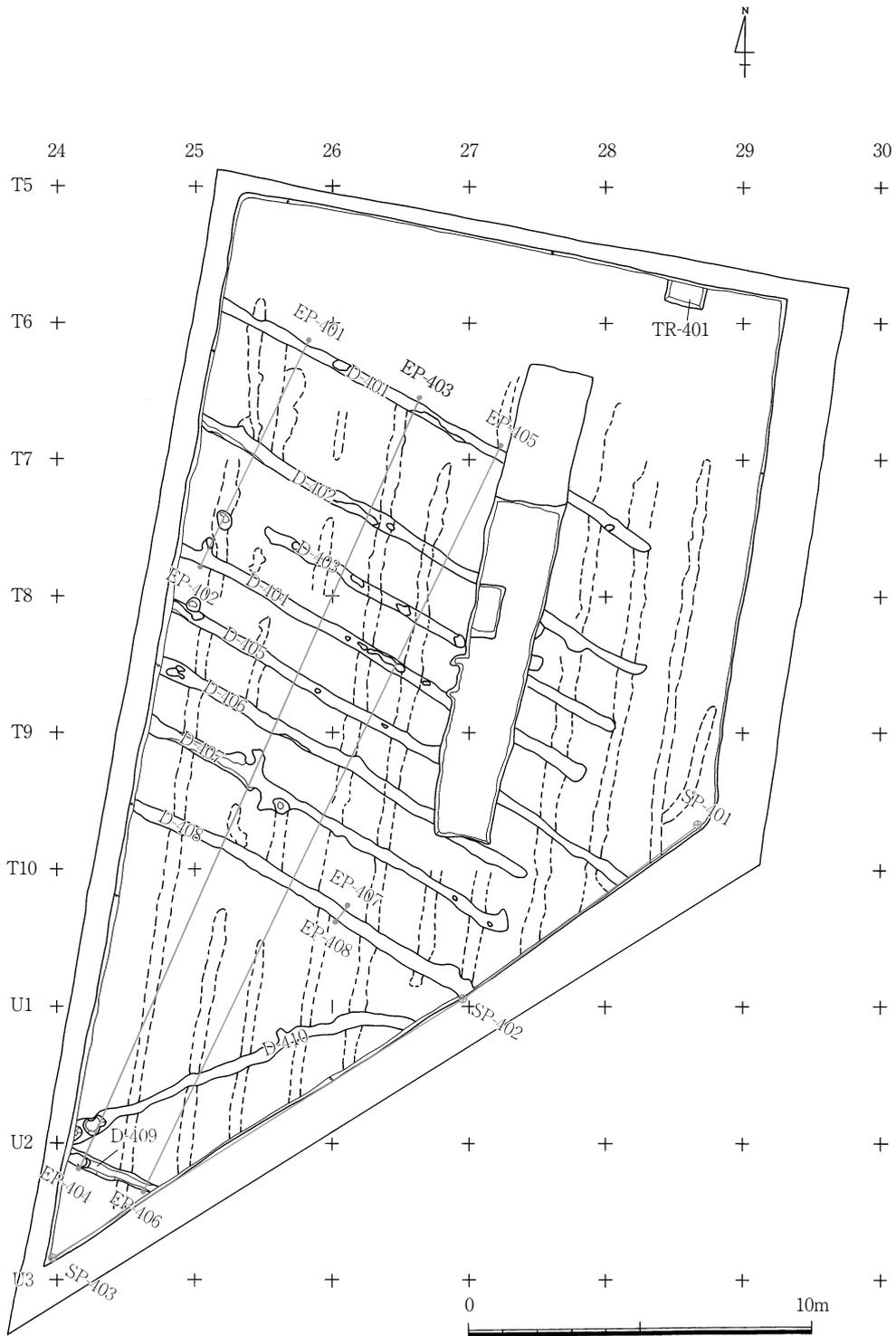


Fig.11 小籠北遺跡Ⅳ区遺構全図 縮尺1/200

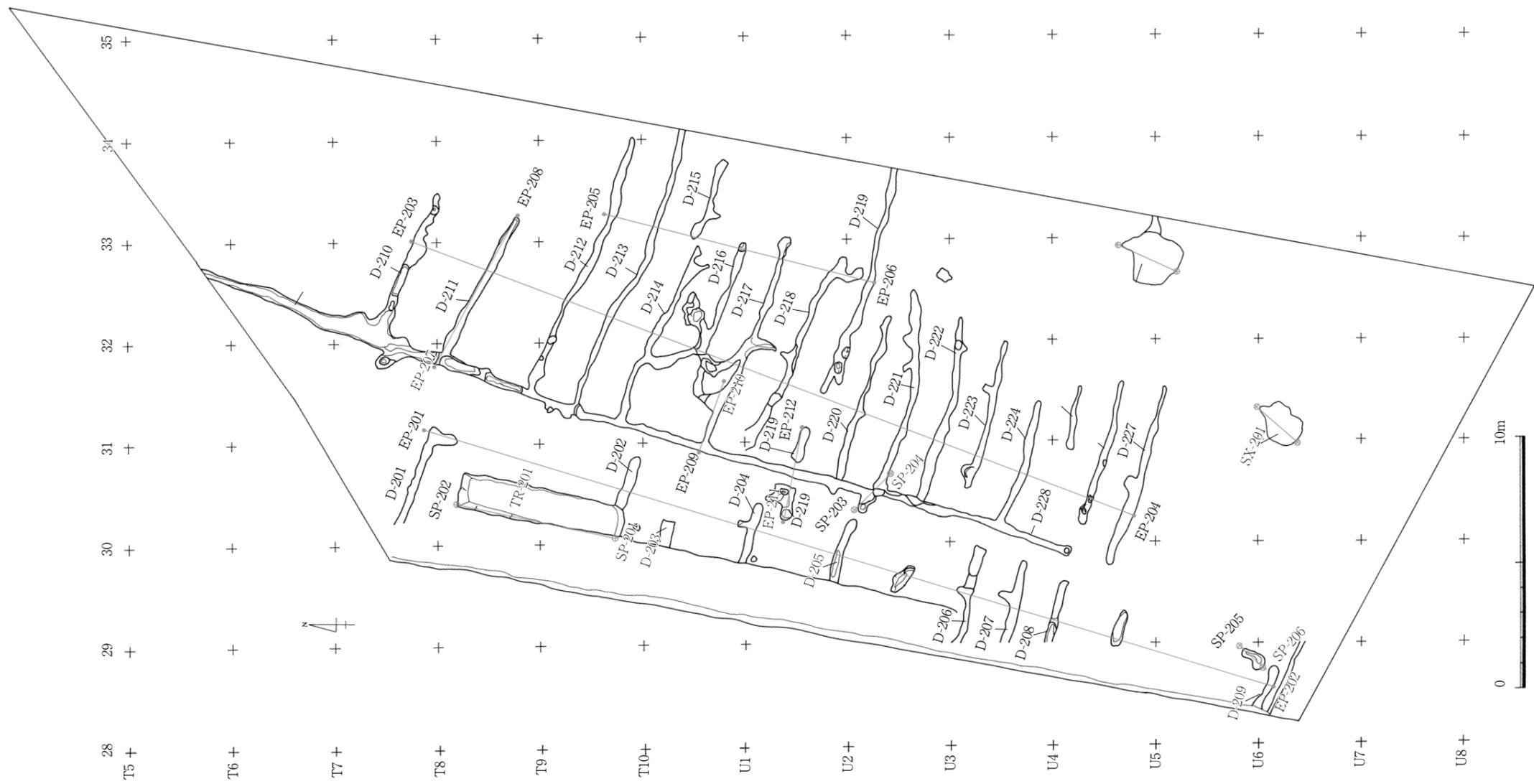


Fig.12 小籠北遺跡Ⅱ区遺構全図 縮尺1/200

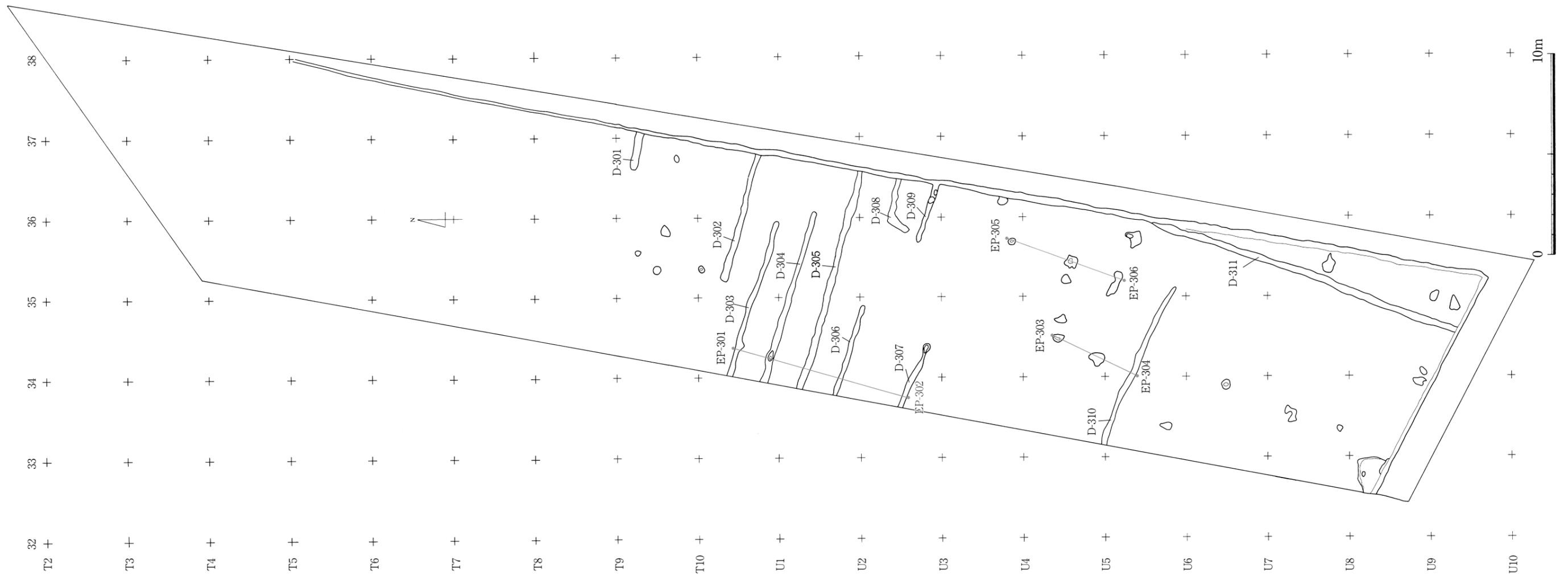


Fig.13 小龍北遺跡Ⅲ区遺構全圖 縮尺1/200



Fig.14 小籠北遺跡V区遺構全図 縮尺1/200

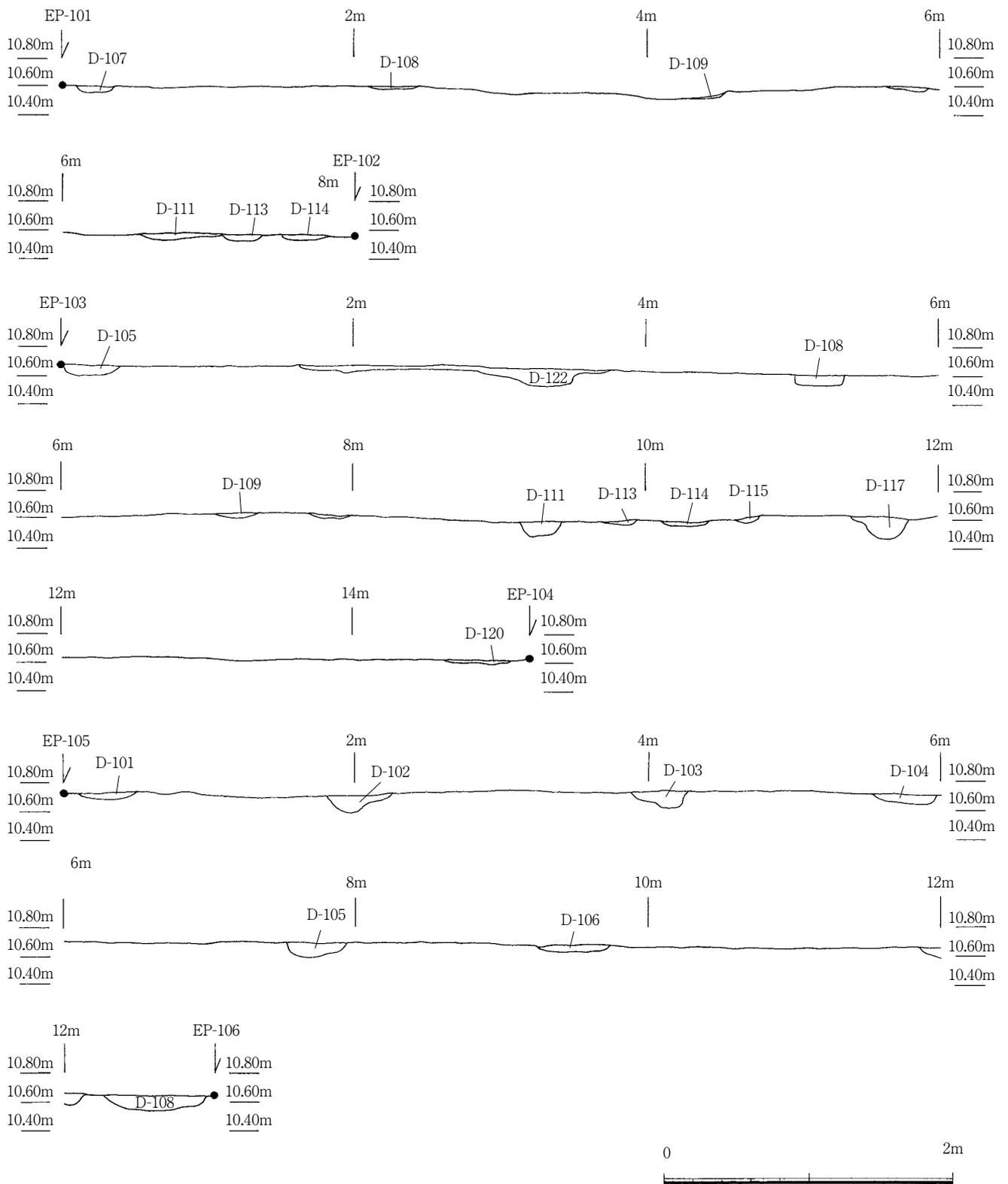


Fig.15 I区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40

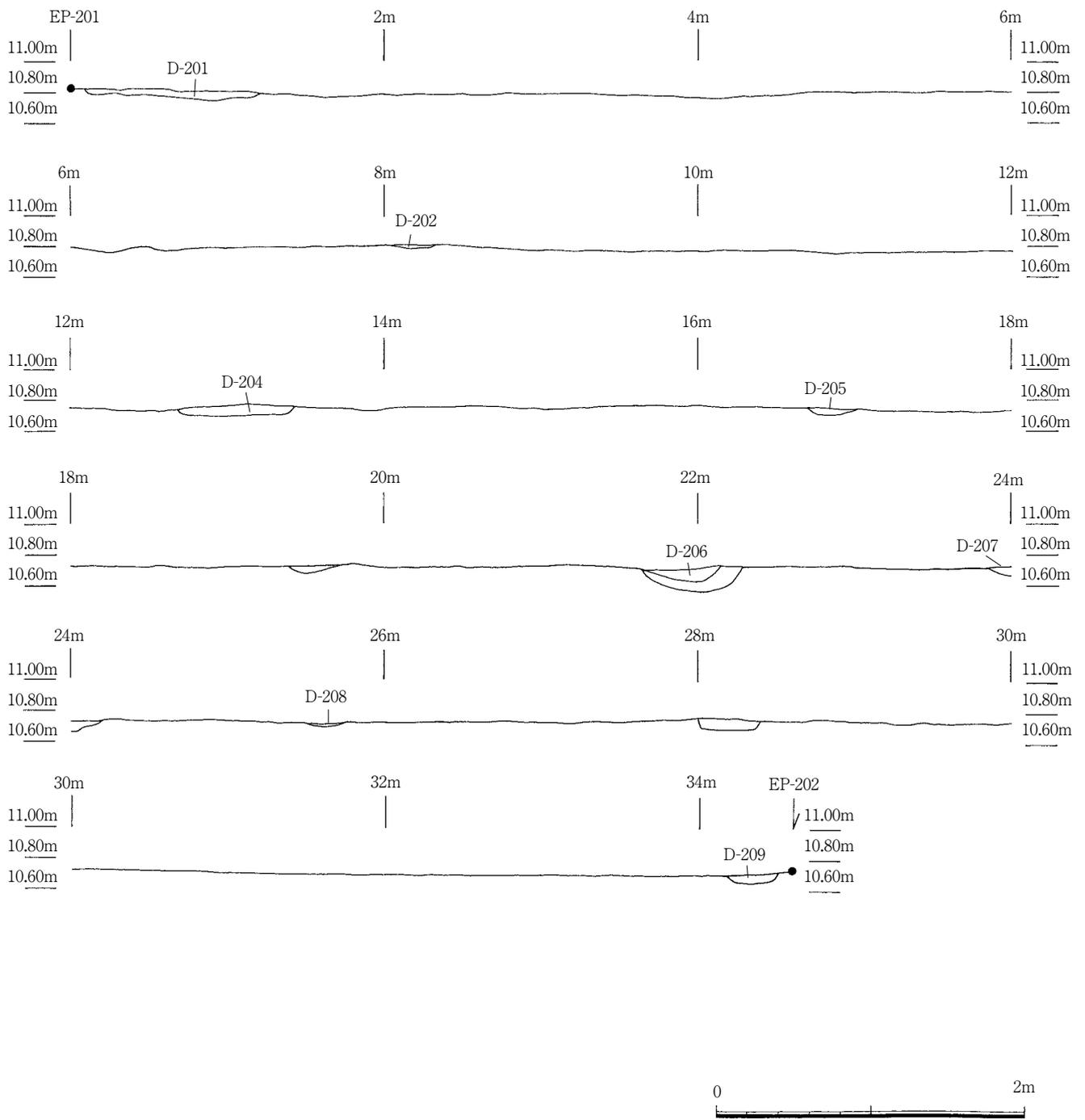


Fig.16 II区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40

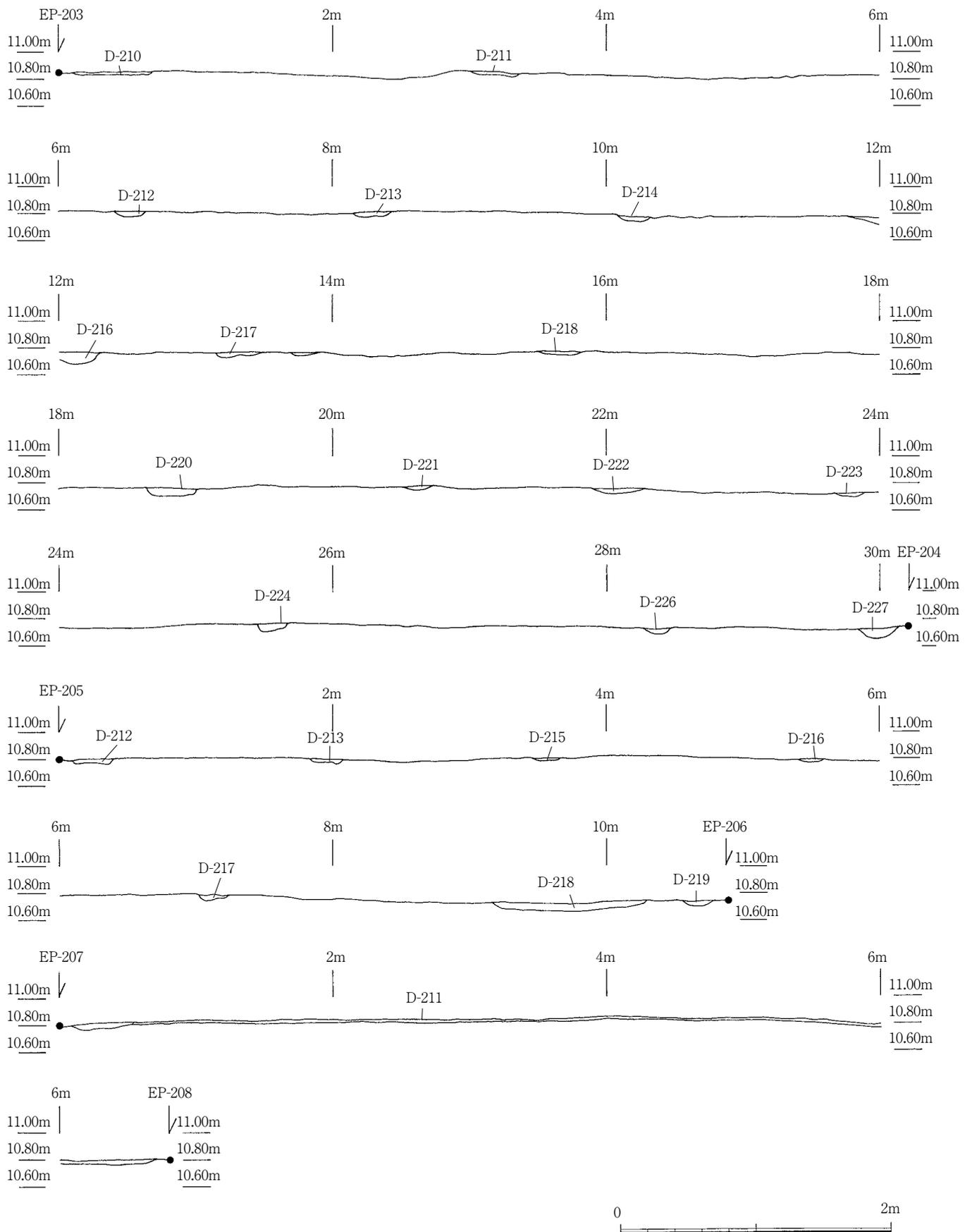
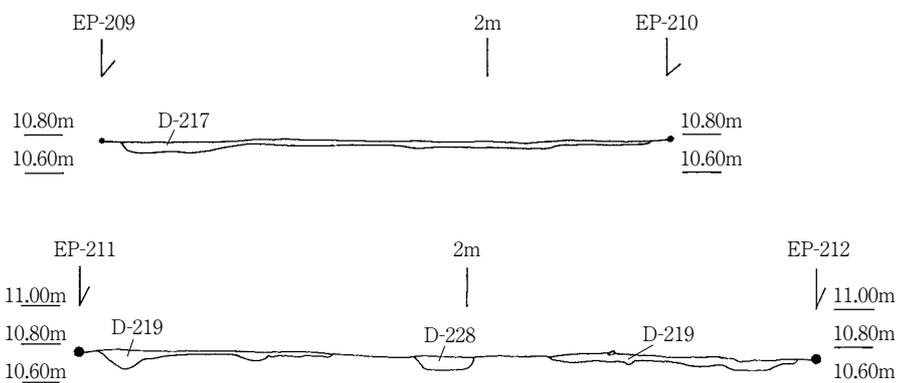
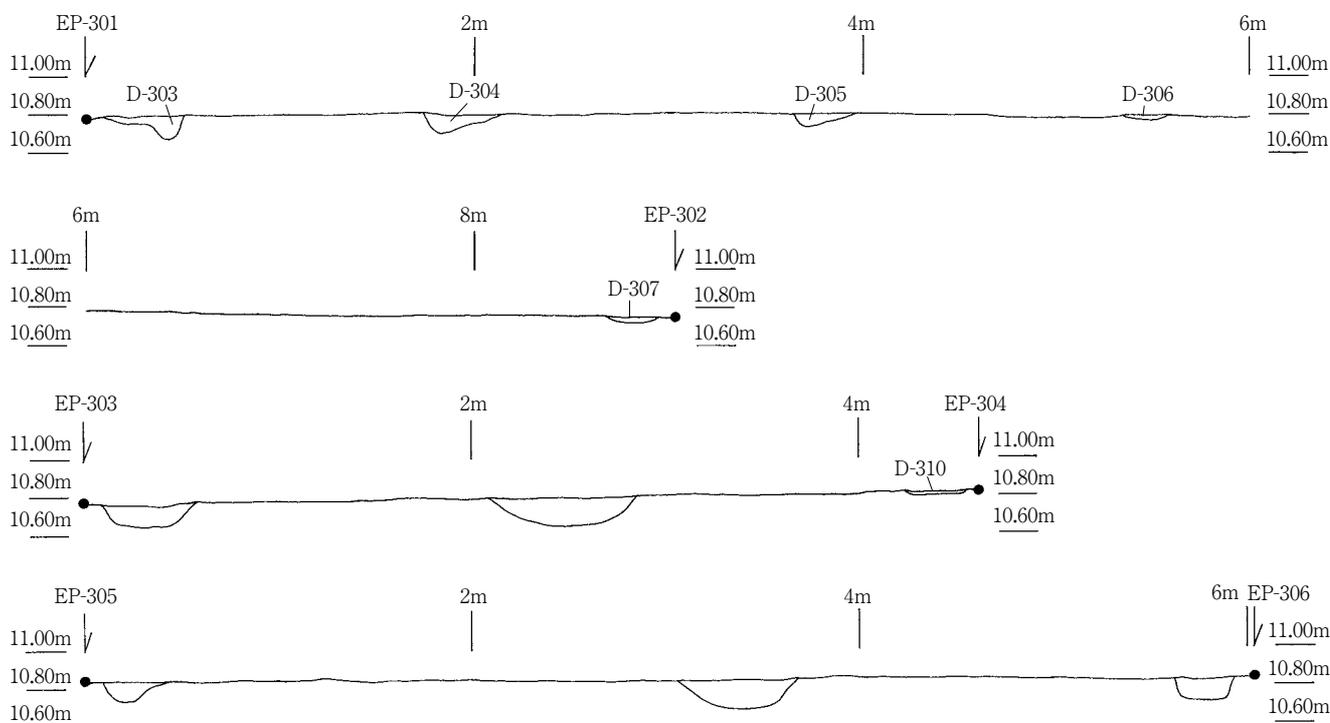


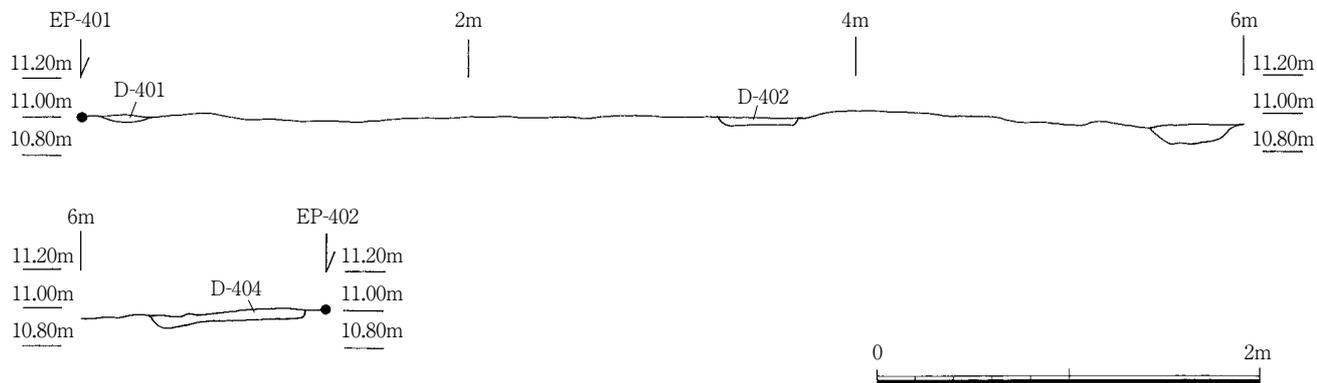
Fig.17 II区畝状条溝群の横断面 縮尺1/40



II区畝状条溝群の縦断面図 縮尺1/40



III区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40



IV区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40

Fig.18 II区畝状条溝群の縦断面図 III・IV区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40

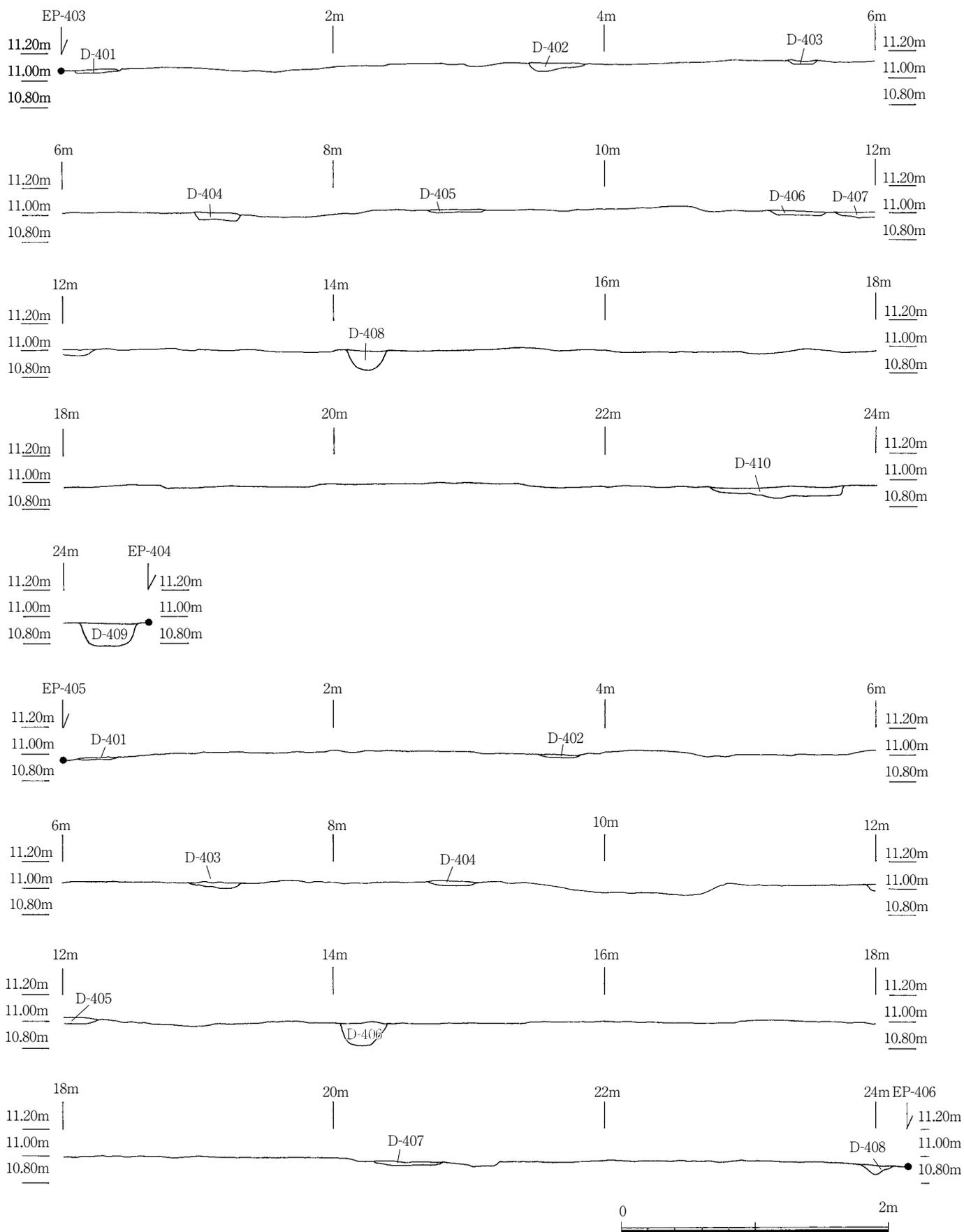
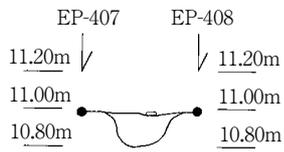
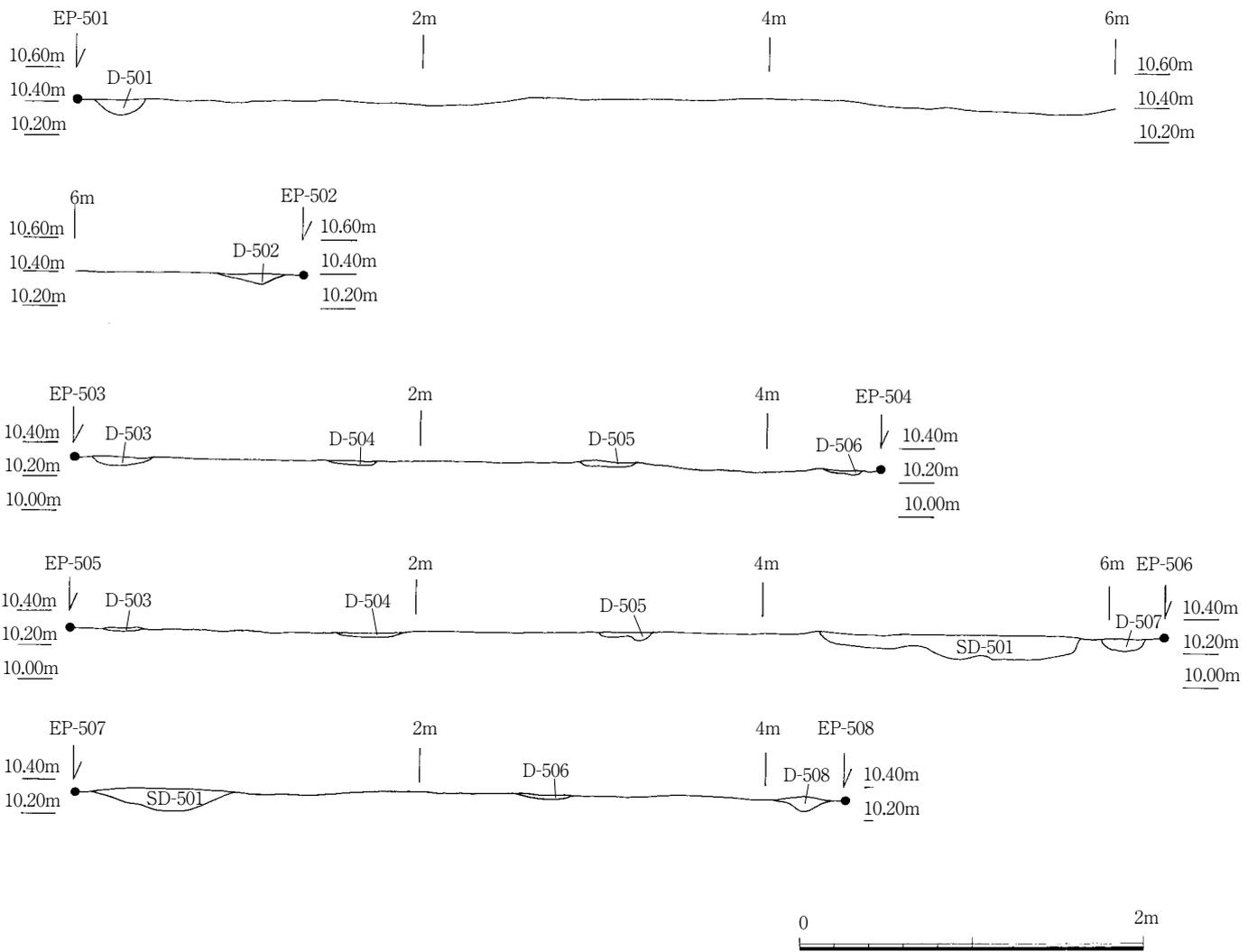


Fig.19 IV区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40

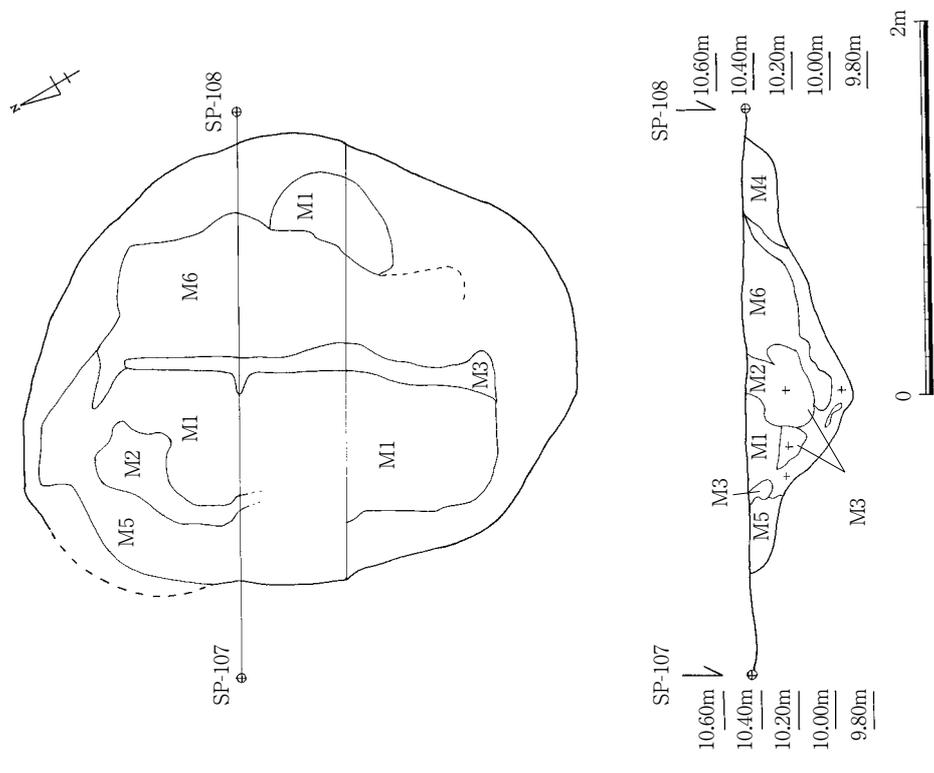


IV区畝状条溝の横断面図 縮尺1/40



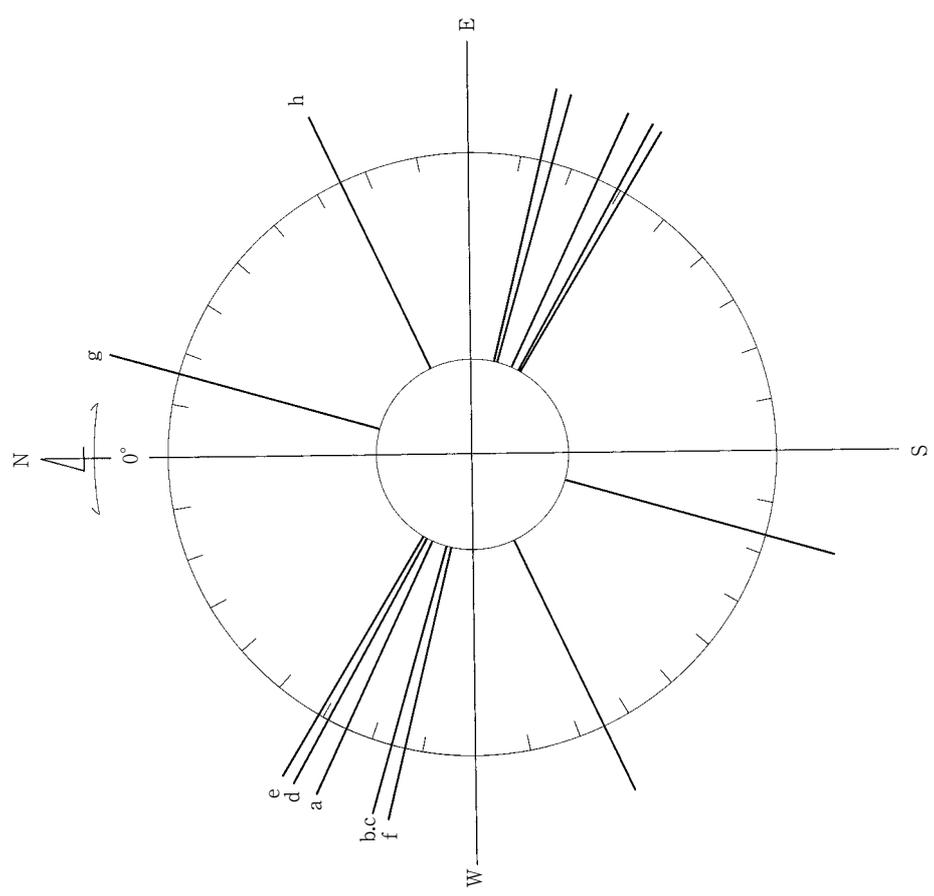
V区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40

Fig.20 IV区畝状条溝の横断面図 V区畝状条溝群の横断面図 縮尺1/40



M1—黒ボク土。
 M2—黄褐色まじりの黒ボク土；本来はⅢ'層の成分。
 M3—黄褐色の軽質土；本来はⅢ"層の成分。
 M4—黄褐色の軽質土と褐色シルトが混在；Ⅲ"層成分と攪拌と見られる。
 M5—Ⅶ層から持ち上げられた円礫団。

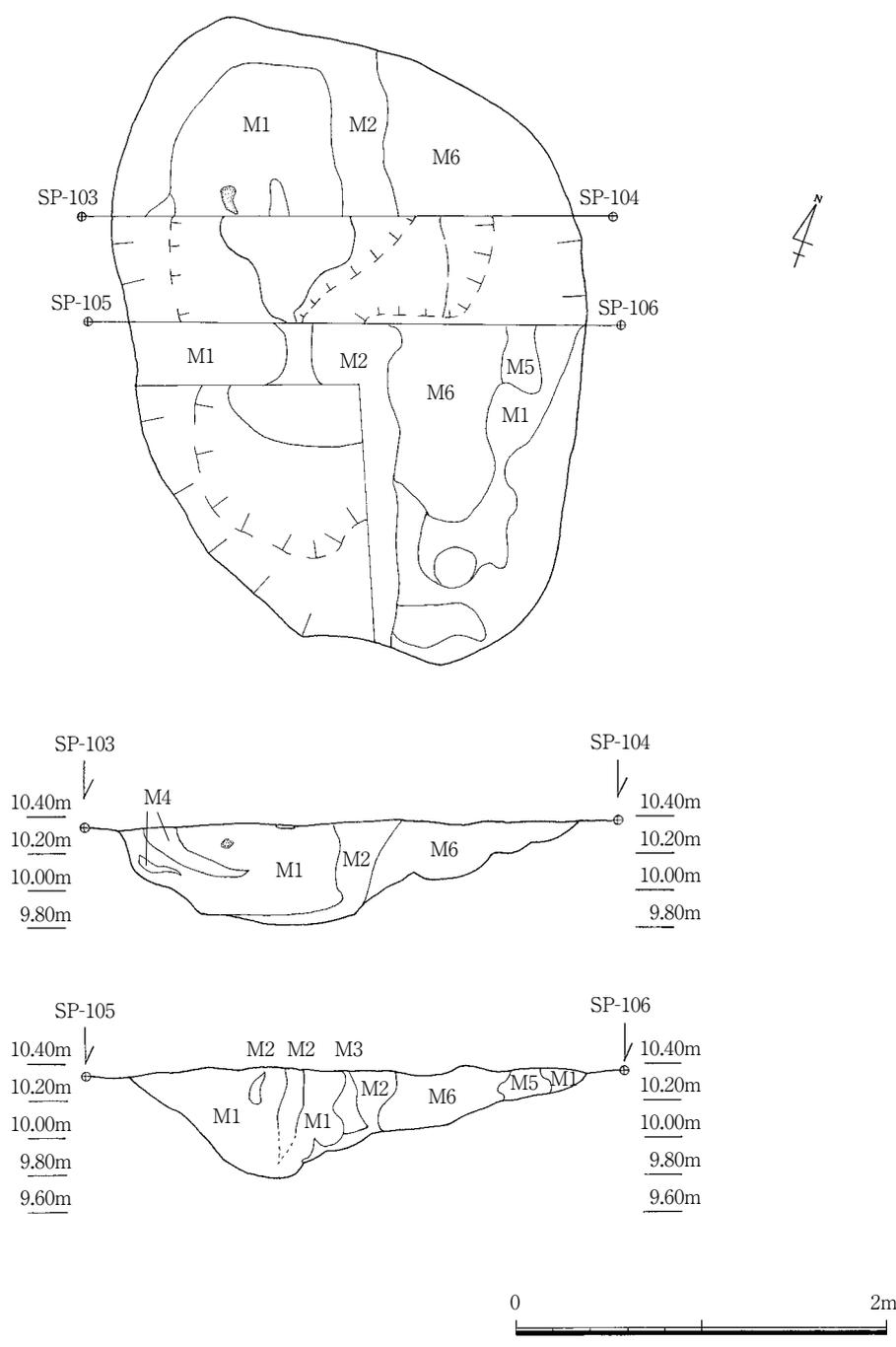
I 区SX-102のトレンチ開削平面図と断面図 縮尺1/40



- | | | | | | | | |
|---|---|----------------|--------|---|---|--------------|--------|
| a | — | I 区D-101~120 | 北偏西65° | e | — | V 区D-501,502 | 北偏西59° |
| b | — | II 区D-201~227 | 北偏西74° | f | — | V 区D-503~507 | 北偏西76° |
| c | — | III 区D-301~310 | 北偏西74° | g | — | II 区D-228 | 北偏東16° |
| d | — | IV 区D-401~408 | 北偏西61° | h | — | IV 区D-410 | 北偏東65° |

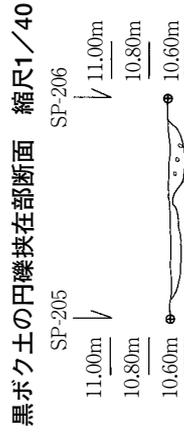
畝状条溝群の走向グラフ
 (真北に対する偏傾角で走向を表記)

Fig.21

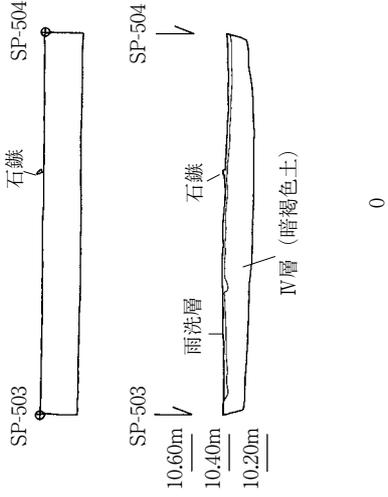


- M1—黒ボク土成分。
- M2—黄褐色まじりの黒ボク土成分。
- M3—黒ボク土と暗褐色土混在。
- M4—黄色粘土：大円礫層の上面に見られる成分。
- M5—黒ボク土まじりの円礫成分。
- M6—盛り上がった大円礫成分。

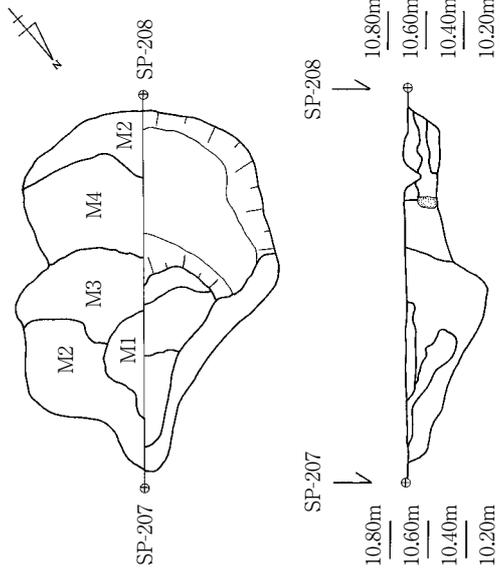
Fig.22 I区SX-101のトレンチ開削平面図と断面図 縮尺1/40



V区・石鏝採取点に開削した小トレンチの平面図と断面図 縮尺1/40

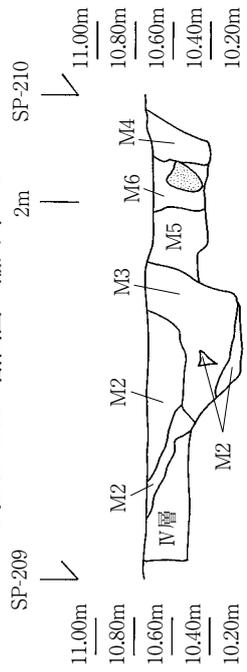


II区SX-201の半截平面図と断面図 縮尺1/40



- M1—黒ボク土分。
- M2—黄褐色の軽質土；本来は黒ボク土の下位に分布する。
- M3—暗褐色土；本来はIV層所屬の成分。
- M4—褐色土；本来はV層所屬の成分。
- M5—大小の円礫；VII層から持ち上げられた円礫団。

II区SX-202の断面図 縮尺1/40



- M1—黄色の軽質土まじりの暗褐色土；III層成分とIV層成分の混在。
- M2—黄色軽質土；本来はIII層所屬の成分。
- M3—暗褐色土；本来はIV層所屬の成分。
- M4—礫まじり暗褐色土；IV層の成分にIII層の円礫がまじる。
- M5—小礫まじりの褐色土；V層成分。
- M6—VII層から持ち上げられた大型円礫団。

Fig.23 II区SX-201・202、V区小トレンチ、遺構等断面図 縮尺1/40

2. 出土遺物

全調査区を通じて遺物の包含が見られるのは、Ⅲ層（黒ボク土）上面以上の層準に限られ、遺物の総点数は154点と少ないうえ、大部分が器型分類すら不可能な細片に過ぎない。層位毎の小計では、Ⅰ層19点；Ⅱ層102点；Ⅲ層上面4点のほか、表面採取29点となっている。また、調査区毎の小計は、Ⅰ区42点；Ⅱ区30点；Ⅲ区23点；Ⅳ区51点；Ⅴ区8点である。遺物構成は雑多であり、基本的に各調査区間に特徴と言えるほどの差異はない。遺物の種類としては、石鏃、石器剥片、土器、土師器、須恵器、中国産青磁、中国産白磁、鉄釉陶、肥前陶器、肥前白磁、肥前染付、京焼風陶器、朱泥陶器、燻し瓦等がある。実質的に遺物を包含する層準がⅡ層（鋤床）を中心とする作土である点や、さらに第Ⅲ章2で触れたように、作土自体が過去の段階で客土として搬入された可能性も考慮し得る状況から、調査区毎の遺物列挙は煩を加えるものとなろう。ここでは、比較的観察条件の良いFig24・25-1～22掲載の資料22点についての観察結果を下記にまとめ、その他の資料は、各層位毎の類別点数の表載（表1・2）に止める。

石器： 最も古い遺物はFig24-1の石鏃一点であり、Ⅴ区で得ている。凹基式の無茎石鏃に属し、全体として細長い五角形を呈する。重量は未だ0.7gに止まるが、長大化を来した縄文晩期の特徴を帯びる。水蝕によって表面に白化を来しているが、石材本来の色は暗灰色と見られる。石基が玻璃質に富む頁岩か安山岩のいずれかであろうが、石種の同定は困難である。黒ボク土を除去したⅣ層面での発見であるが、発見までに同面が二週間程野ざらしを経たうえ、若干の降雨も受けている。発見位置に小トレンチを開削したところ、石鏃の直下には厚さ1cm未満の雨洗層が確認され、少なくとも雨滴や流水による移動を経たとする結論に達した。付近には、剥ぎ取った上位の土壌を山積みしており、恐らくは遺物包含の見られるⅢ層上面以上の層に所属していたものであろう。

土器： Fig24-2は甕の体部片と見られ、内外面に細かいハケメを施す。3は口縁片と見られるが、外反する口縁の端部を欠く。4は焼塩壺の口縁と見られ、端部を小さく内屈し、内面には布目痕ががすかに残る。2はⅣ区Ⅲ層上面、3はⅡ区Ⅱ層、4はⅡ区Ⅲ層上面からの出土である。

須恵器： Fig24-5は皿の口縁と見られる。灰色の胎土は薄く堅緻である。6、7は甕の体部片であり、同一固体に属す可能性が高い。外面に刻み目つきの平行叩き目を施した後、ナデ調整を重ね、内面には同心円紋を留める。8も甕の体部片であるが、外面には単位の細かい平行叩きめ紋を交差し、内面には彫りの深い同心円紋を留める。5はⅣ区Ⅱ層、6はⅠ区Ⅱ層、7はⅡ区Ⅱ層、8はⅠ区で表面採取した。

土師器： Fig24-9は平底型供膳器の底部であり、糸切りの痕跡を留める。Ⅱ区Ⅱ層からの出土である。

中国産白磁： Fig24-10は、口縁を外肥する中国東南部産の白磁碗片と見られ、12c前半代の製品であろう。Ⅳ区Ⅰ層からの出土である。

中国産青磁： Fig24-11は、中国産龍泉窯系の青磁に属す高台部分の小片である。高台の削り出しは浅く、緑灰色の釉層に貫入の多生が見られる等の特徴から見て、15～16c頃の皿であろう。Ⅱ区Ⅱ層から出土した。

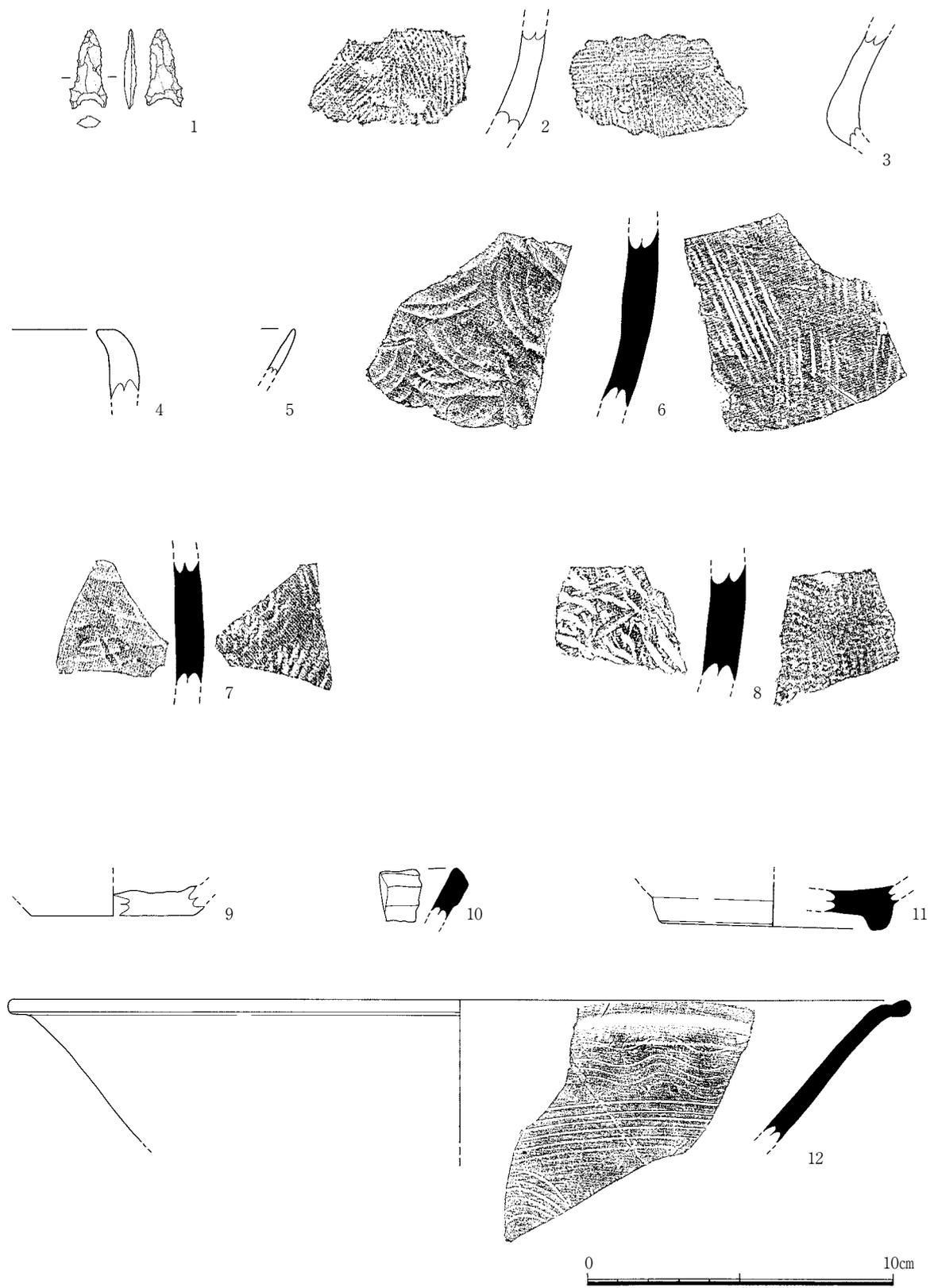


Fig.24 小籠北遺跡出土遺物実測図

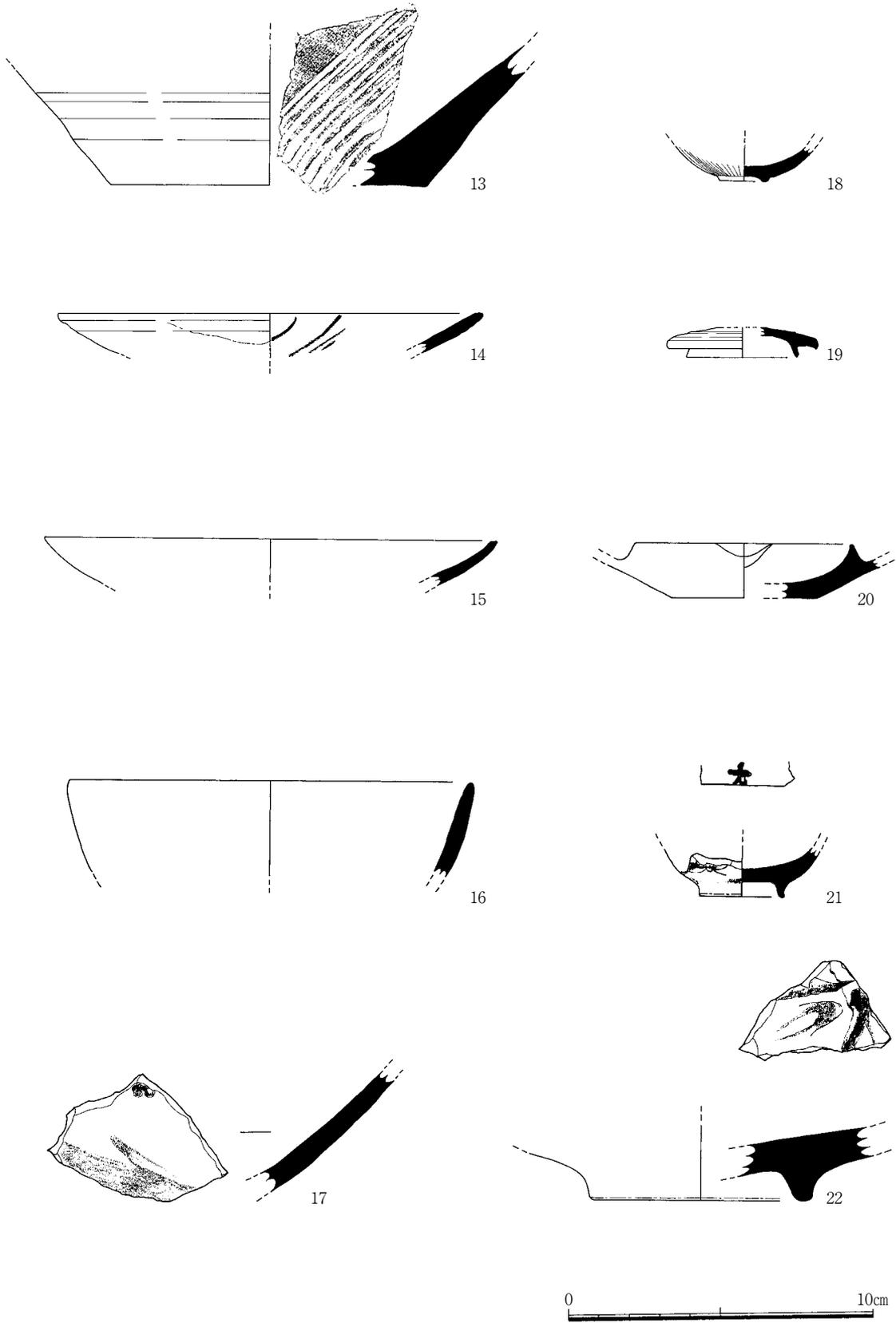


Fig.25 小籠北遺跡出土遺物実測図

粗陶： Fig24-12は、唐津鉢の体部であり、灰褐色の胎は1mm径以下の石英粒子を多含する。口縁端を外反し、その内端に凹線を回らす。内面の口縁直下より、6条単位の櫛描き沈線から成る波状紋、平行紋、および弧状の紋様を施している。Ⅱ区Ⅱ層上面からの出土である。Fig25-13は産地不明の播り鉢である。褐色の胎にはマサが見られず、暗色の粒子が目立つ。間隔の密な播り溝の単位は9状を超え、近世以降の製品と見られる。Ⅰ区で表面採取した。

施釉陶： Fig25-14は、灰釉陶の一種と見られる。内面の釉下に鉄絵を施し、外面の施釉は口縁下に止まる。近世以降の製品であろう。15は肥前産銅緑釉皿の口縁である。胎は灰白色を呈し、釉層の厚い内面では緑青、薄い外面では緑灰の釉色を呈す。近世の製品であり、Ⅱ区Ⅱ層からの出土である。16、19は京焼風陶器の一種と見られ、堅い乳白色の胎に黄灰色を帯びた透明釉を施す。近世以降の製品である。17は、褐灰色の粗胎に白化粧土を施し、酸化銅で絵付けして透明釉で覆う彩絵陶の破片である。恐らくは、近世唐津の製品であろう。14はⅠ区攪乱、15はⅡ区Ⅱ層、16はⅠ区Ⅱ層、17はⅢ区Ⅱ層、19はⅣ区Ⅱ層からの出土である。

白磁： Fig25-18は、型押しによって量産した肥前産のベニ皿であり、貝殻を象る外面を無釉とし、内面には極薄い透明釉を施す。近世後期から幕末にかけての製品である。20は蓋付き器の身部であり、平底型である。白色胎であり、粘性が強めの透明釉を内面に施し、外面を無釉とする。近世以降の製品であろう。18はⅠ区Ⅱ層、20はⅤ区Ⅱ層からの出土である。

染付： Fig25-21は盃、22は大皿と見られ、後者の高台底には砂が溶着する。いずれも近世の肥前産に属す。前者はⅡ区の表面採集であり、後者はⅠ区Ⅱ層からの出土である。

挿図番号	調査区・層位	器類	器種	部位	口径cm	残高cm	底径cm	重量g	産地	推定年代
Fig.24- 1	V区・表採	石器	鏃	完形				0.7		縄文晩期
Fig.24- 2	IV区Ⅲ層上面	土器	甕	体部		3.5		21		
Fig.24- 3	Ⅱ区・Ⅱ層	土器	甕	口縁		3.9		17		
Fig.24- 4	Ⅱ区・Ⅲ層上面	土器	焼塩壺	口縁		2.3		8		
Fig.24- 5	Ⅳ区Ⅱ層	須恵器	皿	口縁		1.6		2		古代
Fig.24- 6	I区・Ⅱ層	須恵器	甕	体部		5.8		60		古代
Fig.24- 7	Ⅱ区・Ⅱ層	須恵器	甕	体部		4.2		17		古代
Fig.24- 8	I区・表採	須恵器	甕	体部		3.9		16		古代
Fig.24- 9	Ⅱ区・Ⅱ層	土師器	供膳具	底部		1	5.4	7		
Fig.24-10	Ⅳ区・Ⅰ層	白磁	碗	口縁		1.7		3	中国東南部	12c前半頃
Fig.24-11	Ⅱ区・Ⅱ層	青磁	皿	高台		1.5	7.2	16	中国浙江省	15~16c頃
Fig.24-12	Ⅱ区・Ⅱ層	粗陶器	鉢	体部				46	唐津	近世
Fig.25-13	I区・表採	粗陶器	播り鉢	体部		4.7	10.4	57		近世
Fig.25-14	I区・攪乱	灰釉鉄絵陶器	皿	口縁	14	1.3		5		近世以降
Fig.25-15	Ⅱ区・Ⅱ層	銅緑釉陶器	皿	口縁	15	1.5		6	肥前	近世中期
Fig.25-16	I区・Ⅱ層	京焼風陶器	碗	口縁	13.2	3.2		7		近世以降
Fig.25-17	Ⅲ区・Ⅱ層	織部風陶器		体部				22	唐津	近世
Fig.25-18	I区・Ⅱ層	白磁	ベニ皿	底部			1.8	2	肥前	近世後期
Fig.25-19	Ⅳ区・Ⅱ層	京焼風陶器	蓋	口縁	3.8	1		2		近世以降
Fig.25-20	V区・Ⅱ層	白磁		体部	7	1.8		12		近世以降
Fig.25-21	Ⅱ区・表採	染付	盃	底部		1.7	2.8	10	肥前	近世
Fig.25-22	I区・Ⅱ層	染付		高台		2.5	7	24	肥前	近世

表1・小籠北遺跡発掘調査出土遺物観察表

種別／層位	I層	Ⅱ層	Ⅲ層上面	表面採取	集計
石器				1	1
石器剥片				1	1
土器	1	11	3	3	18
土師器	3	36			39
須恵器		3		2	5
中国産青磁		1			1
中国産白磁	1				1
鉄釉陶器	3	3			6
肥前陶器	1	11	1	1	14
肥前白磁	1	1			2
肥前染付	4	13		6	23
京焼風陶器	1	8		4	13
朱泥陶器		1			1
燻し瓦	1	1			2
その他	3	13		11	27
集計	19	102	4	29	154

表2・小籠北遺跡出土遺物集計表

第V章 まとめ

1. 小籠北遺跡の沿革

平成9年8月25日～9月2日の間、国道195号線改良工事（あけほの道路建設）に伴う事前の試掘調査が実施され、南国市小籠字三ノ堀・字佐波為に設定された調査区から、溝状遺構・土坑等を検出し古代～中世の土器片・近世陶磁器類が出土した。^{注1} 遺跡の所在はこの調査で明らかとなり、小籠遺跡^{注2}と区別するために「小籠北遺跡」と呼称することにして本発掘調査の対象地となった。^{注3}

今回の調査で検出された主要遺構は、近世に形成されたとみられる畝状遺構と水路跡・小ピットで、その他の遺構として倒木痕跡とみられる不整形土坑が確認されている。調査地は、長岡台地（古期扇状地・更新世の河成段丘）の西縁端に位置するが、小籠遺跡と比べて丘陵部に近接しており、ここでは集落跡の存在がうかがわれる遺構等は確認されなかった。

出土遺物としては、縄文期の石鏃・弥生土器片（甕）・布目痕をもつ土師器片・須恵器片（皿・甕）・青磁・白磁・近世陶磁器類であるが、石器を除く153点の土器片のうち115点（約75%）が近世以降の所産で、細片が多く図示できる出土遺物の点数は少なかった。なお、出土遺物のなかで縄文晩期に属するとみられる凹基式石鏃は、これまで香長平野での出土例は少なく留意されるが、縄文・弥生・古代～中世の出土遺物に関連する明確な遺構・遺物包含層等は調査区内では検出されなかった。縄文～古代の遺物については、所属遺跡からの遊離移動もありえるので、あるいは調査区外の遺跡（地形的には北東部の土島田遺跡等）から分離堆積したことも推測される。

近世の遺構に関しては、小籠遺跡の調査で検出されている溝状遺構（Ⅳ区）・畝状遺構（Ⅴ区、D-1^{注4}～17）に類似した条溝群と水路等が検出されている。今回の調査でも、畝状遺構（畝状条溝群）として取り扱い、その性格や成立背景等については後編で詳述されているが、遺構は溝の走行方位から大別して4グループに類別することが可能である。これらの溝跡は、畑の畝跡として捉えられるが、現在の地割に則するものではなく、Ⅰ・Ⅱ区の畝状遺構の検出例のように、むしろ現県道である近世の主要街道に沿って形成されていることが観察される。耕作者や耕作時期も明らかな現代の南北方向ユリ畑跡（Ⅳ区）が、東側の南北道路に沿って耕作されていた事例からすれば、先の畝状遺構の走行方位もある程度、耕作時の土地区割りに準じたものであったとみなされる。南国市に所蔵されている高知縣長岡郡長岡村役場明治廿二年の『小籠北分訂正地圖簿』によれば、この段階では既にほぼ現在の地割区画に近い姿になっている（Fig26）。ただ、ここで注意されるのは地図簿の「訂正」作成であり、それ以前の地図簿等（古絵図）の存在と地割区画の変更を示している事である。

現在の資料では判明し難いが、明治二十二年頃には古図とはかけ離れてきていた区割りの実態、つまり土地の改変などのために地図改正にいたる変遷過程を読み取ることも可能である。

なお、この地図では、字三ノ堀と字佐波為の小字範囲が明らかで、神地である社の存在も記載されている。字佐波為の「佐波為」は、「サバイ」の漢字表記で、「佐波為神社」の例があるように農耕神、稲作の神、田の神としての「おサバイ様」にかかわる名称である。神地としての社が所在していることは、集落または組組織の共同祭祀としての稲作行事があり、「サバイ田」の所在や神を祭

る「サバイ神社」が勧請されたことが察せられる。字「佐波為」は、「おサバイ様」の「サバイ田」として神を迎えて稲作を行う特定の田として利用され、収穫の奉納は神地の二社に献じられたことがうかがわれる。

このように、調査地は稲作と稲作にかかわる集団儀礼のなかで、耕作者個人のみならず集団間の規制を受けていた場所でもあるわけだが、調査成果でも明確なように水田地となる以前は主として畑として耕作されていた。Ⅰ・Ⅱ区で検出された倒木痕跡は、同区の畝状遺構により切られているものの、遺構埋土には畝状遺構の埋土でもある黒ボク土・褐色土が堆積しており、樹木の伐採・倒木から畑地開墾（畝状遺構の形成）への経過時期にはあまり隔たりがないことが類推される。また、Ⅴ区南部の畝状遺構は、東方向からの水路跡（SD-501）に切られており、この周囲の畑地は東の山際側を流れる流路（水路）からの引水によって次第に水田化されたと考えられ、畑地から水田耕作地への変容をうかがうことができる。

出土遺物等から調査区の景観変遷の復元を試みれば、17c前半頃に長岡台地の林野部であった調査区一帯が開墾されて畑地となり、17c後半～18cにかけて一部が水田化されるがなお畑地は広がっており、その後の水利整備の改良と水田地の面的な拡幅によって19c中頃までにはほぼ水田地目に移行したと推考される。「字佐波為」の成立は、水田による生産が本格化する近世後半～幕末の所産であると考えられ、その背景には畑地から水田地へ移ることによる、より村落内の共同作業の比重重視と紐帯の強化、禁忌行為の浸透と農耕行事の盛行を反映するものと考えられる。

今回の調査地では、屋敷地・社地・墓地・近世街道に関連する諸施設等は検出されず、どちらかといえば近世小籠村の周縁部である耕作地を見出したことになる。しかし近世農村の復元作業のうえからは、耕作地等の生産遺構の変遷把握も必要であり、調査内容が近世小籠村資料として今後検討されることを期待したい。

注1： 浜田 恵子「小籠・上末松地区確認調査（97-16RNK）」『高知県埋蔵文化財センター年報7』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター1998.7

注2： 出原 恵三編『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997.9

注3： 注1の確認調査では、小籠遺跡の北東部（注2文献のⅤ区）から、小籠北遺跡に至る「あけぼの道路」建設予定地内では遺跡の所在は確認されなかった。このため、同遺跡の弥生～古代の集落区域外とみなされる。

注4： 注2文献

注5： 桂井 和男「田の神としてのサンバイに関する資料と論考」上『土佐史談第72号』土佐史談会

「田の神としてのサンバイに関する資料と論考」下『土佐史談第73号』土佐史談会

参考

倒木痕跡については、(1)小籠遺跡SX1・2・3、SX4～8 (2)山田三ツ又遺跡などの諸例がある。いずれも、不整形の平面を呈し、片側に礫層が盛り上がりながら堆積する。遺構内には、発掘区の堆積土が横倒しのような形で堆積している。

(1)出原 恵三編『小籠遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995.3

(2)佐竹 寛・藤方 正治編『山田三ツ又遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997.9

2. 畝状条溝群の形成とその性格

検出した条溝群や倒木痕跡について、その機能や成因および年代の判定に結びつく状況資料を欠く点は、既に事実報告の中で詳述した。ここでは、地質、土壌学、農学の一般的理論と史学的見地から畝状条溝群を中心に若干の考察を加えたい。

1. 畑跡としての判断根拠

まず、畝状条溝群は、1.4~2.0m前後の間隔で並列する幅30~40cm前後、深さ2~15cm程度の浅い溝から成り、粗粒砂岩礫層との間に厚さ20cm前後の小礫交じりシルト質土壌を介在するのみである。直上を覆う黒ボク土^{注1}を含め、この地質は極めて透水性が高く、乾燥速度も速い。従って本例のように細密な条溝の場合、灌漑水路としては漏水率が高いうえ、短期に埋没するところから、少なくともV区南部のSD-501程度の規模を具えることが要求されよう。形態、機能的に最も可能性の高い類型としては、畑の畝跡が考えられる。条溝群の埋積土が黒ボク土の一種である点から、耕作に使われた土壌も黒ボク土という結論に至り、立地する地形と土壌の特性自体から、畑耕の時期に関する一定限度の示唆が得られる。

2. 黒ボク土の土壌性質と農業史における位置づけ

全調査区の鋤床層直下に堆積する黒ボク土には、火山灰土壌であることを示す火山ガラスが遺留する。巨大火砕流を伴うプリニー式噴火^{注2}に多く見られる平板状のバブルウォール型火山ガラス^{注3}であり、地理、気象の関係から想定される九州方面給源の広域テフラ^{注4}では、鬼界アカホヤ火山灰（約6,300年前）、始良Tn火山灰（約21,000~22,000年前）、阿蘇4火山灰（約70,000年前）等に同種の類型が多在する。この形態の火山ガラスは、当遺跡の東北東約1.5kmの距離にある下末松・久保遺跡の試掘時(1998年度)に採取した黒ボク土サンプル中にも高密度の分布が認められた。黒ボク土が黒色を呈するゆえんは、長年月に渡る腐植の集積に由来するが、これらの腐植もおよそ1万年を過ぎると分解・脱色してゆき、下方から順に赤味を帯びた軽質土に置き換わるものと解されている^{注5}。両遺跡とも長岡扇状台地に立地してシルト質土壌の堆積が薄く、それを覆う黒ボク土に腐植と火山ガラスを多留する点も共通するため、上記テフラの中では比較的新しい降下火山灰を母材とする可能性が考えられる。

土壌学や農学の上で指摘される黒ボク土の問題点は、主に過剰な乾燥性と激しい^{注6} 燐酸欠乏症の二点に整理される。前者の問題は、元来水はけ過剰な洪積台地等の平坦面における黒ボク土の被覆が土層全体の渇水に拍車をかけるところから、農地開拓の前提として大掛かりな灌漑事業の推進を不可欠とする点にある。後者の問題は、火山灰の風化によって生成した非晶質粘土鉱物のアロフェン^{注7}が腐植を吸着する一方、その活性アルミニウムが^{注8} 土壌中の有効^{注9} 燐酸と化合して燐酸固定を来すため、石灰質肥料のほか米糠、魚骨等燐酸肥料の多量投入によって土壌改良を進める必要に迫られる点である。大規模な灌漑事業は、長期に渡る投資と労働力の確保に止まらず、広域水利の調整を可能とする政権の安定や社会システムの有機的発展を要し、土壌改良や多量の施肥は、近接地域における消費と流通の拡大なしにはコストバランスが保てない。黒ボク土の被覆率が全国最高の38.4%^{注10}に達する関東地方の例でも、生産性の高い畑地に逸早く転化し得たのは、近世に至って多くの消費人口を擁した江戸の近郊である。黒ボク土の被覆率は四国地方で最も低い^{注11} 2.7%の値が示されるが、その

殆どは高知、愛媛の両県に分布しており、高知では、長岡扇状台地が主要分布域の中央を占める。ここでも、広大な耕地開発や生産性の向上には、近世初期以降の大規模な水利事業の展開に加え、土壌改良剤あるいは肥料としての石灰の増産、普及、および高知の城下町や在郷町後免を中心とする消費の拡大といったコストバランス要因の整備を要した。

近世に至って加速する消費圏と近郊耕作圏の分化、拡大および交通、流通の発達、近代に至るまで都市と農村間で普遍的に見られた下肥（人間の糞尿）の処理と利用面における相互依存の関係を生み出した。黒ボク土の団粒度を高めて作物の可吸有効水を確保するとともに燐酸固定の害を緩和する手近な方法に、下肥（人間の糞尿）の施用がある。これにより、温暖多湿で降雨頻度の高い地方の台地畑では、灌漑網が未整備でも一定限度の低位生産確保が可能となる。下肥の歴史に関しては、渡辺善次郎氏が『近代日本都市近郊農業史』の中で詳しく考証を行い、「日本の下肥利用がほぼ全国的に普及したのは十八世紀の末頃^{注12}」と推定している。同氏は、下肥利用の前提として、糞尿の貯溜式トイレおよび安価で軽便な杉板竹箆製の桶の登場が不可欠とし、前者が鎌倉末期頃、後者が室町時代の初め頃といわれる点から、下肥の利用が始まる時期を中世の末期と捉え、下肥技術の導入先については中国と見ている。また、手がかりとなる文献史料として、『建武年間記』の「肥桶」という言葉や、室町時代の『洛中洛外図』に描かれる下肥をまく農夫の図を挙げるほか、日本における下肥使用を明記した最初の文書として、ポルトガルの宣教師フロイスが1585年に著した『日欧文化比較』を引き、その記事を次のように要約する。すなわち、「ヨーロッパでは糞尿を取り去ってくれる人に金を支払っているが、日本では逆にそれを汲み取る人が金を支払っている。ヨーロッパでは人間の糞尿を捨て、馬糞を畑に入れるが、日本では馬糞を捨てて、糞尿を田畑に入れる。またヨーロッパではトイレをなるだけ人目につかない家の裏の方につくるが、日本では逆に道端や家の入り口につくり、往来の人々にもできるだけ使ってもらって糞尿を貯めている^{注13}。」という内容であり、日本の中世末農村の景観を具体的に伝えている。また、渡辺氏は近世の下肥を語る冒頭に於いて、戦国期から江戸初期頃の伊予で著された日本最古の農書『清良記^{注14}』において、優秀な農家はトイレが整い、糞尿を大切に貯溜する云々と説く点や、徳川幕府による1649年の『慶安御触書』が糞尿の貯溜方を詳細に説く点を挙げ、当時は幕府が一般農家にまで下肥利用の普及を図っていた段階^{注15}と見る。また、明治十二年の『稲田耕作慣習法』や明治十五年の『府県地租改正紀要』等から渡辺氏が整理した全国三十四府県における使用肥料の状況では、「人屎尿」が首位を占めて三十一府県におよび、以下「天然緑肥・わら^{注16}」、「油粕」、「干鱈」、「草木灰」の順に多い。明治二十一年には、東京農林学校農芸化学教師オスカル・ケイネルと助教森要太郎が前年来の職業別、階層別（東京および近郊在住）人屎尿に対する化学分析結果を発表しており、糞尿混合の検体について水分と燐酸のみの含率を抽出すると、水分94.41%（兵士）～95.31%（第二都会人）；燐酸0.116%（第一農夫）～0.297%（第四学生及兵士）となる^{注18}。

この方面に関して、土佐における下肥関連史料の収集が課題となるが、目下のところ上に紹介した研究が大きな参考となろう。扇状台地という地形的制約や黒ボク土に覆われる土質的障害から見た場合、17世紀前半から中葉にかけて灌漑網の整備される以前の長岡台地では、主に下肥を取り入れた畑作が散発的に行われた程度と見るのが現実的と思われる。

3. 長岡台地における灌漑事業の推進

長岡台地を貫流して土地を潤し、荒地の耕地化や水田稲作を可能にした物部川取水の主幹灌漑水系は三筋に分かれて西流し、北から順に（西岸）上井川（正保二年；1645年竣工）、中井川（寛永16年；1639年竣工）、舟入川（万治元年；1658年竣工）と称される。これを可能にしたのが土佐藩奉行職・野中兼山の主導下に寛永16年（1639）を期して始まる山田堰の建設であり、弾劾によって兼山が失脚した翌年の寛文四年（1664）に下井川の通水を以って完成した。

（西岸）上井川、中井川、舟入川の香長平野における各水溝延長および灌漑耕地面積は、順次一里七町・一二六町七反六畝；二里十九町・四三四町六反四畝余；二里二四町四〇間・一一〇九町二反余^{注19}にも及んだ。これら水系の効果に関しては、明治二十六年に刊行された『南海之偉業』中の「第八事業、土功之事、長岡郡之部」に、「舟入、中井の両川は已に香美郡を潤し、末流本郡に入りて西野地、後面、高須、伊達野、船岡の新田を灌ぎ、且つ以て本田に及ぶ。其の面積惣合千百余町歩に上り、…。本流獨り灌漑に便するに止まらず、舟揖の利あり。香長二郡の品物、此川によりて出づる者多し。」^{注20}と綴り、若干の畑作が行われる程度であったと見られる台地部に止まらず、低地部の新田開発や地産品の物流活性化をも促進した様子を伝える。

昭和十年に香美郡明治村在村の史家・川添陽が著した『野中兼山』では、「而して山田乃至西野地の高地部より南に一段下がった今の香長平野の中心地たる廣野が、元は天然川流に沿ふたほとりに、多少の耕地はあったなれども、大部分は不毛の原野であったものを、舟入川等の疎通と共に開墾されたもので、此の部面は大業より来た各種の關係に依って萬治年間以後の開墾に属している。」^{注21}と述べ、扇状台地より下位の低地域に関しても、万治元年（1658）に舟入川が疎通する以前は大部分が未開拓の荒野であったと見ている。また、舟入川の名称に関しては、「此の川は相並べる上井川中井川と共に兄弟川たるにより名も當に下井川たるべきに、舟揖の便比類なき特殊の川流として浮かべる舟筏の往來繁きより特に舟入川と稱せられ…」^{注22}、明治半ば頃に陸運交通発達を見るまでの二百余年に渡り、運送の主役を果たした点を強調する。舟入川の兩岸各地には、船屋（かなや）と称する船間屋が二十数軒あり、馬で運び込まれた東部郷村の舟載貨物は、翌朝の日の出頃には大津の堰を越し、八時半頃には高知に達した。城下に向かう主な物資では、平野部の米や山村部の木炭、楮草、製紙原料の糊、その他雑貨物を舟載とするほか、材木は丸太のまま、製材および竹木は筏流しにより、また、高知城下からは東部郷村に向けて日用雑貨が舟積みされたという。^{注23}

長岡台地の耕地化は、特に（西岸）上井川と中井川に負うが、その経済立地の向上には南裾を高知城下に向かって流れる舟入川の水運が大きく寄与し、より多くの投資を必要とする台地農業の維持と発展にとって不可欠のコストバランス環境を提供した。

4. 土壌改良剤としての石灰の生産と普及

現在では、高知県の地場産品の一つとして重要な位置を占める石灰の生産も、土壌改良による農業生産の向上に大きく貢献しており、大量の石灰岩資源を埋蔵する南国市域の近世史とも深く関わる。この点に関しては、『南国市史』に収録される山本大氏の文献整理と研究^{注24}が大いに役立つ。その要点的記述や相互に補完、傍証し合う所引の文献から、県内における石灰製造販売の原点を探ると次の状況となる。

まず、慶長年間（1596～1615）の浦戸町で牡蠣殻による焼貝が始まるが、石灰石を意味する「馬骨石」を使った焼石灰の初出は、「下田村にて製するは、馬骨石を焼き風化す。享保十四年（1729）初めて製し上方へ^{注25}売る」の一文である。焼石灰の本格的商業生産に踏み切ったのは、種崎町的美濃屋忠左衛門と大和屋三右衛門と見られ、其の後の展開に関する文献記載は、非常に重要な多くの内容を含む。すなわち、濃州灰の製造販売の情報を仕入れた両人は、土佐藩に対し「石灰焼き、上方へ指し登り商売したく存じ奉り候…尤も御国に於いて爾来仕成候石灰は貝からにて焼き申し候。私共願ひ奉り候は本石灰にてごぞ候ゆえ、上方へ差し登り商売したく存じ奉り候。御当地石灰屋障りにも成り申さず、其の上小商売しまじく候。石灰屋望み申し候はば相對を以て、卸に商売申す可^{注26}候。」と採石の許可を申請して、同年に石灰製造販売の認可を得ている。この申請書では、従来土佐で製されていたのは焼貝の石灰であるため、既存の石灰屋とは競合せず、しかも出荷先を上方に絞り、既存の石灰屋より要望の有る場合に限って、対等の条件で卸売りに応ずる旨を強調している。その後、石灰の製造業者が増え、製造販売の株も文化十三年（1816）に美濃屋から万屋助八へと移り、文政二年（1819）には桜屋太三衛門に渡っている。この間、万屋助八と組んだ柳屋金十郎の手代慶三が阿波の徳右衛門から石灰製法の秘法を受けたという。

文化十三年（1816）に徳右衛門による「阿州新流伝^{注27}受」の石灰製法を手にした後、早速に生産規模を拡大（資金提供者は桜屋といわれる）する。同年に竈所の隣村の百姓らに対し、阿州讃州の例に習い稲田に石灰を使用するよう勧めるが、「これまで御国に相用い申さざるに^{注28}付き」納得の得られない状況となった。そこで、「万一稲作出来ず候時は其の田地豊作の米数相弁へ申す可く、甚だ該地傷みにも相成り申し候へば迷惑に相成り申さざる様、替地相求め相渡し申す^{注29}誓」という損害時の賠償条件を示した上で、介良、大津、改田、三箇村の五名（介良岩家村 武平、同 団作、同 武右衛門、大津村 恵助、改田村 甚吉）に無償サンプルを提供した。結果は、土地に適合して稲の生育が良く、「確と利益相見え申し候^{注30}」につき、翌寅年（1817）には、介良、大津、改田、五台山、下田の五箇村より郡方へ請願が出され、同年五月二十四日、町方では「年々三月より六月を限り^{注31}」石灰肥料の販売許可を下した。「其の後地売、登り入り合い仰せ付けられ候に限り御座無く年々増長し、売^{注32}り続け申し候」という繁盛ぶりを伝えている。

これらの記述は、基本的に補完、傍証し合う関係にあり、信頼度が高いと考えられる。これによると、土佐藩領内に於ける本石灰の稲田施肥導入は、介良、大津、改田、三箇村の五名に対するサンプル供与の行われた文化十三年（1816）が最初であり、翌文化十四年には介良、大津、改田、五台山、下田の五箇村からの請願によって、毎年三月より六月の期間に限って石灰肥料の販売許可が下っている。その後は増産と増販の一途を辿った。従って、南国市域は土佐藩領内に於ける石灰肥料の早期導入地であり、その普及は文化十四年（1817）以後と判明する。

5. 調査地往時の景観を探る

小籠北遺跡の水田耕作層（便宜上、鋤床を含む）は、直下の火山性黒ボク土とは全く異質のシルト質土壌であり、還元部分では灰～灰白色、弱酸化部分では淡い灰黄色を呈する。鋤返しが深く及んで表層部の成分と黒ボク土の成分が混在する箇所ですら、両者の分離は明晰であり、漸移部分が見られない。さらに、全調査区を通じて近世陶磁を主流とする出土遺物の大半が耕作層に集中し、

それ以下の層位では、黒ボク土上面付近に近世陶磁や近世以前の土器細片を4点数えるに過ぎない。土壤の組成に加え人的活動の影響度の点でも、耕作層と黒ボク土層の間には明瞭な異質性が存在しており、耕作土がかつて外部の遺物包蔵地より搬入された客土であると考えざるを得ない。また、倒木痕跡の凹穴には、直上を覆う黒ボク土が転倒した状態で陥入しており、黒ボク土の成層が倒木以前のものと判明する。更に、倒木痕跡と畝状条溝の交叉箇所では明らかに後者が前者を切っており、畝状条溝の開削時には既に樹木の散立は無い。

時間軸に沿って上記の景観変化を追うと、次の六段階に再現される。第一段階は、長い年月に渡って腐植成分を供給し続けたススキ等の珪酸質草本類が一面の黒ボク土を覆い、恐らくは湯水にも強い種類の樹木が点在する。第二段階は、草本類の除去と倒木であり、地表に黒ボク土が剥き出しとなる。第三段階では、畝状条溝として痕跡を留めるに至った畑が設けられる。至近の位置に屎尿を貯溜する厠が存在した可能性が高い。^{注34}畑作物としては、まず穀豆や煙草・疎菜類等が有力であろう。第四段階では、付近に灌漑用水溝が引かれる。水路跡と見られるV区南部のSD-501がその一部であろう。第五段階では、畑地から水田へと転換し、畑畝を平らに均して平坦とした黒ボク土の上に、より気密性の高い、シルト優勢の土壤が、水田耕作土用として何処かの人家付近から搬入され平らに盛土される。灌漑水が取り入れられ、石灰質の肥料が施された可能性も考えられる。第六段階は、水田区画の一部がビニールハウスによる疎菜園芸やユリ栽培に転換する時期であり、これが現代に当たる。

上記のように推定される景観変遷の内、第一段階は未開の荒れ野である。第二段階から三段階に至る経過は、長岡台地の開墾を通じて最も基本的な一連の変貌と見られ、倒木痕跡の実態を農耕の障害となる樹根を逸早く抜去した形跡と捉えるのが最も現実的であろう。付近での灌漑用水溝の開通を開墾後の第四段階に想定した理由は、V区南部において畝状条溝群を用水路跡SD-501が切る平面形状による。この小籠北遺跡を灌漑し得た用水溝水系は、寛永16年（1639）に竣工した中井川であることから、第四段階までの景観変貌を、中井川竣工前後の短期間に想定し得る。特に問題となるのは、畑地から水田へと変貌する第五段階の時期である。小籠北遺跡調査区という、いわば局地的部分の土地利用に関する最古の記録としては、明治22年に高知縣長岡郡長岡村役場が編纂した『小籠北分訂正地圖簿』^{注35}（Fig. 26）を数えるのみであり、当時既に現在とほぼ同じ方位の地割りが出来ており、取水経路も現在に近いものと考えられる。

調査Ⅰ～Ⅳ区が所属する字三ノ堀では、神地1・宅5・畑2箇所以外は全て「田」と記載し、調査Ⅴ区が所属する字佐波爲では、神地1・宅3・畑1箇所以外は全て「田」と記す。両地区合わせて既に水田面積が約95%を占め、畑は僅かに1.4%前後を占めるに過ぎない。字佐波爲と字三ノ堀を南北に隔てる街道は、藩政時代の面影を留めるものと見られ、ほぼ現在の県道後免中島高知線の位置にある。これらの状況から、第五段階における転換時期の大枠は、一応17世紀中葉頃から19世紀末頃と想定される。次に、搬入された耕作土に含まれる遺物150細片（基本的に表部攪拌層所属のため、Ⅰ層、Ⅱ層および表採資料を一括して計数）の内、84点が近世から近代初頭頃にかけての製品であり、その多くが、概ね17世紀後半から19世紀前半頃の年代範囲に比定される。地表に露出する耕作土の性格から後世新たに混入したケースも当然有り得るため、必ずしも後出の資料が耕作土搬入の時期

を示唆するとは限らない。しかし、これら雑然とした遺物細片を含む耕作土自体に再び目を向けると、この種の気密性が高めでバン土性^{注36}の低いシルト質土壌の搬入盛土には、黒ボク土水田で生じる初期生育の不良を回避するとともに、漏水を抑制する効果があり、理化学的に適切な措置と言える。先に見た香長平野で石灰肥料が普及する文化十四年（1817）以後ともなれば、黒ボク土の扱いにくさに対するこの種の措置も、あるいは可能であったと思われる。葉山禎作氏は『農書からみた近世農業技術^{注37}』の中で、天保10～13年（1839～42）に福島貞雄が著した『耕作仕様書』に、江戸周辺の農業を基盤にした稲作の元肥・追肥時期に関する実験を記す点を引き、「幕末期の小農技術は、小農技術の枠組みのなかで、科学的実験に類似した実験を行なうほどの水準に到達していた^{注38}」と結論している。石灰肥料の普及は、既存水田の生産性を高めたばかりか、従来水田経営が不可能ないし困難と見られた土地にも、その可能性を開くものであった。長岡台地のような本来畑作指向の土地も、その好例であった点には、疑う余地がない。

以上の状況を総合すると、古来より一片の荒野であった今次調査対象地区は、恐らくは寛永16年（1639）の中井川竣工の前後より畑地化し、香美郡において石灰肥料が普及する文化十四年（1817）以後に水田として改耕され、今日に至ったものと推測されよう。

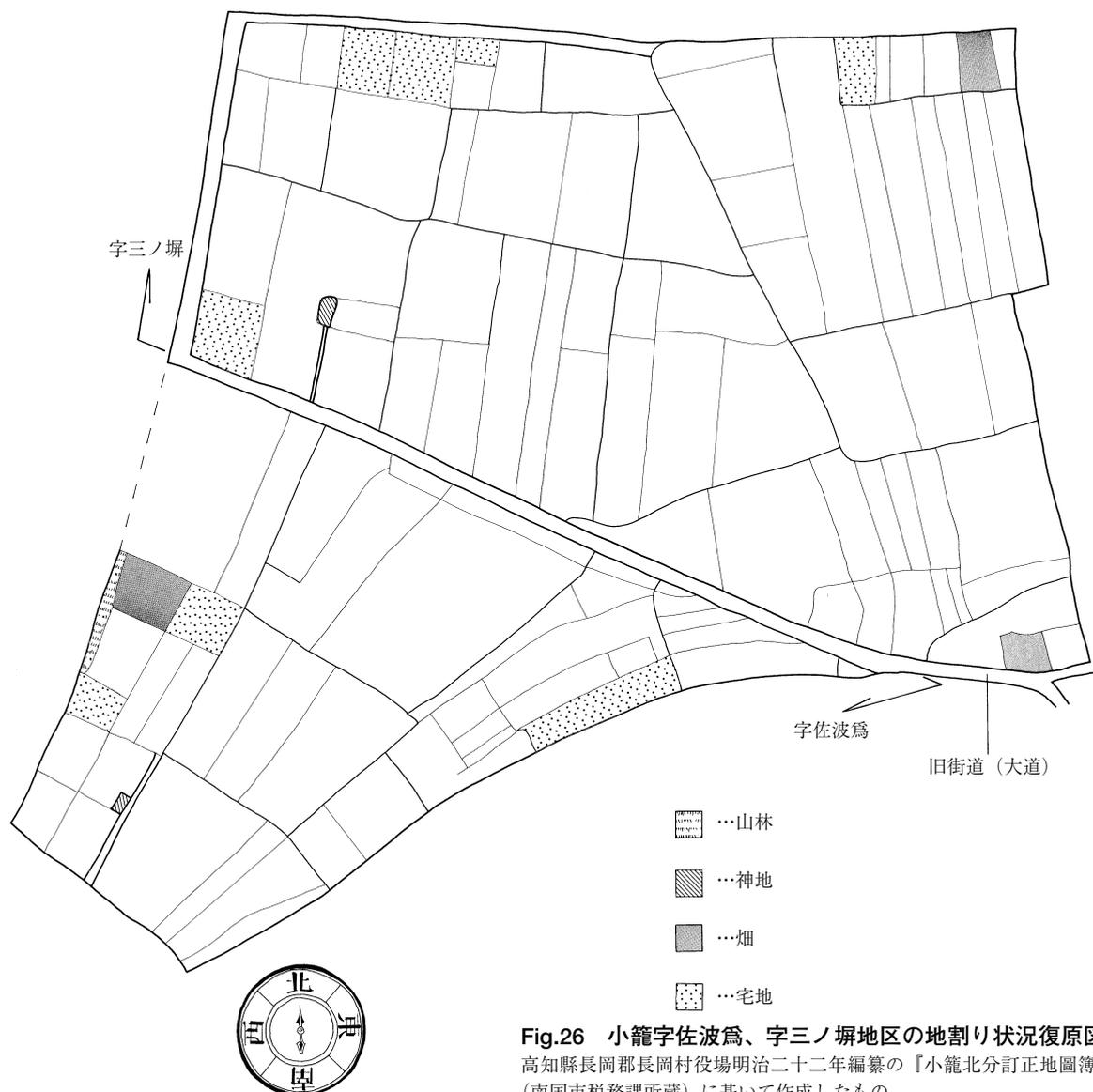


Fig.26 小籠宇佐波爲、宇三ノ堀地区の地割り状況復原図
高知縣長岡郡長岡村役場明治二十二年編纂の『小籠北分訂正地圖簿』
（南国市税務課所蔵）に基いて作成したもの。

6. まとめ

平成6年度から7年度にかけて実施された過去の「小籠遺跡」発掘調査では、今回調査対象となった小籠北遺跡との地形関係で言えば、扇状台地末端の緩斜面を南南西の方向に降った舟入川北岸の地区を対象とした。I区～VII区に区分した対象地区の標高は6～7mの低い水準にある。I区の調査では、弥生から古墳時代にかけての遺構、遺物が出土したほか、倒木痕跡と酷似する6～7箇所の異相部分の中には、弥生後期の溝に切られる例も存在した。また、II区の調査では、弥生時代から古墳、古代、中世を経て近世に至るまでの数多くの遺構や遺物が出土し、近世では、灌漑用の溝と考えられる幅50～60cm前後の条溝も検出されている。陶磁器類を中心とする近世遺物の年代は、17世紀初頭から19世紀に渡る。V区では、17世紀代の畝跡と想定される幅24～48cm程度の条溝群が検出されたほか、やはり倒木痕跡と同様に無遺物の異相部分が5箇所見つかっている。

これらを通観すると、今回の小籠北遺跡発掘調査で検出された畝状条溝群、用水路跡、倒木痕跡のいずれも過去の小籠遺跡発掘調査で検出されたものに同じ類型を見る。このことは、上項で推測した近世に於ける局地的な景観の変遷が、実は断続的ながらも相当な面的規模で展開していた可能性を示唆する。また、実掘した約4,000m²の水田耕作土下に埋もれた近世の畑跡は、台地の灌漑網が整備された段階ですら、畑耕が尚も相当な割合で長期継続した可能性に目を向けさせる。さらに、水田化の前提として畑耕を経由し、実際には地形や土質及び取水の便等の諸状況に応じた適地栽培型耕作を基礎に、歴史過程の中で水田の分化が進んだと想定する仮説検証作業も必要となろう。この視点は、近世小籠村に関する文献史料および史料研究の中で指摘された幾つかなの特質に新たな側面と解釈の可能性を添えるものとなる。

文献調査による近世小籠村村落の景観復元は、平成6～7年度の小籠遺跡発掘調査を機に、行藤たけし氏が既に試みており、基礎となった収集史料や考証の成果が『文献調査から見た小籠遺跡』として同発掘調査報告書『小籠遺跡Ⅲ』^{注39}に収録されている。この中で指摘される近世小籠村の特質要素を、(a)地理環境、(b)既拓面積、(c)人口、(d)職業、(e)牛馬の5項目に分類して概要を列記すると次の状況となる。

(a) 「藩政時代の小籠村絵図面の写し」^{注40}の検証による小籠村の景観は、北に主要街道（大道）、南に舟入川を控え、その間に水路が通じる交通の便宜な村であった。

(b) 本田地石高の上昇は、寛永19年(1642)の505石9斗3升^{注41}から天保5年（1834）の531石2斗9升^{注42}に至る間に約5%の増加に止まる。また、本田地高に対する新田地高の割合を唯一算定し得る元禄11年（1698）頃の状況は、本田521石7斗9升^{注43}に対して新田4石9升3合^{注44}にすぎず、わずか0.78%の比率は旧岡豊村中（平均11%）でも極端に低い数値を示す。これは、中世段階で開発がほぼ終了していた結果と考えられる。

(c) 寛保3年(1743)と明治5年(1872)の比較では、戸数^{注45}から^{注46}に、人口（子を含む親族数と解釈される）^{注47}から^{注48}に変わり、近世から近代にかけて確実な増加を示す。

(d) 類推史料として、明治5年の上記81戸89世帯の職業別人数が挙げられ、内訳は農業52、雑業10、紺屋2、商品販売2、鍛冶4、士族18であり、農業、雑業、士族が圧倒的に多い。しかし、農業世帯の割合は58%と相対的に低い。

(e) 「御国七郡郷村牒」^{注50}では、戸数62の寛保3年(1743)における馬数が32であり、およそ2軒あたり1頭の高い保有率を示す。これに対して牛数は0である。

文献調査を通じて近世小籠村村落の特質に挙げられる以上の諸点は、同村落の農業形態が近世中期あるいは後期に至るまで、沢田による稲作のほかは、畑耕が主体であったと仮定する場合、次のように傍証・補完し合う関係にある。

まず、地理環境面で指摘される水路網の整備や交通の便宜は、近世の新田開発事業以前からの自然地勢を活用したものであり、中世段階でも要衝の役割を担っていた。このことは、今回調査したⅠ～Ⅳ区に城館の外周としての履歴を示す「三ノ堀」の小字が残る点からも容易に知れる。また、小籠北遺跡自体、年越山の北西麓に位置し、多少の沢水や伏流水の恵みを受ける。従って、新田開発事業の以前から、沢田による稲作や畑作は可能な条件にあった。この地理的条件によって、中世から近世初頭に開発が先行していた結果、寛永19年(1642)以後の地石高に停滞を来したものであろう。寛保3年(1743)における一戸当たりの人口が3.77人と少ないうえ、明治5年時点の世帯職業構成から類推される農業人口の低さは、一般に水田耕作より低い畑作の労働集約度と矛盾しない。また、牛馬の数値のアンバランスも、上の諸点に関わると考えられる。小籠村の南には、舟入川が高知城下に向かって流れており、さきに引用した川添陽氏の記載に基けば、船入川の兩岸各地に設けられた二十数軒の船屋(かなや)と称する船問屋に、馬載貨物が運び込まれている。2軒あたり1頭の高い馬保有率と街道筋の立地から、運送従事者の存在が考えられよう。牛の無保有は、通気性が良好で有効土の薄い土層を相手とする浅耕型畑作による必然の結果と考えられる。

以上、今回の小籠北遺跡発掘調査で得た資料を基に、物理的に無理な要素を前提から排除しつつ、検出した畝状条溝群を中心に地域史の位置づけを試みた。時間的空間的な広がりを持つ歴史の実像に対し、発掘調査は局地的な地下の探索であり、いわば平面上の「点」についての情報を深める作業である。ここに姿を表わした倒木痕跡を覆う畑跡と、更に畑跡を覆う近世来の現営水田は、17世紀初頭から土佐藩各地でも大規模に展開した新田開発事業の名残と見られ、「点」の探索から文献史の「空間」と接触する場面を得た。とはいえ、接触面は極限的であり、地質、土壌、農学や文献史的視点の援用にも限界がある。また、局地的調査によって確認された荒地の開墾による畑地化と水田への転化という近世初頭来の事象自体、基本的には中近世における地域的な耕作立地推移の中で意味を問うべきテーマであるが、今後の課題として残される。

葉山禎作氏は当時の一般的な「農業立地の好条件」^{注51}として、先に挙げた『清良記』の「第七卷・親民鑑月集」^{注52}に記す次の宗案の言に注目する。すなわち、「上農は居所を専らにする事、武家に究境の城郭を構えらるる如く、上分の居所は、後に山を負うて、前に田をふまへ、左に流を用ひて、右に畑を押へ、親譲りの地方を屋敷廻りに控えて居らされは、耕作心の儘には成り申さず候。」^{注53}というくだりであり、武家が死守の城郭を構えるように上農は山裾に屋敷を構え、その前方に水田、左に沢流、右斜面に畑、屋敷の周囲に先祖伝来の田畑を廻らすことが肝要とする。この山野と溪川の端境に立地する条件を、葉山氏は「ひとり四国伊予だけのものではない。戦国末から近世初頭にかけて、かなり一般的に見受けられた農村の景観」^{注54}と指摘している。この視点から改めて四国土佐における長岡郡小籠村の景観を見直す時、扇状台地に在りながら、その北東部を年越山が占める地形は、

屋敷田畑の適地としての条件を具えることに気付く。

中世末の有力領主による一円支配と、それらを再編統合した幕藩体制下に展開する大規模新田開発は、換言すれば屋敷田畑適地の拡張であり、山野と溪川の端境である扇頂部付近から台地を経て沖積低地に向かう。その工程は、堰や水路の開削と荒地開墾を核とする一連の土木工事であり、長い年月をかけて農地の整備や家屋の建設が進行する。この未整備な状況下に、少なくとも初期段階で即効力を発揮するのは、集約度の高い水田よりも、むしろ分散型の環境に適応し得る畑作であったことを、畝状遺構群は示していよう。

注

注1：黒ボク土。 降下火山灰を母材とし、腐植の集積によって黒色化した火山灰土（ローム）である。腐植の集積は火山灰の風化過程で生じる活性アルミニウムが腐植と反応し、安定した結合体を蓄積することによる。黒ボク土の中に火山灰を母材としないものも存在するとして、それらを「非火山性黒ボク土」と称する場合もある。

注2：プリニー式噴火。 珪酸分の多い低温マグマと大量のガスによって引き起こされる大噴火であり、巨大火砕流を生じて高い噴煙柱を上げ、広域に渡って火山碎屑物を降らせる。このタイプに属するヴェスビオ火山の噴火が小プリニーによって記録されたことから、プリニー式、あるいはプリニアン噴火とも称される。

注3：バブルウォール型火山ガラス。 噴火の際に液相マグマが発泡飛散して形成される裂泡片であり、湾曲した薄いガラス片として観察される。

注4：広域テフラ。 火山の噴火によって飛散する固体の物質片をテフラと称し、火山碎屑物あるいは火砕物を指す。これらのうち、広い範囲に運ばれ降下堆積するものを広域テフラと称する。また、テフラのうち、径2ミリ以下の粒子を火山灰とする。

注5：町田洋・新井房夫・森脇広著『地層の知識』東京美術 平成5年、p106

注6：燐酸欠乏症。 葉の伸展に障害を来す結果、クロロフィルの密集によって濃緑色を呈する。

注7：アロフェン。 非晶質の粘土鉱物であり、微細粒子による中空球状の集合体である。ケイばん比は1.0～2.0の範囲にある。

注8：有効態燐酸。 作物が吸収可能な可給態燐酸であり、カルシウム型燐酸がこれに属す。

注9：燐酸固定。 燐酸が土壌中の活性アルミニウムや鉄と結合して難溶化する現象を指す。

注10：山根一郎著『地形と耕地の基礎知識』農山村文化協会 昭和60年、p140。

注11：山根一郎著『地形と耕地の基礎知識』農山村文化協会 昭和60年、p140。

注12：渡邊善次郎著『近代日本都市近郊農業史』論創社 1991年、p11。

注13：渡邊善次郎著『近代日本都市近郊農業史』論創社 1991年、p10。

注14：『清良記』全30巻。16世紀後半に伊予国三間を領した土居清良の一代記であり、巻七が日本最古の農書といわれている。

注15：渡邊善次郎著『近代日本都市近郊農業史』論創社 1991年、p11。

注16：渡邊善次郎著『近代日本都市近郊農業史』論創社 1991年、p87。

注17：オスカル・ケイネルと森要太郎両名による日本人の尿尿に対する化学分析の目的は、「日本は家畜を飼養すること未だ充分発達せざるを以て、堆積肥を用ふること少なければ、直接肥料の第一位を占むるものは人糞なれば、之れが験究最も必要なり。爰に於てオ・ケルネル及森要太郎の両氏は、人糞の価値を定めんが為め食物を異にする日本各種人民の糞尿を分析し、以て其価値を規定せり。」とうたわれている。

注18：渡邊善次郎著『近代日本都市近郊農業史』論創社 1991年、p87～91。

注19：平尾道雄著『野中兼山と其の時代』高知県文協教会 昭和45年、p110、『偉人野中兼山』を参考とした数値。

注20：南国市史編纂委員会編『南国市史・下巻』・第1章「近世前期」p22～23（執筆 山本大）。

- 注21：川添陽著『野中兼山』社団法人高知県教育会 昭和10年（昭和12年発行の改訂版p85）より引用。
- 注22：同上（昭和12年発行の改訂版p95）より引用。
- 注23：同上（昭和12年発行の改訂版p94～p95）に基づく。
- 注24：南国市史編纂委員会編『南国市史・下巻』・第2章「近世後期」第5節「産業の発達」 「石灰製造」の項p22～23（執筆 山本大）。
- 注25：同上資料p141,『南路志』からの引用。
- 注26：同上資料p142,『山内家文書』からの引用。「石灰焼, 上方へ指登商売仕度奉存候。…尤於御国爾来仕成候石灰は貝からにて焼申候。私共奉願候は本石灰にて御座候故, 上方差登商売仕度奉存候。御当地石灰屋障りにも成不申, 其上小商売仕間敷候。石灰屋望申候はば相對を以, 卸に商売可申候。」
- 注27：同上資料p144,『入交家文書』中の語句。
- 注28：同上資料p144,『入交家文書』からの引用。「是迄御国に相用い不申に付」
- 注29：同上資料p144～145,『入交家文書』からの引用。「万一稲作不出来候時は其田地豊作之米数相弁へ可申, 甚該地傷みにも相成申候へは迷惑に相成不申様, 替地相求め相渡申等を以て…」
- 注30：同上資料p145,『入交家文書』からの引用。「確と利益相見へ申候より…」
- 注31：同上資料p145,『入交家文書』からの引用。「年々三月より六月限」
- 注32：同上資料p145,『入交家文書』からの引用。「其後地売, 為登入合被仰付候而限無御座年々増長仕, 売続申候」
- 注33：地学団体研究会編『地表環境の地学』東海大学出版会 1994年, p162～163（細野衛執筆）を参照。
- 注34：渡邊善次郎著『近代日本都市近郊農業史』論創社 1991年, p10のフロイス『日欧文化比較』要約箇所を参照。
- 注35：『小籠北分訂正地圖簿』高知縣長岡郡長岡村役場, 明治二十二年編纂（南国市税務課収蔵）。
- 注36：バン土性. アルミニウムの活性化しやすい性質。
- 注37：葉山禎作執筆『農書からみた近世農業技術』（『日本の近世-4』中央公論社1992年に収録）
- 注38：同上, p 209～210。
- 注39：高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第29集『小籠遺跡Ⅲ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター, 1997年; 行藤たけし執筆『文献調査からみた小籠遺跡—小籠村落景観の復原』は同報告書の第Ⅳ章-6としてp200-207に収録している。
- * 以下, 同文末の行藤氏注記より引用する出典には, 末尾に(行藤)を付する。
- 注40：『岡豊村史・写真集（下）』（岡豊村史編纂委員会, 昭和34年）には, ほぼ同図案・異筆致の「藩政時代の小籠村絵図面の写」が掲載されている。これは筆致からみて原本ではないが, 記述は掲載絵図よりも若干細かいため, より原本に近い可能性も有る。(行藤)
- 注41：『南路志・闔国部』。(行藤)
- 注42：『天保郷村帳』内閣文庫所蔵。(行藤)
- 注43：『長岡郡本田新田地払帳』谷家文書・甲藤勇氏所蔵。ロバーツ・ルーク氏によると（『土佐史談』181号）, 本資料は元禄11年-12年間の状況を示すものであるという。(行藤)
- 注44：同上。(行藤)
- 注45：『御国七郡郷村牒』寛保3年(1743);原本は戦災で焼失。『土佐史談』(83号)「土佐藩郷村調査書」より。(行藤)
- 注46：『岡豊村史』481頁。(行藤)
- 注47：『御国七郡郷村牒』寛保3年(1743);原本は戦災で焼失。『土佐史談』(83号)「土佐藩郷村調査書」より。(行藤)
- 注48：『岡豊村史』481頁。(行藤)
- 注49：同上。(行藤)
- 注50：『御国七郡郷村牒』寛保3年(1743);原本は戦災で焼失。『土佐史談』(83号)「土佐藩郷村調査書」より。(行藤)
- 注51：葉山禎作執筆『農書からみた近世農業技術』（『日本の近世-4』中央公論社1992年に収録） p171,

項目名「農業立地の好条件とは」。

注52：『清良記』全三十巻中の巻七であり、『親民鑑月集』とも呼ばれる。16世紀後半に伊予国 三間の中央部を領していた土居清良が領内農業の実態を諮問したのに対し、在地の老農・松浦宗案が答申する形式で書かれる。

注53：葉山禎作執筆『農書からみた近世農業技術』（『日本の近世-4』中央公論社1992年に収録）p171の引用文より。

注52：同上，p172。

写真図版



小籠北遺跡調査区遠景（土佐希望の家方面より北西麓を望む）



小籠北遺跡調査区全景（土佐希望の家方面より北西麓を望む）



I区TR-101北壁の地層断面（北東を望む）



I区遺構検出作業（東を望む）



I区北東角部畝状条溝群の検出状況（西を望む）



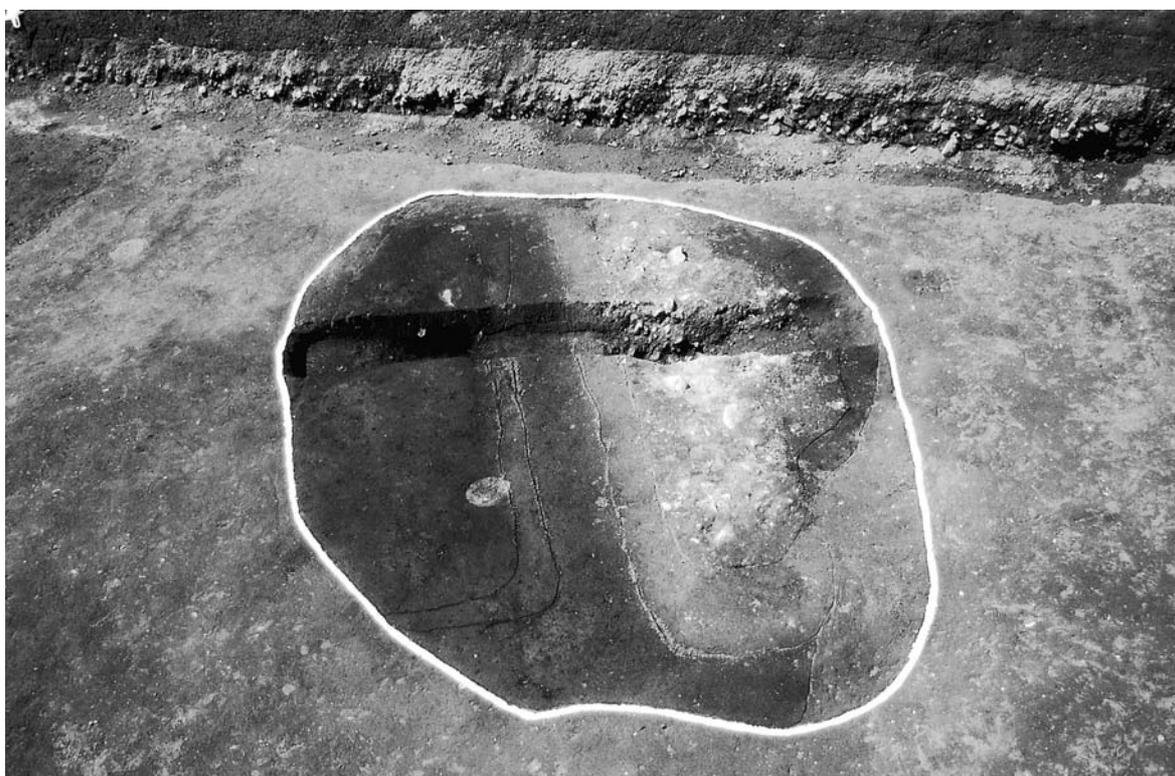
I区畝状条溝群の完掘状況（西を望む）



I区畝状条溝群の完掘状況（北を望む）



I区畝状条溝群の完掘状況（東を望む）



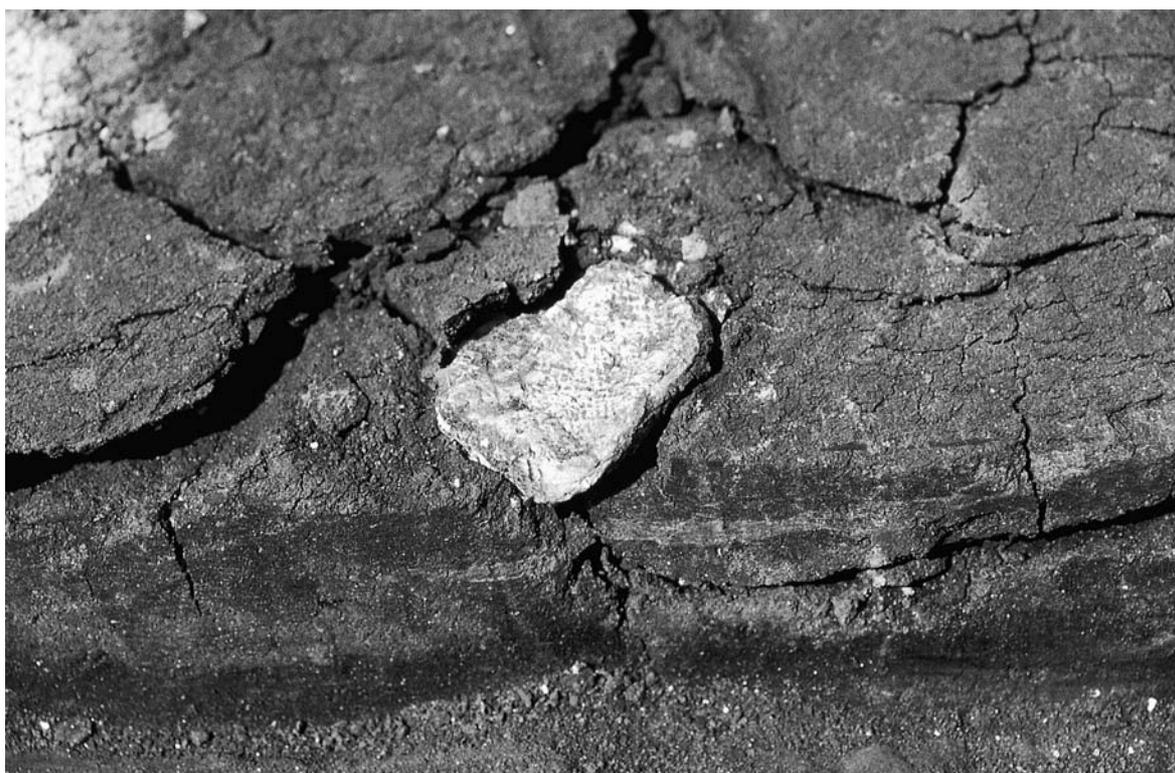
I区SX-101 (倒木痕跡) へのトレンチ開削状況 (北を望む)



I区SX-102 (倒木痕跡) の半截状況 (南を望む)



Ⅱ区調査前の風景



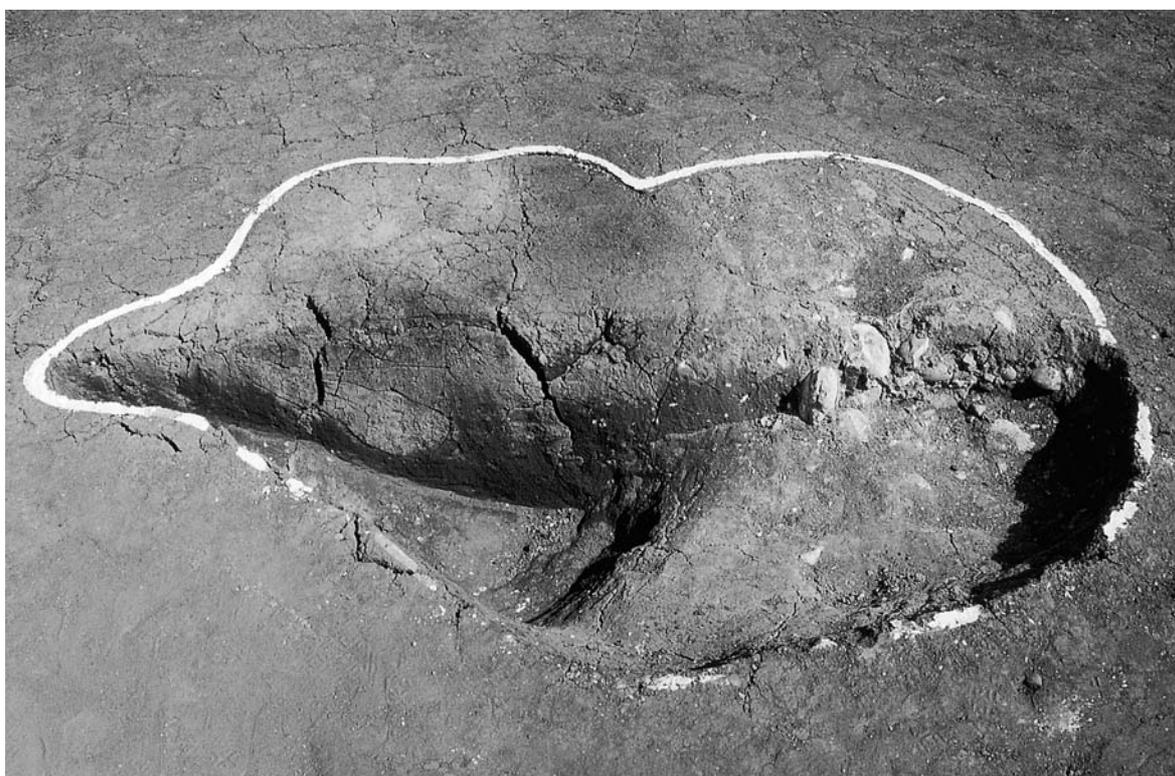
Ⅱ区D-218埋積土上面での土器片出土状況（北を望む）



Ⅱ区D-219埋積土上面での土器片出土状況（北を望む）



Ⅱ区畝状条溝群の完掘状況（北を望む）



Ⅱ区SX-201（倒木痕跡）の半截状況（南東を望む）



Ⅱ区SX-202（倒木痕跡）をSD-310が切る状況（写真右下）



Ⅲ区畝状条溝群の手掘り作業（南を望む）



Ⅲ区畝状条溝群の完掘状況（北を望む）



IV区現代ユリ畑の畝跡（南を望む）



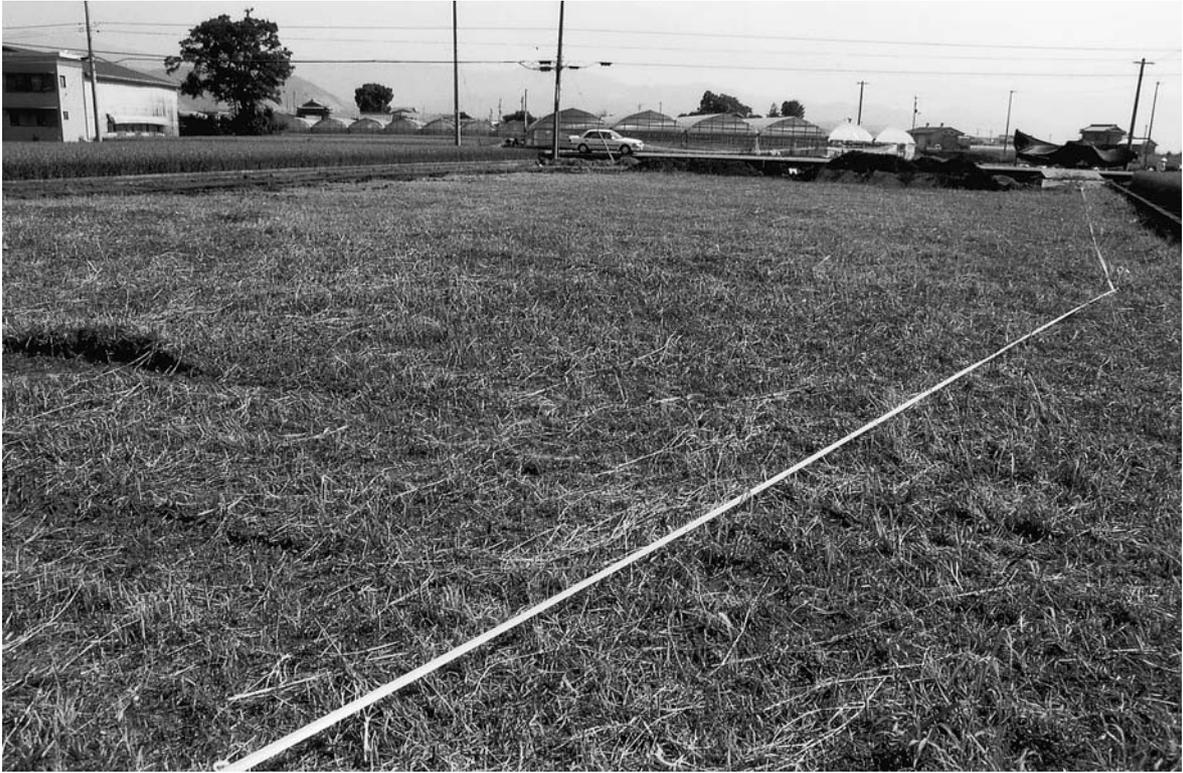
IV区畝状条溝群の検出状況（北東を望む）



IV区Ⅲ層上面での土器片出土状況



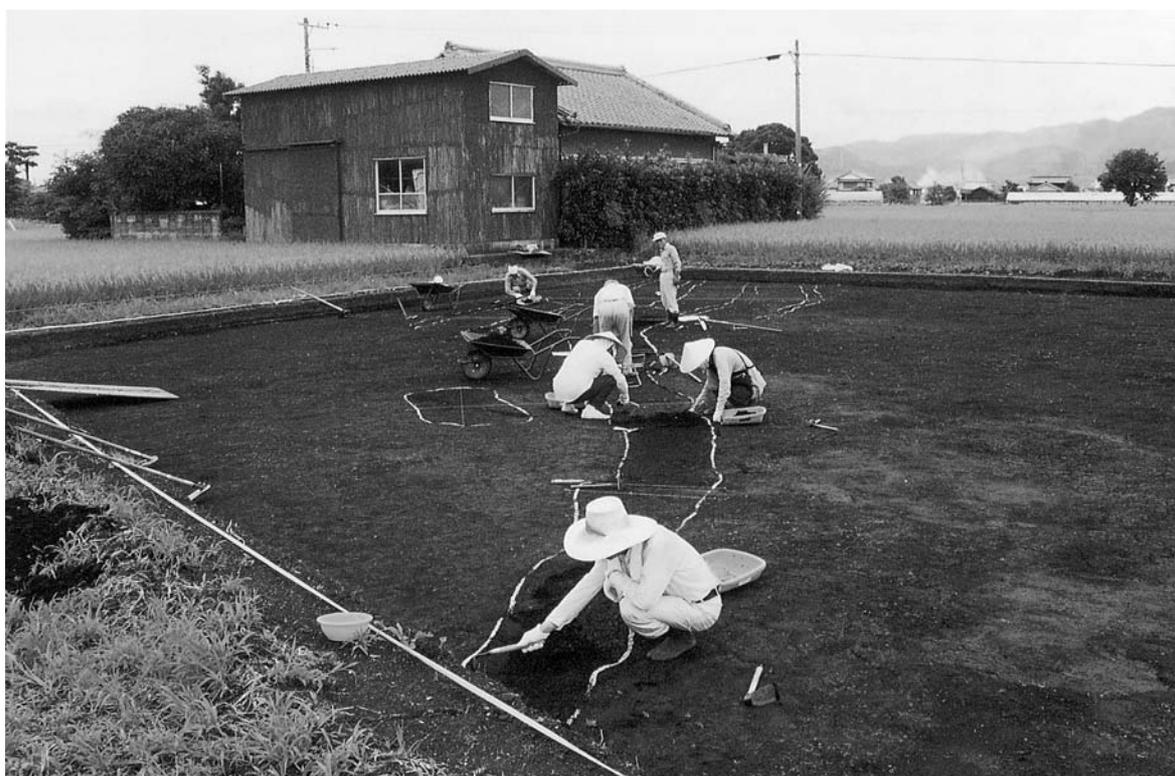
IV区畝状条溝群の完掘状況（南を望む）



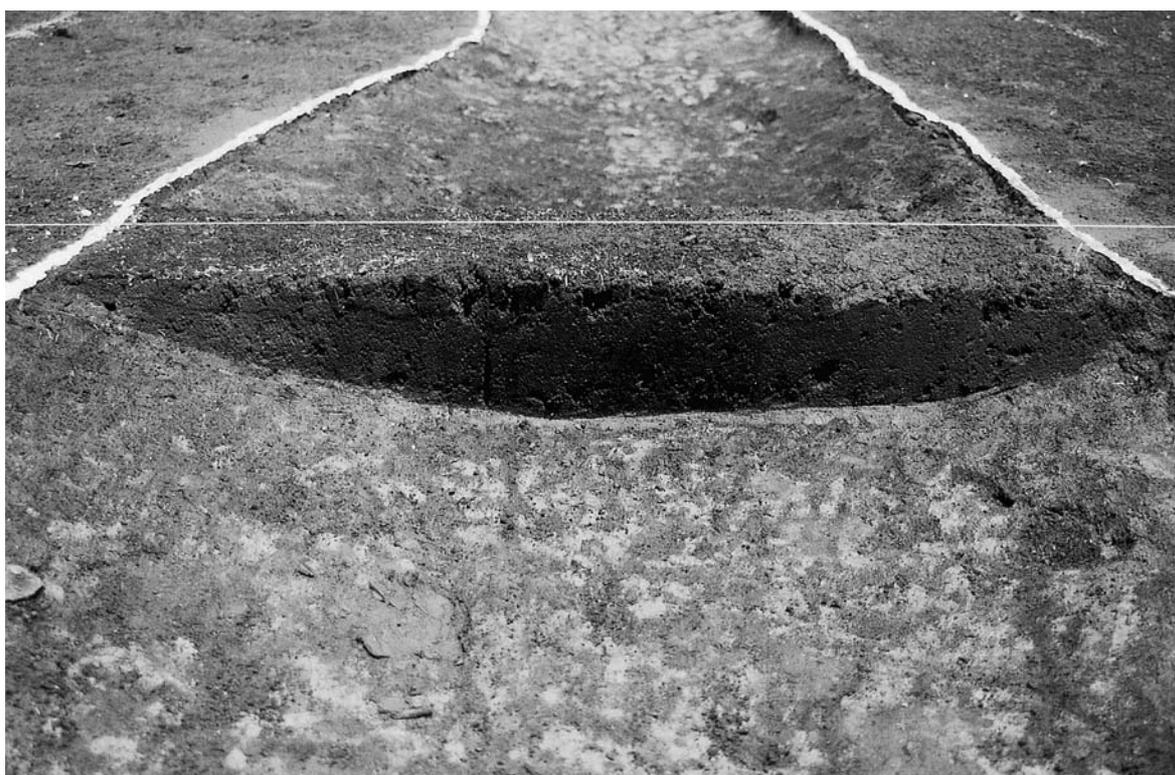
V区調査前の風景（北を望む）



V区TR-501西壁の地層断面（北西を望む）



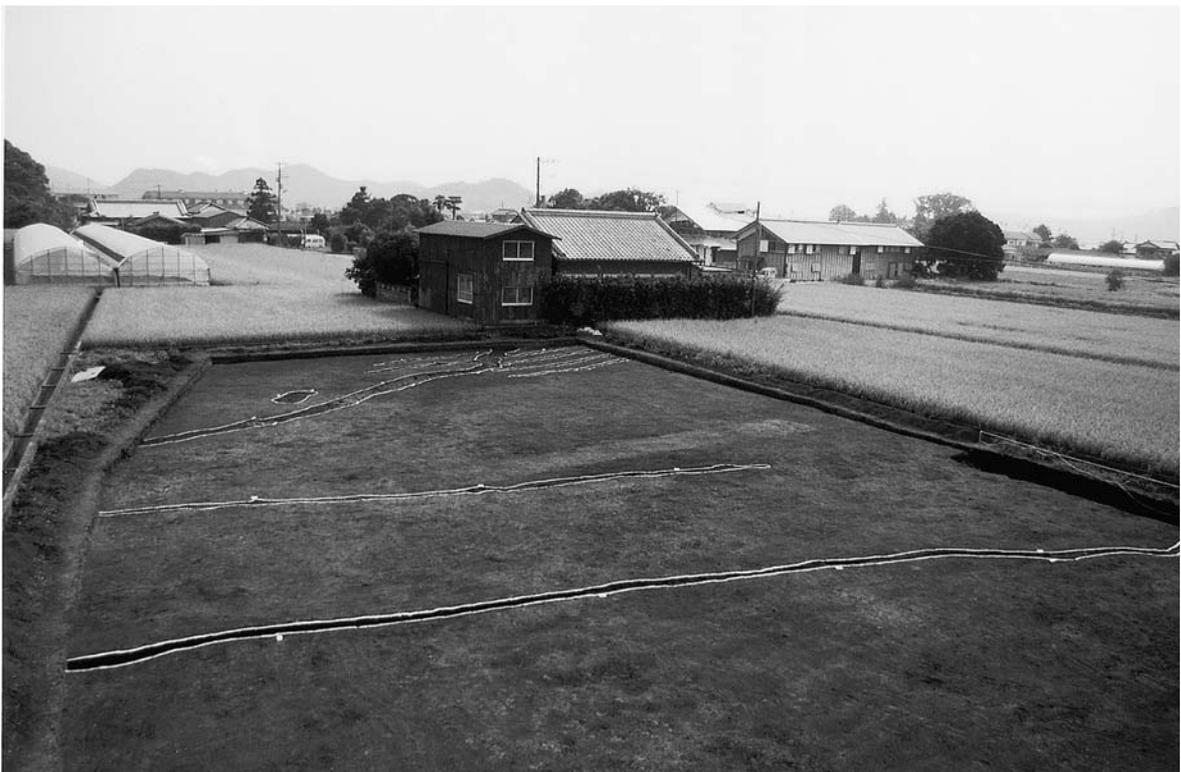
V区水路跡SD-501の手掘り作業（西を望む）



V区水路跡SD-501バンク西壁（EP-507サイド）



V区畝状条溝D-501の完掘状況（西を望む）



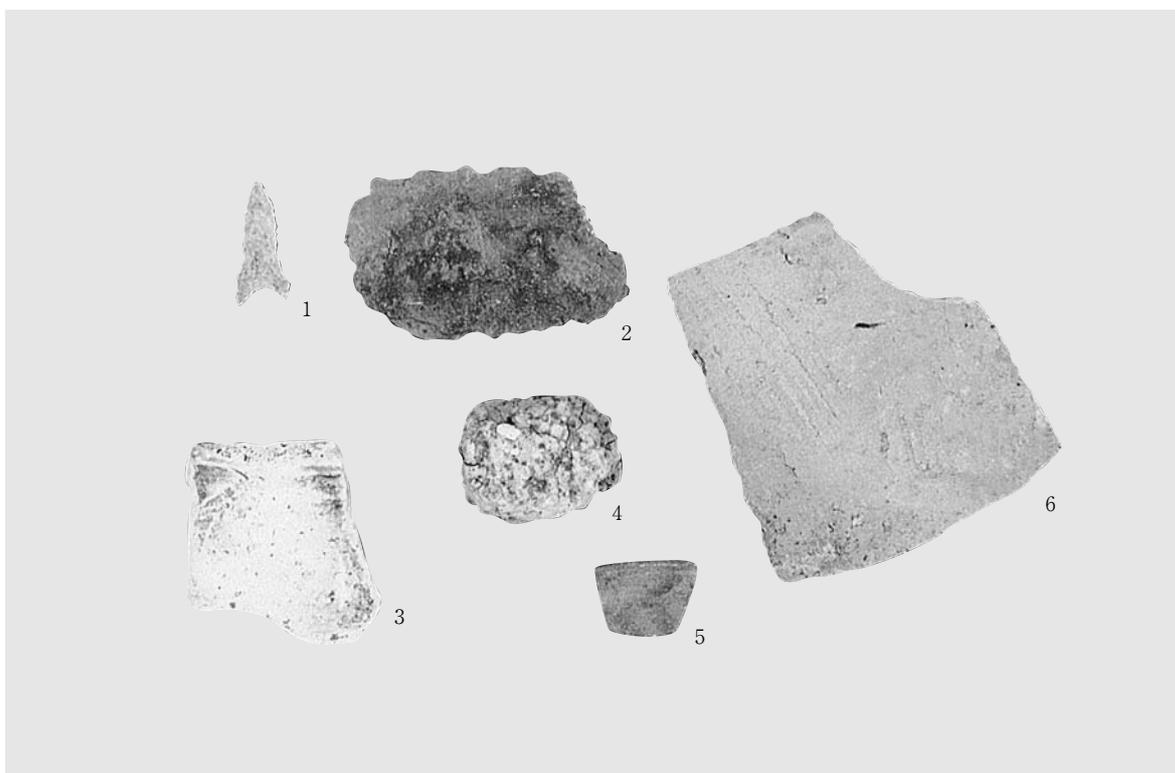
V区条溝群完掘状況（南を望む）



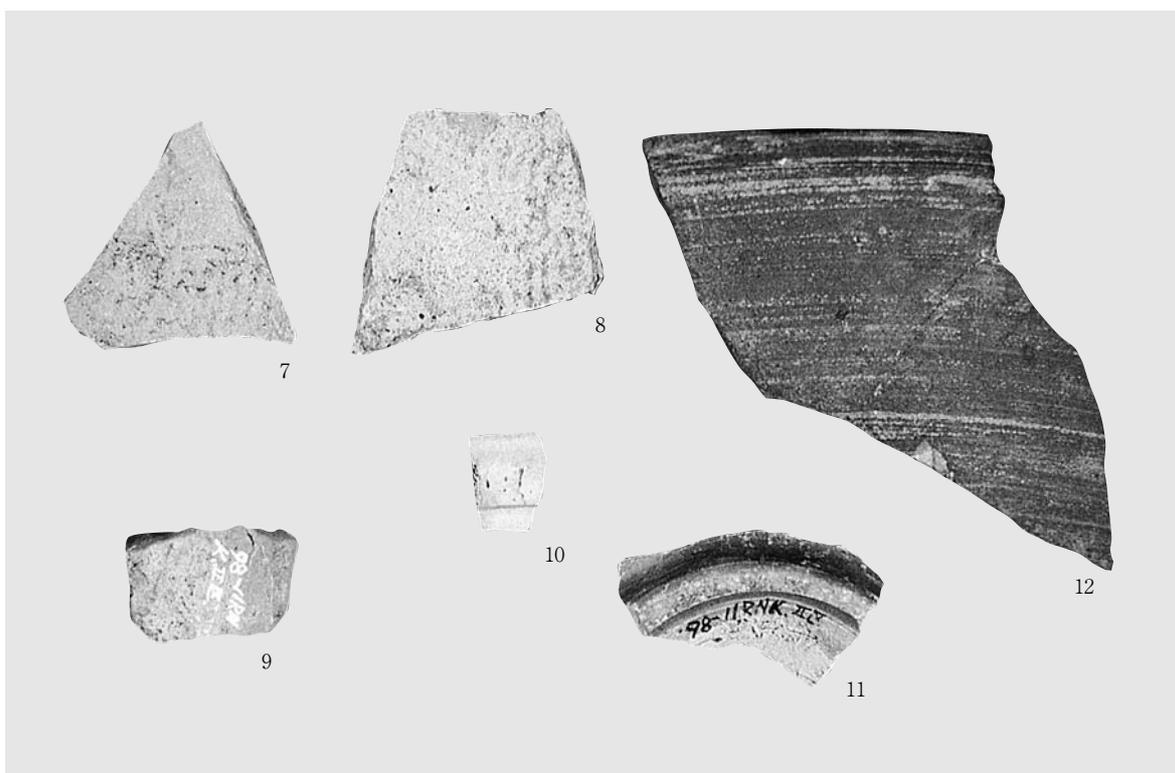
V区条溝群完掘状況（東を望む）



石鏃とその採取地点に開削した小トレンチ（東を望む）

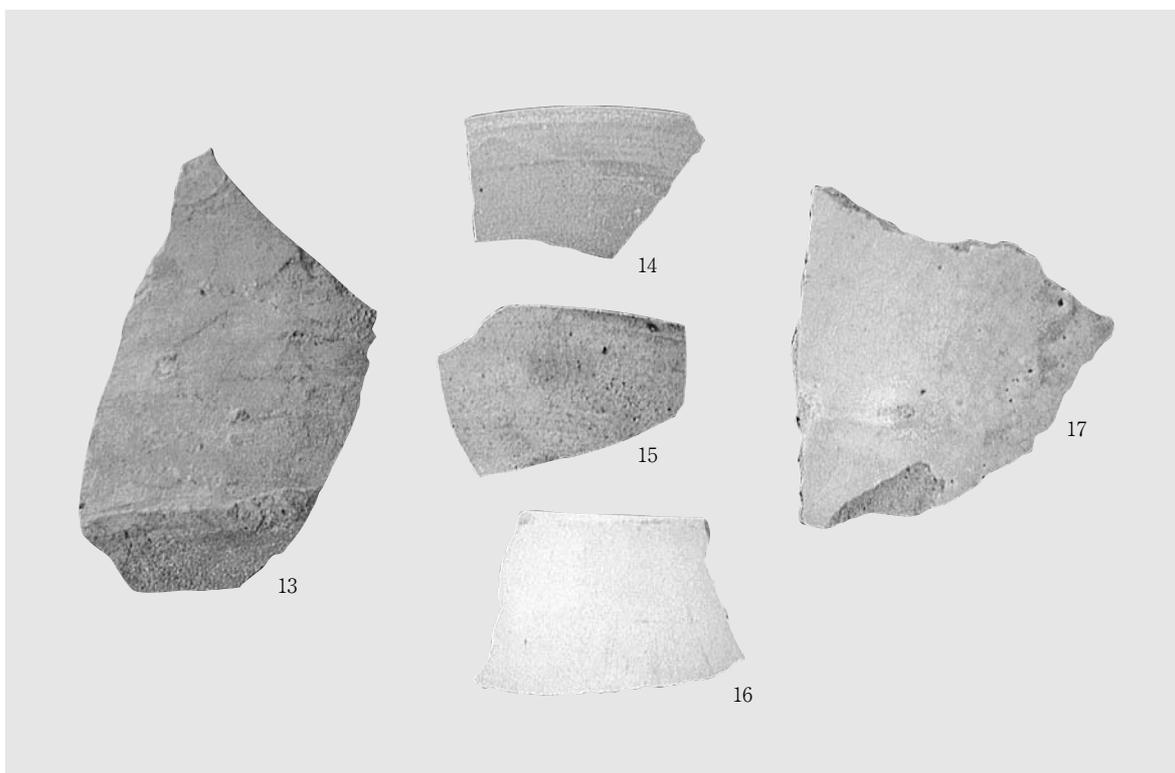


(外面)

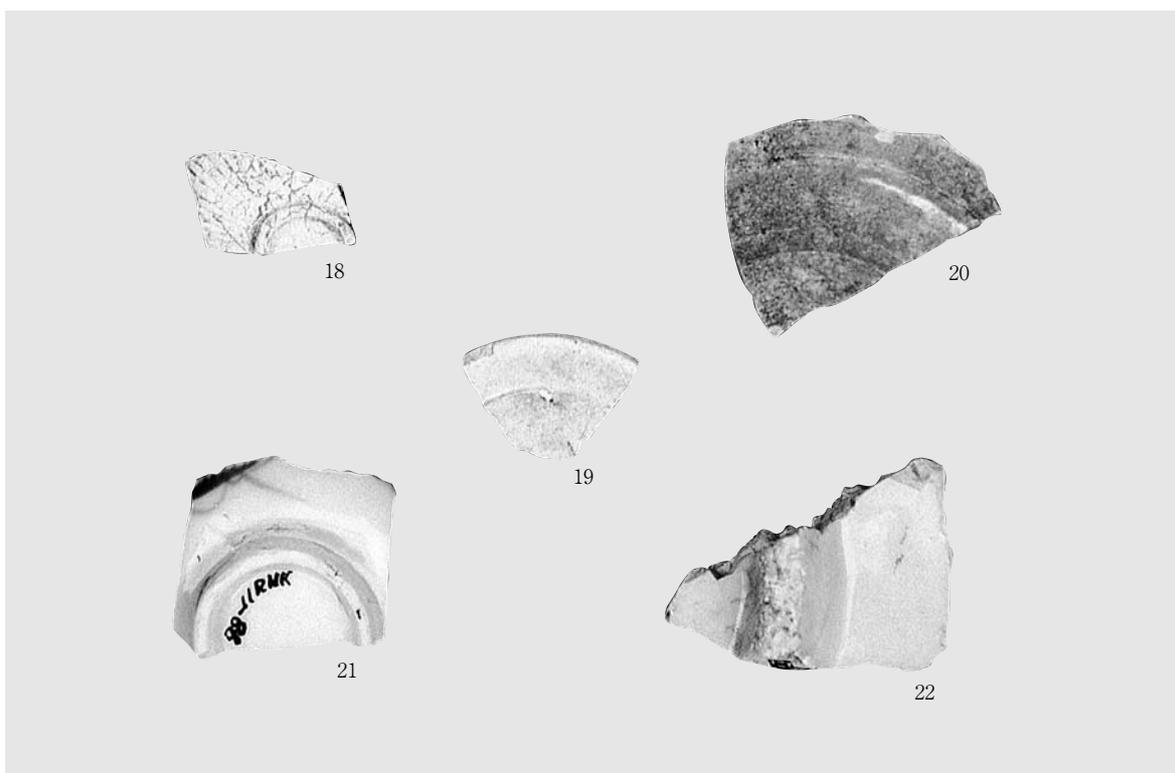


(外面)

出土遺物1



(外面)



(外面)

報告書抄録

ふりがな	こごめきたいせき							
書名	小籠北遺跡							
副書名	あけぼの道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	山本哲也・小嶋博満・武吉眞裕							
編集機関	高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL(0888-64-0671)							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こごめきたいせき 小籠北遺跡	高知県南国市 岡豊町小籠	3904	040171	33° 34′ 50″	133° 38′ 10″	1998.06.08 ～ 1998.09.11	4,000m ²	国道195号 線改良工事 に伴う事前 の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小籠北遺跡	散布地	中世・近世	溝・畝状遺構 倒木痕跡	石鏃・弥生土器 土師器・国産陶 磁器等				

小 籠 北 遺 跡

(あけほの道路建設工事に伴う発掘調査報告書)

1999年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
発行 高知県南国市篠原南泉1437-1
Tel. 0888-64-0671
印刷 共和印刷株式会社